これはやう〳〵數株ばかりの落花と圍える。その構想こそほゞ似てゐるが、風情は劣つてゐる。

櫻の花の散り侍りけるを見てよめる　そせいほうし

花散らす風のやどりはたれか知るわれに教へよゆきて怨みむ

鑑賞 ○散り侍り　この「侍り」の敬語はないがよい。○やどり　宿所。

大意 このまあ花を散らす風の奴の宿所は、誰れぞ知らぬかえ、知つた者あらば自分に教へてくれよ、さらばそこに往つて思ふ存分怨をいはうわ。

評 颪風一陣紅を墜し白を零す。眞にこれ無慘の極遺恨の限である。忽ちこの憎い風にもその宿所のあることに想到し、其處へ往つて怨んでやらうと思ひ寄つた、狂痴の想が頗る面白い。「誰れか知る」「われに教へよ」と、自他の相對で潤飾して、姿致を取つたものも面白い。この法師の歌體を通觀すると、父遍昭に比しては奇拔の調戯謔の想に乏しいが、必ず一節あつて巧語よく人頤を解く。溫雅清秀な點に於いては、却つて父に優つてゐるかのやうである。但この歌などは乃父の衣鉢を傳へた作と評してよからう。國史に「素性亦善二和歌一頗有二父風一」と見えたのも、その謂なきにあらずである。

雲林院にて、櫻の花をよめる　そうく法師

いざ櫻われも散りなむ一さかりありなば人にうきめ見えなむ

鑑賞 ○この歌素性集に入り、六帖にも作者を素性としてある。契沖は「上の『櫻ちる』の歌の詞書のこれと同じさまなるに、間に素性の歌を挾みて又承均の歌を擧げたるはいかゞなれば、これは素性の歌なるべし」といひ、景樹は「これは由性法師の歌にて、承均にも素性にもあらじ」といつた。けれど承均の「櫻ちる」の歌は置處が違つてゐるし、素性集は不たしかな集であるしするから、六帖の傳のみで、これを素性のとする事は無理である。又由性も遍昭の子で雲林院別當となつた人だから、一理あるやうだが、尙その確證はなく、歌意も誰れの作としても聞えるから、まづ舊のまゝに從つておくのが穩かである。廣蔭はこのあたり順序が違つてゐるとて、(一)櫻花ちらばちらなむ　(二)一め見し君もやくると　(三)春霞なに隱すらむ　(四)たれこめて春の行方も　(五)櫻ちる花のところ　(六)花ちらす風のやどりは　(七)いざ櫻われもちりなむ　(八)枝よりも仇にちりにしと次第した。○われも散りなむ　身の行方もなくする事、卽ち退散の意を花に對へて、「われも散る」といつた。○一さかりありなば　一時の盛りがあつたならば。○うきめ　憂き目。「目」は見えの約で、難儀な目、恐ろしい目と同じい。○見え　見られの約。

大意 さあ櫻よ、お前が散るならば、自分も一所に何處へなりと退散してしまはう、花も人も一盛りがあつたならば衰へた見苦しい樣子を、人に見られようと思へばサ。

評 榮枯盛衰が世間の常道であることは、作者のつとに承知してゐた處、今更驚くにも足らぬのを、「われも散りなむ」と、其處ともなくあくがれ出ようの決心を打ち出したのは、作者がさし當つて何かいたく感激した事があつて、たま〳〵落花を見て、決然覺悟した口氣である。景樹が、作者を雲林院の別當たる由性法師として、その名譽な別當職を辭して寺を開かうと思ひ立つた意と見たのは、その事實こそ遽に諾ひ難いが、眞意はよく聞き取り得た考と思はれる。初二句簡淨である。又この歌二段に切りとゝのへ、いづれも「なむ」の語でとぢめた

のは、古歌には多い例で、後世のやうにさうさし合ひとはしなかつた。

あひ知れりける人のまうで來て歸りにける後に、よみて

花にさしてつかはしける　つらゆき

一め見し君もや來ると櫻ばなけふは待ちみて散らば散らなむ

釋 ○あひ知れりける云々　知人の訪ねてきたのが、間もなく歸つてしまつた後で、花の枝に歌を書いた紙を付けて贈つたとの意。「花にさして」は花の枝に付けての意で、この時代には人の許に手紙や歌をかいてやる場合に、草木の枝や葉に付けて贈るのが、風流な所作でもあり禮でもあつた。品物でも小さな物は枝に付けた。○一め見し　一度一寸見たの意。○君もや　「もや」は萬一の事を疑つていふ辭。○待ちみて　「みて」は試みての意。

大意　これ櫻の花よ、この間一寸逢つた人が、又若し來るかと、今日一日だけは待つてみて、いよ〳〵來ぬ時にこそ、散るならばお前の勝手に散つて貰はうわ。

評　いかにも暫時で立ち歸つた人なので、景慕の情に耐へず、今も逢ひたいと下待つ心を、櫻のうへに移して、「今日は待ちみて」といつたのは、大方今日はお出でがありさうなものぞと、間接に其の來訪を促したので、措辭極めて婉曲である。かういつてよこされた人、苟も物のあはれを知つてゐる以上は、花に辜負する誘を受けるのも心苦しいので、必ずやその日を過さず再び來訪したことであらう。ましてやその贈つた花が散り方ででもあらうなら、片時も猶豫が出來ぬ譯である。「散らば散らなむ」の辭樣については、上の「櫻花ちらばちらなむ」の歌の條を參照ありたい。

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらむさくら花散るまをだにも見るべきものを

釋 ○なに　口語のなぜに同じい。

大意　山の櫻の花を春の霞が、あのやうになぜ隱すのであらう、それは見事な盛りの間はとにかく、せめて末になつたその散る間だけでも見てありたいものを、それも霞に遮られて見えないのがつらい。

評　「盛りを見たいなどいふ贅澤沙汰ではなく、せめて見榮もなくなつた散る間をなりともといふ消極的の所望にすら、猶隱して見せぬ霞には、誠に意地が悪いの一言を呈するより外はあるまい。かういひ落すのがこの歌の手で、僅に「なに」の一冷語を下して、この意が一首に波及活動してゐる。

心地そこなひて煩ひける時に、風にあたらじとておろし

こめてのみ侍りけるあひだに、折れる櫻の散り方になれりけるを見てよめる　藤原のよるかの朝臣

垂れこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

釋 ○心地そこなひて云々　氣分が悪くて惱んでゐた時、身熱があるので風に當るまいと思つて、簾や几帳などを下して引き籠つてのみ居た間に、折つて花瓶に挿しておいた櫻が、はや咲き過ぎて散り方になつてゐたのを見てよんだ歌との意。○垂れこめて　簾や帳帷を垂れて内を籠らせての意。○春のゆくへ　春の暮れ行く方。

大意　自分は病氣のゐるに、垂れ籠めて引き籠つてのみゐて、春の過ぎゆく方も一向知らぬ間に、豫てより咲いた

ら見ようと、折角樂みに待つてゐた櫻さへも、早このやうに散り方になつてしまつたわい。

評 病氣のやゝ輕快を覺えた折か、久し振に垂れ籠めた帳などを掲げさせると、帳外にさし置かせた花瓶の櫻が、はや素枯れになつたのを見て、病間の日數の程を打ち驚いたのである。但その端的の感じなら、まづ目に觸れた櫻の移ろふ事を先にし、その感想たる春の行方も知らぬ意を後にことわつて、倒句法を用ひるのが、その驚愕の意を表現する自然の叙法だが、これは一旦思ひ鎭めてさて思索したのだから、風情の寄つて來るまゝに、正叙法を用ひたのである。「待ちし」の一語を添へて、殊に垂れ籠めた日數の長かつた意を強めてあるのは巧妙である。思ふにその折枝は蕾のうちから挿した物であらう。又二句の終の「も」の辭は、春の行方のみならず、何事をも覺えなかつた意を含み、四句の終の「も」の辭は、病み付いた頃既に咲いてゐた餘所の櫻の移ろふは無論の事とした意に聞えるのは、上の强い語勢に押されて、これに力が入るからである。針灸藥餌の間にあたら三春の歡を空しくする、眞に凄婉の極である。

東宮の雅院にて、櫻の花のみかは水に散りて流れけるを見てよめる　すがのゝ高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ

釋 ○東宮の雅院　大内裏待賢門（中御門）より北、壬生の東にあつた。東宮の御元服の座を設け、その饗宴も行はれる所である　常は東宮の音樂學問等を習ひ給ふ所。○みかは水　禁中の殿舍の砌を流れる水で、此處は雅院の下水をいふ。

大意 枝からもはかなく散つてしまつた櫻の花の事だから、下へ落ちてもやはり、脆い水の沫とナなるわ、他の物とはならずに。

評 さても花は何處までもはかない物ぞといふ餘意を含んでゐる。上下の「も」の辭相呼應して、その韻遠ながく味ひが深い。落花點々水に貼して浮んだのが、恰も水沫のやうに見えるのを、水の沫と變化してしまつたと斷言した所に、痴呆の巧がある。

櫻の花の散りけるをよめる　つらゆき

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花見るわれさへにしづ心なし

釋 ○ことならば　かくとならばの意。かくの約「こ」となる。顯昭、久老、守部、宣長、景樹、井上文雄諸家の說中、景樹、文雄の說を採つた。雅語譯解に「トテモソノ位ナラ」と譯したのは意が近い。○咲かずやはあらぬ　なぜに咲かずには居らぬかいの意。○さへ　添ひ加はる意の辭。○しづ心　靜かな心。

大意 櫻の花は、とてもこのやうに早く散る程ならば、いつそ最初より咲かずにあればよいものを、何故咲かずには居ぬぞ、氣ぜわしく散る櫻の花を見て居る自分までが、そは〳〵して落ち着いた心もないわ。

評 「咲かずやはあらぬ」と、嚴しく花を談じ付けたのは、愛惜の情の餘りに出た激語で、蓋し反映の筆法である。上の業平朝臣の、

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

の歌に似寄つた作で、一層核實を欲したが、彼れは天工、これは人爲、比較するとそこに雲泥の差を生ずる。

「櫻の如とく散るものはなし」と人のいひければよめる

さくら花とく散りぬとも思ほえず人のこゝろぞ風も吹きあへぬ

釋 ○櫻の如とく散る　櫻のやうに早く散るの意。○散りぬ　散つてしまふ。○思ほえず　思はれず。○吹きあへぬ吹かうとして吹く間もない。

大意 自分にはさう櫻の花が早く散つてしまふとも思はれぬわ、それといふは、櫻の花はまだ風の吹くを待つてから散るのを、人の心はサ早く移り變る物で、風の吹く間もないわ。

評 されば人心は取り分け仇な物ぞといふ餘意を含めて、或人の詞を基礎に、層一層の樓閣を築いた。「その」の辭櫻の花に對つて、人の心をば强く指斥した意となる。「風も吹きあへぬ」は、變ることの早さをいはうとて、花の緣語で筋を合はせたものである。けに賴み難く變り易く、飛鳥川の淵瀨にも喩へ來つた人心だから、それを深く憤つての作である事は勿論であるが、詞書に「人の」とあるその人は、或は作者の愛人などで、この頃心變りしたらしい女かも知れない。するとその情況が相照映して、一段の感愴が深まる。白居易の太行路の詩に、

太行之路能摧レ車、若比二君心一是坦途、巫峽之水能覆レ舟、若比二君心一是安流。

と、その着想の動機を同じうしてゐる。

さくらの花の散るをよめる　きの友則

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

釋 ○ひさかたの　天の枕詞であるが、轉じては日、月、雨、雲、星など、すべて天象の物の枕詞に用ひられる。此處では日の光と續く意なのを、略して直に「光」にかけた。○ひかりのどけき春の日に　日の光のゆつたりとして麗らかな春の日であるにの意。「春の日」の日は時節の意で、太陽の事ではない。「に」はなるにの意。

大意 大空の日の光のゆつたりとした春の日であるのに、何故に花がこのやうに落着き心もなく、そは〳〵とせわしく散るのであらうぞ。

評 初句に枕詞を置いたのも、三句まで一息に調べ下したのも、調をのどやかにする爲めの手段である。又三句の「に」と結句の「らむ」との呼應で、その間に何故にといふ疑問の意を生ずる。但これを詞のうへに顯さぬのは、大いに理由のある事で、作者の商量を費した處と思はれる。それは何故になど難詰的の言語を用ひる時は、意調が激して、平和な一首の仕立を害するからである。「花の」の「の」の辭もまた、音調を緩和してゐる。畢境靜中の動を認めたのが趣向で、しづ心なく散る花によつて、いよ〳〵春の日の長閑けく靜な感じが反映される。語勢一つの迫つた處なくなだらかなうへ、聲調また滑らかで、すべて暢び〳〵とした姿なのは、よく歌意と相協つてゐる。この集中の絕唱で、神品に入るものであらう。

二句、六帖に光さやけきとあるはわるい。

春宮のたちはきの陣にて、櫻の花の散るをよめる　藤原のよしかぜ

はる風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつらふと見む

釋 ○春宮のたちはきの陣　「たちはき」は太刀佩の義。延喜式の春宮式に「帶刀舍人三十人、分配侍衛」とあつて、春宮御警衛の武官である。その帶刀等の兵仗を帶して陣列する詰所を、帶刀の陣といふ。○あたり　近邊。○よきて　口語のよけてに同じい。○心づから　心自から、卽ち心がらの意。○見む　試みむの意。

大意 春風お前は、咲く花の近邊をばよけて吹けよ、それは外でもない、風に當らなくても、若し花は自分の心からひとりで散るものかと、ためして見ようと思ふ故に。

評 よもや櫻は心がら散りはすまいの餘意がある。風に散る花を見て、その風に誂へて見たのは、蓋し落花を惜む情の現れで、萬千に心を碎く趣が出て來る。かやうの擬人は例の事だがやはり面白い。

さくらの散るをよめる　凡河內躬恒

雪とのみふるだにあるを櫻ばないかに散れとか風の吹くらむ

釋 ○雪とのみふるだにあるを　雪のやうにひたすら降るのさへ惜しくあるものをの意。○いかに散れとか　どのやうに烈しく散れといつてか。

大意 櫻の花は風の吹かぬ時にも、雪のやうにひたすら散るが、それさへ以て惜しくあるものを、又この上どのやうに烈しく散れといつて、かうも風が吹くのであらうか。

評 落花を形容して雪に譬へ、その緣で散ることを「降る」といひ換へて、下の「散れ」とあるにさし合ふを避けた。又「のみ」の辭に花の頻に散る狀をめぐらし、「いかに散れとか」に吹き添ふ風の無慈なさまと、これまでは風がなくても雪とのみ散つた趣とを知らせたなど、作者が彫蟲の技に長けたのが見られる。景樹が「心面白く詞うるはしく調高くなつかしきは、勝れたる歌なるべし」と大いに賞讃したのは、稍好む所に僻した嫌はあるが、一應さうした面影もあつて、手のないやうで手のあるのが、この特色である。

比叡にのぼりて、歸りまうで來てよめる　つらゆき

山高み見つゝわがこしさくら花風はこゝろにまかすべらなり

釋 ○比叡に云々　比叡は天台宗の大本山延曆寺のある比叡山で、山城國愛宕郡にある。「比叡にのぼる」といへば延曆寺に參詣した事になる。「まうで」は添へた詞。○見つゝわがこし　見ながら自分が來たの意。

大意 山が高いので花のそばには行かず、殘念ながら餘所に見ながら、自分が歸つて來た其の櫻の花を、風は自由に散らしなどして、心に任せさうな樣子であるな。

評 「わが」に對へた「風は」の「は」の辭の力あるに、大いに風を羨望した餘意を生ずる。又初二句の間に、心に任するならば一枝折りもしたい意が隱然と見える。又上句の「見つゝわがこし」は卽ちわが心に任せなかつた事だから、それに對へて擬人して、風の花を吹き散らす事を、風の心にまかすと云つた。延曆寺の根本中堂に詣でて、四明の峰頂などに咲いた櫻を望見したのを、歸つて後思ひやつた作らしい。花に對しての愛惜が根强くあらはれてゐる。廣蔭が「櫻花は寺の稚兒に、風は山法師に喩ふ、貫之參詣して稚兒を見て手折らまほしく思ひたれど、さはなり難きを山高みといひ、止むを得ずよそに見てこしを、かの山法師は心に任すべらなりと羨めるなり」といつたのは、面白過ぎて面白くない。

題しらず　一本　大友くろぬし

はる雨のふるはなみだかさくら花散るを惜まぬ人しなければ

釋 ○作者の名の肩に、一本とあるは、もと「よみ人しらず」の歌だつたのを、一本にこの署名があつたので書き入れたものか。既に六帖にはこの作者を黒主としてある。又黒主の氏を大伴と書くは誤である。又思ふに、もとこゝに署名も何も無かつたのかも知れない。すれば上の歌から續けて、貫之の歌と見るべきである。○なみだか　「か」は疑辭。○人し　「し」は强辭。

大意 このやうに春雨の降るは、世間の人のこぼす涙なのかしら、なぜなれば櫻の花の散ることを惜んで歎かぬ人がサ、世間に一人もないによつて。

評 自分が泣きたいほど落花を惜む情が切なので、世間の人も必ず同感と見定めて、その多くの涙が集つてかう春雨となつて降るのかといふその閑想像は、多少の詩味の搖曳を認める。

亭子院の歌合のうた

さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空になみぞ立ちける

釋 ○なごり　波殘（ナミナコリ）の約で餘波と書き、海邊などで風の吹き止んだあとに尙立つ波をいふ。後には波でない他の物のうへでも、その本體の失せた後に、聊か其のしるしの物の存在するのをいふ。形見（カタミ）の意に近い。

大意 海邊ではなごりといつて、風が凪いでも波の立つ事あるが、櫻の花の誘はれて散つてしまふ風のなごりには、海邊とは違つて、水もない空に花の浪がサ立つたわい。

評 落花を風の吹き上げ吹き下して、空中に捲き立てる狀を、白波の立つと見なして、水のある處に立つ波は不思議でもないが、水のない空に波の立つたのは珍しいと驚歎した。面白い景氣である。上にも「花なき里に花ぞ散りける」といひ、今又「水なき空に浪ぞ立ちける」といひ、又「櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ花ぞ散りける」と詠む。まづ一ふし珍しさうな奇語を案出して、さていひ落すのは紀氏の慣手段で、四五の句の應接、恰も詩の轉句と結句との應接に酷似してゐる。これも再三となつては聊か興が醒めるのみでない、其の弊や尖巧に傾いて、風格が揚らない事になる。

以上は櫻を詠んだ歌を擧げた。以下は諸木の花で櫻には限らない。

ならのみかどの御歌

故里となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

釋 ○ならのみかど　平城帝を申す。眞淵のいふ「こゝにならの御門の御歌と記したるは後人の所爲にて、もとは『題しらず、よみ人しらず』とぞありけん。さるはこの集に『つかさ位高きは歌のよしあしをも憚りていはぬ』と序にみえ、且天皇と皇后の御歌は恐みて選ばざるに、平城天皇の御歌をのみ擧ぐべきにあらず」と。しかしこの論は從ひ難い。序文に「つかさ位高きは」とあるは臣下の官職の高い者の事で、それも歌の論評だけを遠慮するとの意である。又天皇と皇后との御歌は憚りて選まぬといふも臆斷の說で、無證據である。されば本文のまゝに心得てよい。○故里　こゝは舊都の地をいふ。○奈良のみやこ　大和國の寧樂の京で、元正帝から光仁帝に至る七代の帝都である。

大意 昔の都址の地となつてしまつたこの奈良の京にも、やはり色は昔に變らないで、都であつた時の通りに花

は咲いたわ。

評 他の變り果てた物に對して「色は變らず」といひ、昔の面影もなく衰へ果てた物に對して「花は咲きけり」といつた。「は」の辭の深味ある事に注意するがよい。これを疊用したのは、いよ〳〵其の差別の意を強くする。菅三品の過平城古京」と題した詩句に、

綠草如今麋鹿苑。紅卷定昔管絃家。

と作つた。萬事變りに變つて、淺茅が原とぞ荒れにける舊都に、昔ながらに咲き匂つた櫻を見て、今昔の感に堪へかねての御作と拜察する。殊にこの帝は奈良の舊都をいたく愛でられて、御讓位の後は平安の新都をさし措いて、そこに仙居を營まれたので、平城天皇と申し奉る程だから、御父桓武帝の平安城に遷都後、奈良の京の段々に廢頽して行くことをお歎きなされ、且は人情の舊を捨てゝ新にのみ奔る輕薄を憤慨なされて居られた折、たま〳〵櫻の花を見て、その鬱勃たる感懷を寄せられたのである。御歌體奈良時代の餘風を存して、高古の風調仰ぐべく慕はしい。

初二句、六帖にいその上ふりにし奈良のとある。例の采らない。

春の歌とてよめる

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風　よしみねのむねさだ

樺 ○春の歌とてよめる　「とて」に注意を要する。春の歌として思ふ事を詠んだとの意。以下同じ詞書あるも、皆その意で見るがよい。○春の山風　春山より吹き來る風。

大意 春の山姫が大事にして、花の色は霞の中に籠め置いて見せぬにしても、せめてその香をなりとも霞の中から竊み出して、こゝに匂はせてくれ、こりや春の山風よ。

評 この花を祕めて見せぬ主人公は、恐らくは春の女神佐保姫だらうと思ふ。おなじ擬人でも、誘へといふべきを「竊め」といひ換へたのは、この作者の風體ではあるが、只口輕に興じたのみではない。佐保姫が霞の帳のうちに花を籠め置いて、色は勿論香をも洩らすまいと、大事にうつくしみかしづく狀が、この語で反撥される。四句の一張、五句の一弛、相俟つて調が諧ふ。さて詞書のさまと歌の意とを案ずると、必ず寓意あつての作と見えた。或は身分の高い女に思ひかけたか、或は中垣を据ゑられて女の逢ひ難くなつたかの際に、その媒する女などを責めて、かの父兄は大事にして我には逢はせずとも、かの人のけはひなりとも洩らして聞かせよ、かの消息をなりとも、祕密に取り次げよといふ意で、まづ思ふ人を花に譬へ、その緣で「香をだに竊め」といひ、さて「春の山風」をばその媒の女に比したのであらう。道濟の十體に比興の部に擧げたのも、この意を看取したからである。眞淵は「詞さわやかに心をかし」と評した。かう婦人の上に關係した事柄ではあり、且法德圓滿の僧正遍昭となつての後の作でもないから、作者の名を遍昭と書かず、良岑宗貞の俗名を署したのは、撰者の注意を拂つた點である。猶宗貞の名で載せた歌が、集中雜部に二首ある。いづれも婦人に關した事である。

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく

姿も調もこれとよく似てゐる。篁は宗貞の先輩だから、篁の作を點化したものである事は勿論と思はれる。但その詞や彼れは古にして雅に、これは今めかしく花やかに、劃然としてその體格を殊にしてゐる處は、二人の生存時代の前後を語り、その特性の相違を現してゐる。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　素性法師

花の木も今はほり植ゑじ春立てばうつろふ色に人ならひけり

釋 ○花の木　花の咲く木。○ほり植ゑじ　野山より掘つて來て植ゑまい。○うつろふ色　花の變つて行く色。

大意　花の咲く結構な木さへも、もう今は掘り取つては植ゑまい、なぜなれば、春が來て花が咲くと早くも變るその色に、人が見倣つて心を變へたわ。

評　花の頃くる約束をした人が遂に來なかつたので、散方の花の木に對して感懷を寓せたといふ趣向らしい。あれ程堅い約束をして置きながら、花の散方になるまで顏を見せぬ、これといふのも畢竟花の移ろふ色に肖つたらしいから、結構な花の木でも、以來は移植しまいとまで決心した。この決心はいふまでもなく、違約者への面當になるから面白い。初句の「も」の辭、二句に應じて口語のサヘモの意に當る。新撰萬葉、拾遺集等に花の木はとあるを景樹が執したのは、全くこの「も」の意を精しく聞き得なかつた誤である。「今は」とあるは、これまで掘り植ゑた事を後悔した口氣である。又「春立てば」は花咲けばの意なのを、初句の花へのさし合もあるので、類似の意義に轉換して、旁ら露骨を避けた。又「ほり植ゑじ」を欲り植ゑじの意に解する說もあるが、この時代の用語としては僻してゐる。元來花木を掘り植ゑることは當時の習俗で、前栽は大抵野邊から掘り取つてくるし、立木でも同じこと、甚しいのは人の家のまでも掘つて來たことは、鶯宿梅の話や枕草子に見えた事實でも明瞭だから、更に異說を挿む餘地はない。拾遺集に上句「花の木はまがき近くは植ゑて見じ」（讀人しらず）とあるのは、別の歌と見てよい。

題しらず　よみ人しらず

春の色のいたり到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ

釋 ○春の色　春の氣を漢語の春色といふ文字に就いて直譯して通はせた。○いたり至らぬ里　至る里至らぬ里の略。○咲ける咲かざる　花咲ける花咲かざる花の略。但至り至らぬの語法に從へば、咲けり、咲かざる花とあるが正しいが、この歌にさうした證本がない。

大意　天下一帶の春だから、その氣色が行き渡つた里行き渡らぬ里の分け隔てはあるまい、それを何で咲いてゐる花や、まだ咲かずにゐる花やの見えるのであらう。

評　天下一帶の春といふは一般の先入觀念、咲ける咲かざる花のあるは眼前の事實、この矛盾を扱つて、その理をはかなく疑つた痴愚の想が歌となつてゐる。つまり作者の身邊に花を見ない所から起つた着想である。別に寓意があつて、咲ける花を人に、咲かざる花を自身に比して、天に不公平はあるまいのに、何で幸不幸のある事だらうと歎じた、失意の述懷とも見られるが、詞書もない事だから、あながちに執し難い。上下の句の間に、何故にの語を挿んで聞く格である。元來たゞ春の色の到らぬ里はあらじを咲かざる花の見ゆらむといふ程の事なのを、「到らぬ」にはまづ「いたり」といひ添へ、「咲かざる」にはまづ「咲ける」といひ添へたので、反對の意に歌ひ換へ謠ひ延べ、又二三の句と四五の句とを、全然同一の語法語調で聯對させた音節合拍の間に、無盡の風味が生じて來る。初句三句の字餘り、試に一字を省いて吟じ見るがよい。必ず調迫り節短く、調子の亂れることがわからう。殊に三句は結句の七字に對へたのだから、强く剛く調べ立てないと腰が弱い、否折れさうな

恐がある。そこで字餘りを用ひ、力ある「は」の辭を下した。要するに節奏上に殊に面白味をもつた歌である。

春の歌とてよめる　つらゆき

三輪山をしかもかくすか春がすみ人に知られぬ花や咲くらむ

釋 ○三輪山　大和國磯城郡。○しかもかくすか　さうも隱すことかの意。「か」は歎辭。

大意 春の霞が三輪の山を、あのやうにひどく立ち隱すことよ、定めし山には人に知られない祕藏の花が咲くであらうか。

評 「貴人のあたりを物もて圍ふやうに見なしたるなり」と景樹のいつた通りだ。「しかも」は何を指したかといふに霞の山を蔽ふ眼前の光景を指したのである。初二句は萬葉集卷一に、

三輪山をしかも隱すか雲だにもこゝろあらなむ隱さふべしや

とあるを、其のまゝ襲用して、雲を霞に換へた。夙く梨壺の五人以前に、紀氏の萬葉にも通じた事が知れよう。三句の「春がすみ」は初句の上にまはして見るがよい。

初二句、六帖に山毎に立ちも隱すかとあるはいかゞ。

雲林院のみこのもとに花見に、北山のほとりにまかれりける時よめる　そせい

いざけふは春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは

釋 ○雲林院のみこのもとに云々　雲林院の親王の許に花見するに、まづ北山の附近に往つた時に詠んだ歌との意。「雲林院のみこ」は上にもいつた常康親王の御事。一本「みこのともに」とあるを景樹は正しとして、「雲林院は北山より半里も隔り居れば、みこの許に北山にまかるといはれず」といつたが誤解である。雲林院の花見の前に北山方面を遊びあるいたのである。「北山」は衣笠山附近をいふので、都人の遊所として有名な處である。

○山べにまじりなむ　山邊に入り込んで遊ばうの意。「まじり」は竹取物語に「野山にまじりて竹を取りつゝ」の用例と同じい。○なけ　無氣といふが語の本で、なけの情、なげのいらへなど、有るも無きも同樣な意から、等閑（ナホサリ）、なけやりなどの意に轉じた語。○かは　反動辭。

大意 どりや他の日はとにかく、今日はゆるりとこの春の山邊に遊び暮さうわ、なぜといふに、もし日が暮れたなら、なけやりに見棄てられさうな、あの雲林院の花の蔭がまあ、どうして投げやりにはならぬ花の蔭だからサ。

評 作者春の一日同志と雲林院の花見に出掛けた。春の氣分の面白さに浮かれて、「いつそ先に附近の北山におしは、長い春の日脚も傾き易い。で二の足を踏む連中も無いではなかつたらう。そこを「暮れなばなげの花の蔭かは」で、厭でも應でも同行を强いた。「けふは」は他の日に對へたので、いかにその日が興の乘つた日であるかゞわかる。「まじりなむ」に、山邊に親しみたい氣分がよく表現されてゐる。「暮れなばなげの花の陰かは」暮れたら暮れたで、又花の下伏も面白いではないかといふのである。但この花の陰は雲林院の花の陰をさしたので、何遲くなつたら雲林院に泊ればよい、それも亦一興だらうといふ。調子がかうはずんで來ては、何處まで發展するかわからない。いかにも愉快氣な調子である。北山は雲林院からすると、近くに船岡があり續いて衣笠山にわ

たつて、所在の花木はこの風流な作者等を待つてゐる。

三句、顯本、奥儀抄等にまどひなむとあるを景樹は執し、「まとひは統ひの義にて團欒する事」と釋いたのは、一家言で從ひ難い。

春の歌とてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらずは千代もへぬべし

釋 ○あくがれ　あこがれと同語。口語の浮かれといふによく當る。○ちらずは　散らぬ時はの意。「は」の辭清んで讀む。○千代も　「も」はさへもの意。「千代」は千年に同じい。

大意 花の面白さに、何時までこの野邊に浮かれて遊び耽つて居る事であらうか、この分では若し花が散らぬ時は、この野邊で千年でも經てゝしまひさうな。

評 まづ野花を愛する情の甚しくて、我ながらその際限を知らぬやうに疑ひ、次に花に浮れる入興のあらましを叙べた。卽ち上句と下句との自問自答で、花下忘歸の意を誇大にいひなした。「千代も」は初句の「いつまでか」といふに照應してゐる。特殊の體裁、以て結構布置の妙が會得されよう。

題しらず　よみ人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

釋 ○ありなめど　「なめ」はなむの辭の變化。○あひ見む　花の盛に會ひ見むの略。相見むの意といふ說は采らない。

大意 今年に限らずいつの春でも、花の盛りはあるだらうが、その花盛りに出會ふ事は、卽ち人間の壽命次第の事であつたわい。

評 その壽命は佛家の所謂泡沫夢幻で、來春までの事は測られないと思へば、洵に殘多いこの花よの餘意がある。花と命とを對比して、花よりはかない命であることを觀じた。「なりけり」はこのやうに上句を解釋し、說明する場合に用ひて、詠歎の意を表はす語であるのを、近世のにはこの用格に適はないのが折々見える。甚だ濫りである。歌は命をかけたので見ると、老人などの花に對しての感懷だらう。

二句、六帖及び素性集に花の匂はとあるのは穩やかでない。

○

花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへりきなまし

釋 ○花のごと　花の如く。○世の常ならば　世が常住ならばの意。無常の反對。○すぐしてし　「てし」は重い過去の助動辭。○またも　「も」は歎辭。○まし　ましをの意。

大意 花は一旦散つても、立ち返り〳〵年々定まつてこのやうに咲くが、世の中がこの花のやうに定まつて變らぬ物ならば、自分が過して來た昔は、再びまあ立ち返つて來るだらうものをサ。しかし世の中は花のやうでないから、過した昔が返つて來ぬのが悲しい。

評 花は脆い物、はかない物と誰れしも承知した事を、「花のごと世の常ならば」と喝破したのは、上にも「殘りな

く散るぞめでたき櫻花」と詠んだのと同じ手段である。これも老人、或は昔威勢よく榮えた人の懷舊の詞だらう。

○

吹く風に誂へつくるものならばこの一本はよきよといはまし

釋 ○誂へつくる　注文を付けるの意。「つくる」を告ぐるの意とするのは穩かでない。○よきよ　避けよの意。○まし　ましをの意。

大意 空を吹く風に注文が出來るものならば、他の木はともかく、この花一本だけは除けて通れといはうにサ、どうもさうならぬによつて、仕やうもない。

評 庭前の花に對しての作だらう。花の語なしに、花の意のめぐつてゐるのを一ふしとする。三句「この」と指し「は」と承けたのは、强く他の諸木と差別する意なので、取り立てゝ熱心に愛翫する狀が見える。四句、六帖顯昭注等にこの一枝はとある。これは花瓶などにさした花の枝を詠んだ趣だ。眞淵は「もとは一枝とありつらむを、狹しとて後人の一本と直ししならむ」といひ、景樹も「わが物と領じて殊にもめづるこの一枝のみは世のおしなべならず、吹く風も心せよ、とはかなく願へる方感ある心地せらるゝにや」といつた。が花瓶の枝では吹く風がよく利かない。

○

まつ人もこぬもの故にうぐひすの鳴きつる花を折りてけるかな

釋 ○もの故に　ものであるからの意。場合に應じて、下に適當な詞を補つて聞くべき格である。○折りてけるかな　折つた事よなあ。

大意 待つ人も來ぬのであるから、折らずともの事だつたのを、必ず來る事と思つて、その人の御馳走にと鶯の面白く鳴いて居た、あつたら花の枝を折つてのけた事よなあ。

評 さても〳〵惜しい事をしたものよの餘意がある。必ず來る約束のあつた知人への馳走に挿した花瓶の花に對して、一圖に折つた事を後悔して、「折りてけるかな」と歎じた事は、隱約の間にその來ぬ人を怨んだ意がほのめいてゐる。況んやその花が「鶯の鳴きつる」と形容してある。かうした花では、自然の愛好者たる作者の立場としては、非常な犧牲を拂つた譯で、隨つて客人に非常な好意を盡した結果になり、幽怨の意がいよ〳〵深く强く反映される。功者の仕業である。「題しらず」とあるから事情は明らかでないが、恐らくはその違約した人の許に贈つた歌ではあるまいか。さう見ると意況相照して一層面白く思はれる。二句の「故に」は、六帖にはからにとあつて、躬恒の歌である。又四句の「花」を一本に枝とあるは、凡手でもせぬ事である。

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた　藤原興風

さく花は千種ながらにあだなれど誰れかは春を恨みはてたる

釋 ○千種　いろ〳〵あるをいふ。○ながらに　皆悉くの意の接尾語。○あだ　移り易く賴み難い意。○恨みはて　恨みとほしの意。

大意　世に春咲く花は種々ありながら、皆悉くあだな物だが、それでも誰れがまあ、その仇な花を咲かす春を恨んで見限つたぞ、やはり恨み切つた者とてはないわ。

評　思へば可笑しいの餘意がある。春風二十四番の花、一つとして仇ならぬはない。さりとて春を厭ふ者は絶えてないばかりか、却つてその來るを待ち往くを惜む。この人情の矛盾を捉へて、打擊を加へた。宣長が花を恨みはてたるの意に譯したのは誤である。こは仇なる花を咲かす春を恨む意である。理趣に渉つたのは難だが、奇警の點はある。「千種ながら」は悉くの轉義である。

この歌、素性集に入つてゐるのは謬と見ねばなるまい。初句、一本にさくら花とあるは、理が通じない。結句、新撰萬葉ににくみはてたるとある。詞が聊かなつかしくない。

○

春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山のはなの影かも

釋　○これも同時同人の歌である。○色のちぐさに　霞の色がいろ〳〵に。○かも　歎辭。

大意　春の霞の色が種々さま〴〵に見えたのは、その霞のたなびく山のくさ〴〵の花の色が、霞へ映つたのかまあ。

評　しかと實境のたどり難い歌である。諸注、野山の花を見た意に輕く解き、景樹は一層演繹して、「打見渡せる山邊に色めくを、ふと花かあらぬかと目惑ひたる、とばかりの間の趣を詠めるにて、霞を取り立てゝいふも、景色につけるいひなしなり」といひ、廣蔭は「こは后の宮の御殿の築山のけしきを詠めるなり。種々の花を植ゑたる築山なるを、まことの野山の如くに詠みなせるが歌なり。諸注まことの野山と解けるは違へり。いづこにか花の影の千種に霞に映りて見ゆる山あるべき」と論じた。どれが正鵠の說だらうか。新撰萬葉に、

霞光片々錦千端。未レ辨名花五彩班。遊客廻レ眸猶誤道。應三斯丹穴聚二鵷鸞一。

とこの歌を譯してある。されば廣蔭の說も據があるやうでもあるが、又穿鑿らしい感じもする。

○

かすみたつ春の山べはとほけれど吹きくる風は花の香ぞする　在原元方

大意　長閑な霞の立つ春の山のあたりは遠方なれど、其の山の方から吹いて來る風は、花の匂が存外するわ。

評　淡靄の裡に籠つて依稀たる春山は、いかにも花の咲いて居さうな風情なので、近所の花を吹き過ぎた風でもあらう、ふと薫つたのを、直に山の花の香がこゝまで薫つて來たことと斷定した、その幼さが面白い。初句の「霞立つ」は春山の形容ながら三句に「遠けれど」と出る伏線になつてゐる。要するに、山邊は遠けれど近く花の香ぞすると、遠近を對照させた趣向である。

うつろへる花を見てよめる　みつね

花見ればこゝろさへにぞ移りける色にはいでじ人もこそしれ

釋　○うつろへる花　「うつろふ」は色の變る事にも散る事にもいふが、詞書には色の變る事にのみ用ひて、散るのは皆散ると書いてある。○色にはいでじ　顏色には出すまい。○もこそ　「も」は歎詞。「こそ」は事物を強く

指定する意の辭だが、かう連續する時は萬一の事を決定的にいふ意の辭となる。

大意　花を見ると、盛りの時もかう衰へた時も、その折々に心が染みて、花の色の變るのみか、見て居る自分の心までがサ移り變つたわい、心の變るは恥かしい事だから、顏色には出すまいて、若しかすると人が知るわ。

評　花は未開は未開で趣があり、盛りは盛りで面白く、落花は落花で面白い。然し退いて考へて見ると、かう移氣の無定見もないものだと氣が咎めるので、さも大した風流罪過でも犯したやうに、「色には出でじ人もこそしれ」と誇大に取り成した。初め心の移るといつた緣に縋つて、戀の趣に取りなして詠んだ。浮華で眞摯の情に乏しいと思ふ。初句は力强い辭樣なので、外の事ではさもないがといふ餘意を生じて、花を强く愛惜する趣が見える。又四句は花が色に出て移つたのに對へて當つたので、「は」の辭に注意を要する。心のうちにはともあれ、顏色には出すまいの意である。

二三の句、六帖に心さへこそ移りぬれとあるのは采らない。四句も、六帖のは思ひしものをとある。

題しらず　よみ人しらず

うぐひすの鳴く野べ毎(ゴト)に來て見れば移ろふ花に風ぞ吹きける

大意　鶯の悲しさうに啼く野邊毎に、自分が來て見ると、啼くも道理、いづれの野邊も散方になつた花に、風がサ吹いたわい。

評　春色今まさに闌で、花の風に散らぬ野もなく、鶯の鳴かぬ里もない。乃ちこれを湊合して、移ろふ花に風が加るその無慘さを鶯が啼くと見た。郊外の散策に落花を惜んでの作である。花落ち鳥啼くは自然詩人の套語であるが、その中に一手段を弄して、忽ち凡胎を脫した。好調諧語。

以下六首は、落花に鶯を結んだ歌を擧げた。

○

吹くかぜを鳴きてうらみよ鶯は我れやは花に手だに觸れたる

大意　鶯は自分に對つて、花を散らしでもしたやうに、恨み顏に鳴くが、そりやお門違ひで、あの吹き誘ふ風を啼き立てゝ恨んでくれよ、自分は散るが惜しさにこそこゝには立ち寄つたが、花に手一つさへも觸れた事かい。

評　風に亂れて散る花の面白さに、木の下に立ち寄つて恍然と見入つてゐる時しも、耳許近く鶯が金切聲で鳴き立てたのだらう。故に鶯が自分を恨み咎むるものと聞きなして、一所懸命申譯をするそのはかない廻り氣や、痴氣やが、この詩的要素を成してゐる。この種の構想はわるくすると浮華に流れて狂意に墮ちるが、幸にその弊がないのは老手である。句々力ある調子である。三句は初句の上にめぐらして聞く格である。

典侍洽子(アマネイコ)朝臣

散る花の鳴くにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

大意　散る花が惜んで泣くのでサ、散らずにとまる物ならば、自分は泣く事だつて、あの鶯に負けようか負けはすまいに。

評　けれども啼いてとまりもせぬものだから、自分は啼かずに怨へて居るの餘意がある。例のわが落花を惜む心

から、鶯の啼くをも同意に推斷して、啼くことならば何で鶯に負けようかと主張する。卽ち落花を惜む情は決して鶯には遜らぬと、間接に主張してゐる。鶯相手に嬌瞋を發した處、おのづから脂粉の氣があつて、情致が饒い。

仁和の中將のみやすん所の家に、歌合せむとしける時

藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつ田の山のうぐひすの聲によめる

釋 ○仁和の云々　「仁和の」は光孝帝の御代のの意。「中將のみやすん所」はこの御世の女御更衣の皇子を生み奉りて御息所と稱へられた人で、中將だつた人の子妹などであるから、さう呼んだのである。この御息所は女御平等子の事かと思ふ。この時右中將平正範といふ人があつた。光孝の后妃に外に平姓の人がないから、多分この正範の身内だらう。「せむとしける」は原本せむとてしけるとある。「て」文字文理が通じない。後の素性の歌の詞書の同文なのにも、「て」文字がないから、これは衍字と斷ずる。さて豫定はあつて遂に爲ずになつた歌合の料の歌なので、かく書いたのである。○わびしき　つらく難儀に思ふの意。○たつたの山　奈良縣平群郡の立田山である。春霞立つといひかけた。

大意 花の散る事が情なくつらいのであるか、長閑な春の霞のたつといふ名の立田山で、鶯の鳴く聲のするは。

評 立田山は萬葉集にも、

わが行きは七日は過ぎじ立田彦ゆめこの花を風に散らすな（卷九）

など詠んだ、花の名所である。花の散るは惜しい事の頂上なので、さし當つて盛になく鶯を同情に想像するのは例の手段である。三句「春霞」は立田山の序詞ながら、時下の景物を借りて句としたので、多少そのあたりの打ち霞んでゐる光景と見てよい。結句「鶯のなく」と收めても宜いのを、「鶯の聲」と一轉語を下し、上下の句意を參差させたのは、語意を緩く、語調を長閑やかに仕立てゝ、陽春ののんびりした調に協へたのである。この作者苦心の存する處を買つて遣らねばならぬ。「立田山」と「鶯の聲」との取合せも、打ち任せては不倫でそぐはぬやうだが、身既にその山中にゐての作とすれば、異論もなからうし、却つて鶯の鳴聲の盛な趣も見える。但三句以下の大らかなる調に對して、初二句やゝ細くからびて、力量が平均しないやうに思はれる。

六帖には、二句事や悲しき、結句山鳥の聲とある。

鶯の鳴くをよめる

そせい

木傳へばおのが羽風に散る花をたれにおほせてこゝら鳴くらむ

釋 ○木傳へば　木の枝を傳へば。○おのが　己れが。○羽風　羽の煽りに生ずる風をいふ。○おほせて　負はしめて。○こゝら　許多、澤山などの意。

大意 鶯が花の枝をあちこちと飛んで傳ひあるくと、自分の羽風に煽られて散る花であるのを、誰れに其の咎を塗り附けて、あのやうに恨めしさうに、大さうに鳴くのであらうぞ。

評 上の「吹く風を鳴きて恨みよ」と、同巧異曲である。但彼れは猶豫なくさし當てゝ自分の恨まれた趣なので、おのづから語調が切迫してゐる。これは又大やうに「誰れにおほせて」と汎くかけて、自分をその中に含めたの

だから、語調も幾分かゆるやかである。この差別を味ひ知るがよい。初句の「ば」例の力ある辭樣であるので、障らねば散る筈ではないものをの意が、その裏面に生じて來る。さて詞書を離して見ると、何が木傳ふとも何の羽風とも分らないが、實際に鶯を聞いてのうへの作であり、その風情も一首のうちにめぐつてゐるから、却つて鶯の語のないのが面白いと思ふ。畢竟この無理解の鶯にも困つたものと、鶯を相手に當惑した態度が面白い。

初句、六帖には鶯の、二句、顯木にはおのが羽ぶきにとある。顯昭は「羽風は今少しあらはなり」とて、羽ぶきを執した。羽ぶきは羽振で、詞が古い。眞淵は「もとは羽ぶきなりけむ」といひ、又鶯のといひ顯はすを難じて、「詞書と歌と相對へて曉らしむるがこの集の心づかひなり」といひ、景樹はこの二つを取り合はせて「鶯のおのが羽ぶきにといふを優る」といつた。諸家の說も一往の理由はあるが、やはり本文のまゝでおく方が、一番さも古今集の歌らしい調子に聞える。

鶯の花の木にて鳴くをよめる　みつね

しるしなき音をも鳴くかな鶯のことしのみ散る花ならなくに

釋 ○花の木　花咲く木は何でもいふ。○しるし　驗。○鶯の　鶯が。○ならなくに　ではないのにの意。

大意 鶯が何の効驗もない聲を立てゝも鳴く事よなあ、鶯の鳴くに關はらず、いつの年の花も遂には散るので、何も今年ばかり散るのではないのに、あのまあ今更らしく鶯の鳴く事わ。

評 さて〳〵馬鹿な鶯よといふ餘意がある。自身と鶯とを混一にしたのは例の手段である。下句、鶯に强く當つて理責にしたやうな、又冷笑したやうな語氣に面白味があるので、その態度が詩なのである。調がまたよく諧つてゐる。三句は初句の上にまはして聞く格である。

題しらず　よみ人しらず

こまなべていざ見に行かむ故里は雪とのみこそ花は散るらめ

釋 ○こまなべて　「こま」は駒。もと小馬（コウマ）の義で駿（ハヤ）い馬の事であるが、後には汎く馬をさしていふ。「なべて」は竝べての意。○故里　こゝでは舊都の意と思はれる。

大意 諸君よ、御一所に馬を乘り並べて、さあ見に行きませうぞ、この節はさだめて故里は雪のやうに、ひたすら花は散る事であらうわ。

評 早く見に行かぬと大方散り果てゝしまはうの餘意がある。景樹は「この遷都のはじめ、奈良の舊都を忍びて思ひ立ちける人の詠めりしならむ。今の都人は皆奈良人にて、誰かは誘はれざらむ。さらば駒なべてといふべし」といつた。實に奈良の京は花が多つたと思はれる譯は、上の平城帝の御製にも花を詠ませられ、萬葉にもその附近に花を頻に詠んでゐる。されば落花人無くして寂々たる故京の春を懷ふ時、何で往きて見むの念が起らなからう。況んや平安の新都からは行程僅に十里許、輕く鞭を春風に揚げ、三才駒に白泡食ませて、以て一日路の遠乘を試みるのは、頗る愉快な事だらう。歌の風調は奈良時代をかけた老人のものではない。今少し下つてゐる。又その口吻も若びた處があつて、少壯の人の作と思はれるから、何ほどの相違もないが、弘仁の頃を盛りの人の作と見たい。眞淵は「本末の句共に、少しの巧なくあるがまゝに詠みて、何となく面白き歌なり」と評

した。

○

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは

釋 ○何か　「か」は反動辭。○ともに　花と共にの意である。散る花と同樣にの意に見るは精しくない。○あらむ　あられむの意。

大意 惜むにも關らずはかなく散るので、その花は恨めしいが、何の恨まうぞ、その譯はよし花が散らずあつても、この世の中に自分の身もその花と一所に、何時までも居られようものか、決して居られるものではない。

評 花も散り易く人も滅び易い。共に永久の存在どころか、一轉瞬の間もおほつかない。かうともすれば所緣につけて人世の無常を觀ずるは、奈良朝時代をかけて、佛敎の人心に深く浸潤した結果と見られる。殊に飛花落葉の聲聞觀は、當時一般の社會思想となつてゐたから、別に珍しい着想ではない。只花に對する執着を、强ひて理性で抑へようとしたその煩悶に葛藤に、詩趣の發生を認める。

はなの色は移りにけりな徒にわが身世にふるながめせし間に　小野小町

釋 ○移りにけりな　變つてしまつたわいなあの意。「な」は歎辭。○徒に　口語のむだにに當る。「ふる」にかゝる副詞。○世にふる　世の中に經るの意。年の寄ることにいふ。又「ふる」に降るの意をかけた。これは長雨の緣語。○ながめ　長目の義で、物思する時は何となく一方が見詰められるものなので、物思する事を長目といふ。それに長雨をいひ懸けた。長雨はながあめの略。

大意 見むとたのしんだ花の色は、早くも變つてしまつたわいなあ、役にも立たぬ自身の老をなげいて、物思をしてゐた間に降つた長雨にサ。

評 つれ〴〵な暮春の霖雨に屈託して居る間に、庭前の花は色あせて見る影もなくなつたのを見て、それに寓せてわが生活苦に沒頭してゐる間に、容貌の美の衰へてゆくを歎息したのである。元來譬喩を混用した構成だから、熟ひ巧緻なるべき筈ではあるが、下句の秀句勝な仕立などあまり面白くない。さはいへこれも上手の仕業である事は勿論で、そのやはらいだいひなしは、當に女流の歌である。耳立ち易い「に」の辭の四つまでも重なりながら、聲調のなだらかなのを古來稱美してゐる。又「世にふる」の解は諸說まち〳〵であるが、今は石原正明の說に據つた。

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとしける時に

よめる　そせい

をしと思ふこゝろは絲によられなむ散る花毎にぬきてとゞめむ

釋 ○絲によられなむ　絲によられて欲しいの意。「なむ」は希望の辭。

大意 散るのを惜しいと思ふこの心は、どうぞ絲によられて欲しいわ、すれば散る花といふほどの花を、悉くその絲で貫き通して、他所へ散亂せぬやうに留めよう。

評 女子供が手すさびに花片を多く絲に貫き通して、花輪に作つて遊ぶ事あるのを聯想しての作と見える。散る花毎に貫かむといふは、卽ち散る花毎に心のたぐうて惜まれる趣である。さて心は絲によられる物でもないが、それ等の理性を忘れて、幼く愚に反つた點が、歌として面白いのである。されば其の間に一點の分別も着しない筈なのを、廣蔭が「惜む心の絲のやうに細くなるが細りついでにまことの絲に云々」といひ、景樹が「心に形ありて絲に造らるゝものならば云々」といつたのは、皆蛇足である。纖細の情趣ではあるが、どこにか乃父漏脇の餘風が遺つてゐる。

結句、六帖にぬきてとむべくとある。

志賀の山ごえに女の多くあへりけるに詠みてつかはし　つらゆき

あづさ弓はるの山べを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

釋 ○志賀の山ごえ云々　志賀の山越は京都府北白河の瀧の方から上つて、如意が嶽の麓を越えて近江の志賀へ出る道をいふ。經信卿記に「經ニ於瓜生山(將軍地藏の山)西一歩行ス」とある。これは天智帝の建てられた志賀の崇福寺へ詣でる道である。崇福寺は世に志賀寺と稱して、昔は甚だ諸人の信仰した寺だから、貫之も定めてそこに詣でたのであらう。「あへりける女」も同じく其處よりの歸途なのであらう。「女の多くあへりける」は女が多勢出で來逢つたの意。○あづさ弓　春の枕詞。○道もさりあへず　道も避ける間なくの意。

大意 春の頃志賀山越をすると、道も除けて居る間もなく、花がサばらくと散つたわい。

評 花を女どもに喩へて、餘り貴女達が多勢なので避くべき道もなくて當惑したと誇張したのが、彼の婦人連に對した冗談口で、卽興の面白味がそこに生ずる。この當惑はむしろあり難い望ましい當惑だから妙だ。もとよりこの山越は花の多かつた處と思はれるから、目前の實景を直に轉用したのを、作者の氣轉とする。さる山越の路に、思ひの外花やいだ壺折姿の女房達が數多出會つたとしたら、どんなに珍しからう。好奇の心を惹いたらう。かうした場合に物などいひ遣ることは、この時代には常にあることで、あな勝珍しいすき業でもないが、又風流な所作でもある。

寬平の御時ききさいの宮の歌合のうた

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

釋 ○若菜　春上に既出。○散りかふ　縱横に散り亂れるをいふ。「かふ」は交ふの意。○まどひぬ　「ぬ」は現在完了の助動辭。

大意 この春の野に只若菜を摘まうと思つて來たものを、それにまあ左右から散りまじる花の爲に、若菜摘みに行くべき道は踏み迷うたわ。

評 景樹が「若菜摘む事はうち任せては女の爲業なるを、男もして遊ばむといへる、春興思ひやるべし。素より浮かれ心に任せたれば、實は花ある方に終日暮して、若葉摘むといひしに違へるを、散りかふ花に道を間違へたりと云へるがをかしきなり」といつたのは、よくその間の消息を穿ち得た說である。

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山べに寢たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

釋 ○山寺に云々　「まうでたりけるに」は詣でたりける折の意。折の名詞を略いた格である。宣長が「歌に夜はとあれば、けるにのに文字はよにて、夜の義ならむ」と疑つたのは拘泥である。然し高野切にはよとある。

○やどりして　宿をとつてといふに同じい。

大意 花の散る春の山べに宿をとつて寢たその夜は、寢て居る夢のうちにも、花がサ散つたわい。

評 作者心願の筋があつてある山寺に參籠したが、折しも落花の盛りで、盡日惜み暮した其の夜の夢に、また花の散るを見たのを、夢路にまで散つたと驚訝したのが趣向で、頻りにしきつて散りに散る花の狀が思ひやられる。躬恒のうた、

おきふしに惜むかひなく現にも夢にも花の散るをいかにせむ

を一層巧んだので、斬新である。又山寺に一宿したのを、わざと花蔭に寢たやうに取り成したのは、「夢のうちにも花の散る」をいふ伏線である。初句は二句を隔てゝ三句へかゝる。寂寥たる山寺の春は浮世の塵緣を斷つて、花より外に問題になるものもなく、思念を煩すものもない。風流の極致である。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

ふく風と谷のみづとしなかりせばみ山がくれの花を見ましや

釋 ○水とし　「し」は强辭。○み山がくれ　山陰に隱れたのをいふ。「み」は美稱。○や　反勁辭。

大意 吹き散らす風と、散り浮いたのを流す谷川の水とがサなかつたものならば、山の奥に隱れて咲く花を見られようか、見られはすまい。

評 さても嬉しいのは風と水との情なるよの餘意がある。その散り浮く花を直に山奥の花と速斷したのは、ゆかしく懷かしい餘のおし當て心ながら、あたりに花の木もない山路の狀と知られた。さては折角の春の山踏に目ざす花にも逢はず失望しつゝあつた際、纔に澗水に一點の紅を見付けた趣で、何で嬉しくなからうか。吹く風と谷の水との勞を犒つて、一言感謝の意を表しないでは居られまい。かうしてこの三十一字は歌ひ出されたらしい。

上句、六帖に谷川の流れて來ずはおもほえずとある。

志賀より歸りけるをうなどもの、花山に入りて藤の花のもとに立ち寄りて歸りけるによみておくりける　僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

釋 ○志賀より云々　前にもある志賀寺へ參詣して歸つて來た女達が、遍昭が住持する花山寺に入つて、庭の藤の花を見て歸つたのである。これは志賀の山越をしないで、志賀から打出の濱を經て、逢坂山を越えて京へ歸る途中、山科の花山寺に立ち寄つたと見える。いづれ京の宮女連だらうから、京へ歸り行くあとを追はせて、

この歌を贈つたのだらう。○よそに見て　他人向によそ〳〵しく見ての意。○はひまつはれよ　蔓を延べて這ひ纏へよの意。「よ」は命令辭。

大意　こゝに立ち寄りながら、自分をよそに見て歸らうとする人に、こりや藤の花よ、這つて纏ひ附いて是非引き留めるやうにしてくれよ。假令それが爲にそちの枝は折れるとも構はずにサ。

評　この時代の婦人は頗るの佛教信者だから、殊に現世利益の觀音信者だから、志賀、石山はその參拜の標的であつた。さてこの人達はかねて當代の大智識たる遍昭に歸依してゐた事は勿論であらう。志賀詣の歸途訪うたのも、そんな渴仰の心持に惹かされたのであらう。がさうした道行ずりでは、ゆつくりして居られぬので、住持遍昭の機嫌をも伺はず、藤の花だけ見てすぐに歸つたのである。「よそに見て」は住持遍昭を餘所に見たのである。諸註、これを藤の花をよそに見る意に解いたのはいかゞ。詞書の「立ち寄りて歸りける」といふ詞續きは藤の花を見るや否やさつさと脇目も振らず歸つた趣で、現に花の蔭をも立ち馴らした以上は、決して藤の花を「よそに見る」とはいはれない。枝は折るとも這ひまつれよは頗る狂痴の趣がある。引きとゞめよの餘意を說破しないのは、餘情を饒からしめる。

結句、六帖にはとかむ間をだにとある。意は藤の花が其の人に纏ひ附いたらば、それを解き捨てなければ歸れまい、さらば解き居る間なりともとゞめて見たいといふ。眞淵は「これこの僧正の口振なり、枝は折るともといへるは理り盡きず、詞もよしなし」といひ、景樹もこれを是として深く慕へる意をかくみやびに面白く、しかもいひはてずしてあざやかに聞かせたらむ、凡器の及ぶ所にあらず」とまで賛へてゐる。萬葉集十二、

さひの隈檜の隈川に馬とめて馬に水かへわれよそにみむ

とその着想がひとしいが、歌柄は檜隈川に遠く及ばない。

家に藤の花咲けりけるを、人の立ちどまりて見けるを

よめる　　躬恒

わが宿に咲けるふぢなみ立ち返り過ぎがてにのみ人の見るらむ

評　○家に　躬恒の家に。○ふぢなみ　藤靡（なび）の義。藤の花の靡くよりついた名。藤といふも同じい。さて波に寄せて、下の「立ち返り」にかけ合はせた。○立ち返り　引き返し〳〵。○過ぎがてにのみ　通り過ぎる事が出來にくさうにばかりの意。

大意　よくもない自分の庭に咲いた藤の花なのを、何で立ち戻り〳〵して通り過ぎ難いやうに、ひたすら人が見る事であらうぞ。

評　この筆法を世に卑下自慢といつてゐる。詞のうへでは我れからおとして、立ち止まつて人の見るのを訝つたさまながら、底の意はそれも詰りは家の花のよいからと落着させるいひなしで、頗る婉曲である。三四の句間に、例の何故（なぜ）にの語を挿入して聞くべき格である。「人の」は上に「しづ心なく花の散るらむ」とある花のと同じことで、語調を緩和してゐる。又「藤なみ」に淵波を寄せたやうに解した人もあるが、却つて纖巧に傷くかと思ふ。それも池の藤なみなどある場合は、或はさうかとも諾かれるが。

結句、一本に人の見ゆらむとあるのを眞淵は采つたが、この歌の體では本文の方がいゝ。

題しらず　よみ人しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなの小嶋のさきの山ぶきの花

釋 ○今もかも　「今も」の「も」は物を含めていふ辭。「かも」の「か」は疑辭、「も」は歎辭。○たちばなの小嶋のさき　大和國高市郡飛鳥の橘の島といひ、或は山城國宇治川の北岸橋姫社の下に山吹の瀨といふがある、其處だともいつて一定しない。○山ぶき　棣棠。歎冬と書くは當らない。

大意　昔見た時は見事に咲き匂つて居たが、この節も相變らず咲き匂ふ事であらうかまあ、あの橘の小嶋の崎の山吹の花は。

評 萬葉集卷八に、

かはづ鳴く神なび河にかげ見えていまや咲らむ山吹のはな（厚見王）

とあるを、所を易へたのみだと、眞淵はいつてゐる。萬葉のは二三の句調も七五に流れてゐるから、この歌の方が格調は古く聞える。然しそれだけの理由で時代の前後を斷定することは稍早い。抑も飛鳥の橘の島の宮は草壁皇子のお邸である。その御庭に中島などあるので、島の宮の名が附いたらしいが、小島と打ち任せていふことは全く諾かれない。これはやはり宇治の橘の小島として解しておかう。

これなむ橘の小島と申して。（源氏浮舟の卷）

平等院の丑寅橘の小島が崎より、武者二騎かけ出でたり。（源平盛衰記）

とある處で、平安遷都後の人が、暮春には舊都の奈良から折々行遊も試みた、宇治川沿岸の山吹の花を想ひ出して、「今もかも」と追憶に耽つたので、その感懷は無量、語意も高朗、格調もをゝしく大らかである。

○

はる雨に匂へるいろもあかなくに香さへなつかし山吹のはな

釋 あかなくに　飽かぬにの意。「なく」はぬの延言。

大意　春雨に濡れた美しい色艶も、見飽きせぬうへに、香までがよくて、側を離れともなく懷かしいわ、山吹の花は。

評 山吹は萬葉にも「妹に似るてふ」など詠んで、暮春の景物の尤なる物にもてはやされてゐる。雨のしめりには香のまさるものだが、山吹の香がそれ程好もしい嗅感を起すことは、餘りとも思ふが、此の頃のには、女郎花にも香を詠んである位で、現代の人よりは嗅感の發達してゐたことは事實である。但山吹の香も幾群となく咲き滿ちた花のうへに風など吹き渡つたとしたら、或は匂ひもしよう。「いろも」と「香さへ」とを對照させてゐる。すべて心詞に盡きて、言外の餘味に乏しい。

○

山吹はあやななな咲きそ花見むと植ゑけむ君がこよひこなくに

釋 ○あやなな咲きそ　「あやな」はあやなくで、分別なしの意に用ゐる。「な咲きそ」は咲く事勿れの意。○け

む　過去を想像する助動詞。○こよひ　今宵。

大意　山吹は無分別に決して今咲くなよ、花を見ようと思つて植ゑて置かれたあの御方が、今夜來もせられぬのに、咲いても何の詮もない事なのを。

評　この歌の妙趣を會得しようとするには、まづ往古の習俗を知らなければならぬ。當時は夫婦でも初からは相住しない。男の方から夜毎に女の許に通つたのである。これ忍ぶの怨むのといふ戀歌の昔に多い理由で、必ずしも風俗の淫猥だつたのではない。今も壻取した女の詠んだ歌で、その壻殿が山吹を前栽に植ゑさせて、花が咲いたら一緒に見ようと豫約してゐたのに、差支があつてか壻殿が來ぬ折しも、猶豫なく山吹の花が咲き出したのを見て、肝心の植ゑ主も來ぬのに咲く山吹はあやなしと罵つた。これ卽ちこの山吹の咲くのにも來ぬ人のあやなさをも、間接に怨んだものである。「こよひ」とあるはその當夜ばかりの夜離れの趣である。それですら百日も不沙汰したやうに、山吹を借りて鬱憤を洩す。その戀心の濃厚なことに驚かされる。情景相協つて比興面白く、幽怨の意が隱然としてゐるのは佳作である。

よし野川のほとりに、山吹の咲けりけるをよめる　つらゆき

よし野がは岸のやまぶきふく風に底の影さへうつろひにけり

釋　○よし野川　大和國吉野郡吉野にある。

大意　吉野川の岸の山吹を吹き散らした風の爲に、誘はれさうもない水底に映つた影までが、思ひかけず散つてしまつたわい。

評　吉野川は山ふところで、おのづから山風も烈しい。それが「影さへ移ろふ」の伏線を作してゐる。岸の花が散れば、その影だから底のも散つて見えるのは當然なのを、全然別物に扱つて、幼く愚に詠んだのを一ふしとする。上にこの作者の「夢のうちにも花ぞ散りける」と詠んだのと同趣向である。山吹、ふく風と、同音の類語を疊み重ねて聲調をとゝのへ、又岸と底とを對比させてある。

題しらず　よみ人しらず

かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを

この歌はある人のいはく　橘の清友がなり。

釋　○かはづ鳴く　「かはづ」は天曆以後の歌では、今蛙といふ田居中に喧しく鳴く蟲をいふが、この集より以前のは、夏の頃より秋を專らに鳴く河鹿のことである。河鹿は春はまだ鳴かぬから、こゝは「かはづ鳴く神なひ川云々」（萬葉八）の歌と同じく、只その所の物を頭において序詞としたまでである。○井手　山城國相樂郡。井手の里、井手の玉川、皆こゝである。井手はその玉川にある堰堤から起つた名である。されば井手の山吹は玉川の堰のある塘に咲いた山吹をいふ。

大意　この井手の山吹が、思つたより早く散つてしまつたわい、今少し早く來て、花の盛に逢はうであつたものを、さて〳〵殘念な事をした。

評　二段に切りとゝのへて、しかも末をいひさしたのは、無限の感慨を含める叙法である。又はじめより井手の

山吹と打ち出すのは唐突と酔酔して、「かはづ鳴く」の序詞を置いたのも、おのづから句があつて優美な觀想が深まる。萬葉集卷八に、

君が家の花たちばなはなりにけり花のある時にあはましものを

この橘を山吹に取り換へたのみだが、感愴の深さ聲調のうるはしさは、却つて優つてゐる。品格高く餘韻がまた饒い。

左註に橘清友とあるは、諸兄公の孫檀林皇后の御父で、仁明帝の御外祖父に當るので、太政大臣を贈られた人である。されば橘の清友がなど書いては失禮である。後人の書き入れた注であることは明瞭である。但井手の地は橘氏に緣故あり、歌の體格から時代を推究してみると、或は清友公あたりの作かも知れない。

春のうたとてよめる　そせい

思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寢してしが

釋 ○思ふどち　氣の合つた同志。○うちむれて　「うち」は接頭語。○そこともいはぬ　必ず其處とさしてもいはぬ。○してしが　して見たい。「が」は希望の辭。

大意 氣の合つた同志、興味の多い春の山邊に、多勢連れ立つて一日遊んで、日の暮れた所を宿として、行きつき次第に、必ず其處と定めた事のない旅寢をして見たいものぞ。

評 さらばいかに愉快な事だらうの餘意がある。「春の」の一語眼目である。よろづの花咲きいろ〳〵の鳥啼く春の山邊だから面白い筈だが、それも一人では十分に愉快でないから入懇の朋友三四輩と共に行き、又日の暮れるを限として歸つては十分面白くないから一夜を泊る事とし、又その宿を必ず其處と指定しては煩はしくて自由でないから、行きつき次第何處にでも泊る事として遊んで見たいと、作者が遠慮のない十分の慾望を述べたのである。その慾望が全部自然の懷に抱かれて遊びたいといふのだから、罪はない。作者素性はこの時代には比較的遊覽好の旅行家であつて、野邊山邊の二語は絶えずその口頭を往來して謳歌讃歎された。されば歌もおのづから脫俗の氣味があるが、素より渠れは枯木死灰的の老禿ではない。乃父の氣質を遺傳して極めて情の勝つた人、その境遇からして、自然に烟霞の癖を助長させたやうである。故にその歌にまた蔬菜の氣、抹香の臭味のないのは、大いに喜ばしい。

四句、顯本にそこともしらぬとある。

春のとく過ぐるをよめる　みつね

あづさ弓はる立ちしより年月のいるが如くもおもほゆるかな

釋 ○あづさ弓　春上に既出。春の枕詞。○年月　時日といふ程のこと。○いる　射る。

大意 冬のうちは年月も長く覺えたが、梓弓を張るといふ名の春の立つたそれからは、年月が早く經つて、矢を射るやうにまあ思はれる事よ。

評 春は四季のうちで殊に物見遊山の興がおほく、浮かれ心に任せては光陰の移るのも覺えないので、あわただしく春の暮れた心地がして、打ち驚いた狀である。この作者又、

はかなくて春二月は過ぎにけり花の盛はすぎがてにせよ

と詠んでゐる。梓弓は既に春の枕詞に用ゐたのを、再びその縁語で、速に早しの意を「射るが如くも」と轉義した。又「年月といふ語は春にては穩かならず、拾遺集及び六帖、家集に、歳暮の歌の中に入りたるが正しからむ」といふ説もあるが誤解である。これは熟語で、年は輕く添はつたまでゝ、時日などいふと同じ語例である。とにかく縁語の鎖り續けは狂歌めいて聞える。この作者の下作であらう。

四句、家集にいにしがごともとある。

やよひに、鶯の聲の久しう聞えざりけるをよめる　つらゆき

なきとむる花しなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり

釋 ○なきとむる　鳴いて留める。○ものうく　大儀に、面倒ななどの意。○鶯も　「も」は例の強い意で、さへもといふに當る。

大意　いかに惜んで鳴いても、散るを留め得る花がサないので、流石の鶯さへもあげ句のはてには、鳴くのが大儀になつてしまひさうな樣子であるわ。

評　それ故近來一向鳴かなくなつたのだらうの餘意がある。わが惜むにも關はらずひたすら花は散るので、途方にくれてゐると、たまゝ鶯が久しく鳴かないのに氣が付いて、その理由を同情に推察した。鶯の鳴くのを花の散るを惜んで鳴くと見るのは例の事で、さてその上に一趣向を立てたのである。

やよひのつごもり方に、山を越えけるに、山川より花の流れけるをよめる　ふかやぶ

花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり

釋 ○つごもり方　「つごもり」は月隱（ツキコモリ）の義で、下旬又は晦日をいふ。「つごもり方」は無論下旬のこと。○ふかやぶ　深養父の字を書く。この作者はこゝに初出だから、氏を署すべきである。氏は清原である。○まにまに隨ひての意。○とめくれば　「とめ」はもとめと同意。景樹はよく心を注ぎ目を留むると釋して、尋ぬる意と解するのを破した。

大意　花が散つて流れる川筋について、水上の方へと留意しつゝ來れば、麓とは違つて山には、意外に花ばかりか、はや春もなくなつてしまつたわい。

評　麓の里こそ散り方なれ、山ふところには猶風隱れする花もあつて、春めいた景色が多からうと、谷川傳ひに溯つて見ると、豈に料らんや滿山は綠盡して、却つて夏めいたさまなので、「山には春もなくなれり」と愕かれたのである。「山には」の「は」の辭は花散れる麓に對へ、「春も」の「も」の辭は花、もを含めてある。三月の下旬だからなほ春であるが、春の證として見るべき物が無いから、春は無くなつたと斷じた。かくいふが歌である。六帖に、二句の「水」を道とし、結句は殘らざりけりとあつて、夏の歌にしてある。又北村季吟の抄本に、四句山にも春はとある。意はよく聞えてゐるが、驚歎の意が淺い。

春を惜みてよめる　もとかた

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

大意　立ち出でぬ前ならばとにかく、春の君がはやその歸途にサ、霞の立つ如く立ち出でたと思へば、今更別を惜んでもとても留りはせぬに、それをやはり惜むは愚なことであるわ。

評　人の別れには、まだ出立せぬうちにこそ惜んで留める法もあれ、既に門出してはその甲斐もないことを、下に思つて詠んだ。今日しも打ち霞んだうちつけ心から、「立つ」をいひ出す序詞として、當季の景物たる春霞を用ひたので、霞が主でない事は、上の、

今よりは梅のはな植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

の處に於いていつたのと同じ趣である。されば霞を重く見て、春霞が歸途に就いたやうに解いた說は、粗漏といはねばならぬ。畢竟春を擬人して、その暮れ行くを彼の本所へ歸るものと見たのが、一趣向なのである。巧ではあるが、感哀に乏しい。餘韻の人を動かす處ないのは、元方の歌の通弊である。

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた　おきかぜ

こゑ絶えず鳴けや鶯ひとゝせにふたゝびとだにくべき春かは

釋　○こゑ絶えず　聲を絶やさず。○鳴けや　「や」は命令辭。

大意　これ鶯よ、隨分聲を絶やさずに鳴いてくれよ、なぜなれば、一年のうちに三四度はおろか、二度とさへも來るべき春かまあ、只の一度より來はせぬ貴い春ぞよ。

評　春の日數も殘少なくなつた頃、鶯の聲の途絶えた時分の感想である。「一年に二度とだに」と、數量の語を懸け合はせて闢はしめたのが詞のあやで、かく春の來ぬ事を丁寧に諄くいふのに、今の殘春の貴く大切な趣を反襯してゐる。それだから今のうちにお前の鳴くべき時を過さず鳴けと、鶯に警告した。この鋭い突き込んだ語調は、鶯を激勵するに十分である。下句は一寸理窟めいてゐるが、それを基礎として鶯の囀を强要したことは頗る詩的である。構想既に面白く、詞遣ひもまた巧者。

初句、六帖に聲たてゝとある。

やよひのつごもりの日、花摘より歸りける女どもを見て　みつね

よめる

とゞむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

釋　○花摘　舊曆の二三月のころ野山に出て、花を摘んで先祖の墓を祭り佛に奉るをいふ。草花などをも摘む。○物とはなしに　物ではないのにの意。○はかなくも　しかと取り留めた處のないのをいふ。○たぐふ　類ふの義。附き添ふをいふ。○心か　「か」は歎辭。

大意　附き添つて行つたとて、留められよう物ではないのに、あの花が惜しさにたわいもなく、あの散る花といふ花毎に、附いて行く私の心よ。

評　摘みためた花束を持つて女どもの戯れながら來ると、春の末の花なので、脆くも片々と散亂する。さてその

散る花を女共に譬へたのは、前に貫之が「道もさりあへず花ぞ散りける」と詠んだのと同趣向で、今花摘から歸つて來る美人どもを見れば、一人一人に心移つて、それにもこれにもわが心の惹かれてゆく事かな、さりとて遂にその女を引き留め得べきでないのにと、人知れぬ仇心をはかなんだ譬喩歌である。「はかなくも」の自嘲の一語、却つて理性をよそに落花に熱狂する態度を、強く點出した。但初二句はすこしいひ過ぎかと思ふ。概しては艶柔な趣ある歌だが、貫之の「道も去りあへず」の作に比べると一等を下る。又詞書に「三月晦日」とその時日をことわつたのは、春の果だから散り行く花のいよ〳〵とゞめ難い意を、たしかに聞かせたい爲である。

やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて

人につかはしける　なりひらの朝臣

ぬれつゝぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

釋 ○ぬれつゝ　濡れながら。

大意 この藤の花を、今日のこの雨に濡れ〳〵してサ、無理に折つたわい、なぜなれば、もはや當年の一年のうちには、春は幾日もあるまい、卽ち今日一日と思ふからサ。

評 藤の花を春の象徴として、「春を過ぎては藤の花も見る甲斐なければ、雨を冒しても今日折り取つて、貴君の御覽に入れたのだから、其の心で見て下さいの餘意がある。歌には雨とも藤の花ともないが、「濡れつゝぞ」「折りつる」で、略その片影をほのめかし、餘は眼前の事相、卽ち其の日降つた雨と贈つた藤の花とに讓つて、暫くいはないのである。實際の作には必ずこれらの省筆法がある事を知らなければならない。又濡れながらも折るは、志の懇切さを思はせる態度で、上の「わが衣手に雪はふりつゝ」とある光孝帝の御歌と、その軌を同じうする。風體抄に「しひてといへる、姿も詞もめでたく侍るなり」とある。他の日數こそ多けれ春は幾日もと強く摘出したのに、思ひ入つた趣が深い。但業平朝臣の作としては、決して上乘なものではない。

伊勢物語に「昔衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。彌生の晦に雨そほ降るに、折りて人の許へ奉るとてよめる」と詞書して、この歌がある。三句、同書の塗籠本といふには藤の花とある。又家集には、三句以下藤の花春はけふをし限と思へばとある。景樹はこれを執して、「初二句迫れる意調なるに、下句幾日もあらじは、今日一日のみにおし詰まれる意ならねば、語調弛びて打合ひ難し。詞書にも晦の日とあれば、けふをし限とあるをもて正しとすべし」といひ、又「この集の詞書は伊勢物語の攙入にて、物語の詞書は晦と弘くかけて、必ず晦日の事ならねば、下句もこれにて適ふなり」といつた。實に詞書に親切な見解で的論と思はれる。姑く錄して後勘を俟つことゝする。

亭子院の歌合に、春のはての歌　みつね

けふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

釋 ○たつ　起つの意。立ち去ること。○かげ　蔭。

大意 もう今日だけと春を思はぬ時でさへも、立ち去る事が出來やすい花蔭かまあ、それでさへ立ち去り難い花蔭だつたのに。

評 まして今日かぎりの春では名殘惜しくて、いよ〳〵花の蔭は動かれぬの餘意がある。家集に、

けふ暮れてあすとだになき春なればたゝまくをしき花の蔭かな

同意ながら、率易に失して滯澁の弊がある。恐くはこの原作ではあるまいか。刻意推敲の結果、造句の巧を極めたものと思はれる。當時の歌合の判詞には、をかしと評してある。但立意がやゝ理路に渉つてゐる嫌があるのは遺憾である。

序にいふ「打聞」に慈鎭和尙の本といふに、「たれこめて春の行方も」の歌の次に、

つらゆき

さくらの遣水にちりけるを

ゆくみづに風のふき入るゝさくら花きえず流るゝ雪かとぞ見る

又「ことならば咲かずやはあらぬ」の歌の次に、

貫之

雲林院にまかりて櫻のちりけるをよめる

雪とみてぬれもやするとさくらばなちるに袂をかづきつるかな

の二首があつたと出てゐる。

古今和歌集卷第三

夏歌

題しらず　よみ人しらず

わが宿の池のふぢなみ咲きにけり山ほとゝぎすいつか來鳴かむ

この歌ある人のいはく「柿本の人丸がなり」。

釋 ○池のふぢなみ　池の邊の藤の花。「ふぢなみ」は藤蹠（ナミ）の義で、藤の花房は垂れなびくのでいふ。或はいはく藤並（ナミ）の義と。とにかく花についての稱である。藤波と書くは借字。○咲きにけり　「にけり」に驚歎の意を含む。○山ほとゝぎす　山の時鳥。時鳥は陰暦四月の初から五月を盛りに里近くも來て、夜をおもに鳴く。子規、杜宇、杜鵑、蜀魄、時鳥、郭公、霍公鳥などの字面を用ゐる。

大意 自分の庭の池の邊の藤の花は、意外に咲いたわい、さては山の時鳥はいつ頃山から出て來て鳴かうか。

評 藤の花は暮春から初夏にかけて咲く。時鳥は初夏から仲夏をおのが時として鳴く。今意外にも庭前の藤の花の咲き出したのを見て、俄に夏の景氣を感じて、時鳥を下待つ心になつた趣である。抑も庭前に池を設け、その中島の松に藤をからませるといふ趣向は、平安人士の好みであつた。蓋し藤の花と時鳥とは、奈良時代から

も頗る珍重され、屢歌人の題詠にのぼつてゐる。で藤の花によつて時鳥を聯想することは、火を見て烟を思ふよりも自然であつた。「藤なみ」に淵と波を寓せたとする說もあるが、それでは甚だ小細工で、この歌の味ひを少なくするものである。「山時鳥」は「宿の藤なみ」に對へたので、後世の歌の、山に何の意義なしにいひ續けるのとは違ふ。一首を二段に切りとゝのへて、上句と下句とを排對して闕はせてゐる。下句は、

朝がすみたなびく野邊に足引の山ほとゝぎすいつか來鳴かむ　（萬葉十）

とあるに全く同じであるが、霞と時鳥の關係よりも、この方が緊密なだけに諾はれる。

藤なみの咲きゆく見れば時鳥なくべき時に近づきにけり　（萬葉十八）

はこの先鞭で、一寸軒輊しがたいやうだが、よく味ふと說明に過ぎて、この歌ほどの含蓄がない。

藤なみのしけりは過ぎぬあしびきの山時鳥などか來聞かぬ　（萬葉十九）

はほゞ同じ體製であるが、境致の面白さは池の藤なみに及ばない。

わがやどの池のふぢなみ咲きしより山時鳥待たぬ日ぞなき　（躬恒集）

に比べれば遙に優つてゐる。姿高く心ひろく、巧まぬやうで底に工のあるのは、古風を存した所で、上乘の作だらう。

結句、六帖に今や來鳴かむとある。景樹が「いつかは少し間のあるさま、今やはその時に臨みたるさまなれば、こゝは鳴くべき時節に向へるなれば、今やの方正し」といつたのは、一往は尤もと思はれるが、前にもいふ如く、まだ咲かぬ筈の花の咲いたにつけて、急に待つ心になつた趣だから、「いつか」の方がやはり可からう。左註は例の采り難い。そんな傳へもあつたのだらうが、更に人麻呂の歌體でない。ずつと後のもので、平安遷都後の作な事は勿論である。

紀のとしさだ

うづきに咲ける櫻を見てよめる

あはれてふ言をあまたにやらじとや春におくれて獨さくらむ

釋 ○うづき　卯月で、陰曆の四月の異名。卯の花月の略とか。○あはれてふ言　あはれと感賞する詞「あはれ」は歎詞。「てふ」はといふの約。○あまたにやらじとや　多くの他の木に頒ち遣るまいといつてか。

大意　あゝ見事なといふ人の褒詞を、數多の櫻に頒けて遣るまい、自分の獨占にしようと思つて、わざと數多の櫻の咲く春に後れて、花の珍しい時分に、獨この櫻は咲くのであらうか。

評　假令喝采稱讃の語にせよ、獨占を望むのは、人道上からは惡德とも見られるが、櫻の感情と見れば、人間じみて飛んだ可愛い。元來櫻には何の意識もない。只隱微な人情の消息を物に託して洩らしたのである。結句「咲くらむ」にさくらを詠み込んである。それで詞書なしでも櫻の歌とわかる。

題しらず

よみ人しらず

さ月まつ山ほとゝぎすうちはぶき今も鳴かなむこぞのふる聲

釋 ○さ月まつ　「さ月」は陰曆五月の異名。早苗月の義。なほ諸說ある。時鳥は多く五月に鳴くのでおのが五月などもいひ慣れてゐる。そこで四月頃はその鳴くべき五月を、山の中に待ち居るものゝやうに取り成していつた。○うちはぶき　「うち」は接頭語で勢を強むる語。「はぶき」は羽振で、羽叩きする事をいふ。振りを古くは

ふきといつた。○こぞのふる聲　去年の舊い聲。

大意　五月をおのが鳴く時として待つて居る山時鳥よ、まだ五月にならぬから、今年の初聲は出されずとも、山から飛んで來て、去年の舊聲なりとも、この卯月の今まあ鳴いてもらひたいわ。

評　聲に新古の別がある筈はないが、それをあるやうに取り成すのが作意である。

こぞの夏なきふるしてし時鳥それかあらぬか聲のかはらぬ　（夏　歌）

あたらしくてる月影に時鳥ふる聲しるく鳴きわたるなり　（躬恒集）

などあつて、時鳥に古聲をいふのは、この集の前後に專ら流行した意想と見えた。しかしこの歌の面白い所は、去年の古聲でもいゝから聞かせてくれと、極めて消極的な謙讓な希望を叙べたと表面には見せかけて、その實甚だ狡猾で、去年の古聲でも今年はじめて鳴けば、卽ち今の初聲であることである。又「うちはぶき」は鳴いて飛び出す形容なので、隨つて「さ月待つ」が山にひそみ隱れ居る狀にも聞かれ、相對上甚だ面白くなる。「今も」はおのづから「ふる聲」に對へた響がある。意詞曲折して巧なものである。

さ月こば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどのこゑを聞かばや　伊勢

譯　○こば　來らば。○ふり　舊り。○まだしきほど　未（イマダ）しき間。○ばや　希望の辭。

大意　時鳥は五月が來るならば、屢鳴くので、聲が舊臭くなつてしまはう、それ故今のまだ早いうちの聲を聞きたいものよ。

評　そしたら珍しからうをの餘意がある。四月中に時鳥の聲を待ち戀ふる意は、前の歌と同じで、その趣向が遙ふ。理が聞え過ぎて、歌は遙に下つてゐる。いやその知れ切つた道理を時鳥に說得してゐる態度が面白い。

五月待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする　よみ人しらず

譯　○五月待つ花たちばな　「五月待つ」は前の時鳥の歌にあると同じで、橘も五月に咲くものだからである。されど前のはその五月を待ち居る間をいひ、これは既に五月を待ちつけて咲き出たのをいふので、少し異なる。○花たちばな　橘を四五月の交、花咲く時につけていふ稱。この橘は今いふ橘とは別種の物で、葉と花と實とを同時に賞翫したことが、古い文書に見えてゐる。その點では今の夏蜜柑が近いものであるが、もつと小さい實で柑子の如き物であつた。密柑を以てこれに充てるのは無稽である。あれは實が花の咲く夏まで保たない。

大意　五月を待ちつけて咲く、その花橘の香を嗅ぐと、今に忘られぬ昔馴染の人の袖の香がサ、存外するわ。

評　橘の木蔭近くさまよふ人の、うちしめりなつかしく匂ふ花の香に、ふと昔の人の袖の香を聯想して詠んだものだ。香を嗅ぐといふに、作者の動作が現れて、相對的に昔の人が親密に意識されてくる。この「昔の人」は死んだ人の事ではない。昔馴染の人である。作者はこの歌の勁健な風調から推すと、男と思はれる。すると袖は昔馴染の女の袖である。かう兩性間の問題となると、その袖の香を云爲するのは、卽ちその女を云爲する譯となるので、一時忘れて居た戀々の情が、橘の香によつて復活する。詠歎の味ひが隨つて永く深い。今少し感情の動きに猶豫あらば、昔の人の袖の香ぞ思ひ出でらるゝと、多少分別の語にも涉らうが、只それを嗅いだ瞬間

の感じを端的に打ち出したので、直に「袖の香ぞする」と決定的に斷言する始末となつた。これがこの歌の佳い處だらう。春歌上に「誰が袖ふれし宿の梅ぞも」とあるも同趣であるが、これは天籟で、人爲の工がないので優つてゐる。歌體古朴で雅で、たしかに奈良の遺調である。「香」といふ語が二つある。古代は同字の病を忌む事が嚴でなかつた故もあるが、猶よく思ふと、橘の香と袖の香と、自然の對を作つてゐるやうだ。

○

いつのまにさ月來ぬらむあしひきのやま時鳥いまぞ鳴くなる

釋 ○鳴くなる　「なる」は歎辭。

大意 これはまあ何時の間に五月が來たのであらう、五月を時として鳴く山の時鳥が、思ひもかけず今サ始めてあれ鳴くわ。

評 これも時鳥は五月の節に鳴くものとして、光陰の推移の速なことを驚歎したのである。秋歌上に、

きのふこそ早苗とりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風ぞ吹く

とあるに立意は相似て、「いまぞ」の一語がこの眼目である。その突然なのを意外とした樣子がよく表現されてゐる。これを「日頃待ちに待ちたるを待ちつけ得たる意」と解した人もあるが誤解である。それでは初句の「いつのまに」が無用の語となるではないか。歌の姿はのんびりしてゐる。

○

けさき鳴きいまだ旅なるほとゝぎすはな立花に宿はからなむ

釋 ○旅なる　住み着かずしてあるをいふ。

大意 今朝はじめて山から里へ來て鳴いて、いまだに旅がけで居る時鳥よ、いづれ宿を借るだらうが、幸ひこの庭に咲き匂ふ橘に、宿は借りてもらひたいわ。

評 さらば其の聲が親しく又多く聞かれようと、頼み思ふ心持が歴然としてゐる。花橘が軒端に匂ふなつかしい夕間暮、今朝はじめて鳴いた時鳥が、猶あちこちと飛び廻つてゐるのを見て、旅がけの人を聯想し、さて旅人は夕暮には宿を借るので、それに擬へて、同じくは軒端のこの橘に宿つてほしいと希つた趣向は面白い。かう時鳥を人間扱にする事は、頗る時鳥に親しみを持つ所以である。今朝の時鳥と今も飛び廻る時鳥とは、別の鳥である事は無論なのを、おなじ鳥と見成したのは、全く分別を離れてゐる。古へは今の松や梅などの如く橘は大抵の人家の庭前にはあつたものである。空家になつても、必ずそこに橘が殘つてゐるので、故郷の軒の橘など詠み慣つてゐる。時に應じて時鳥に詠み合はせることは、後世鶯に梅を結ぶに同じい。奈良朝時代盛に愛翫せられた事は、萬葉集がその例を多く示してゐる。

音羽山をこえける時に、時鳥の鳴くを聞きてよめる　紀友則

おとは山けさこえくればほとゝぎす梢はるかに今ぞ鳴くなる

釋 ○音羽山　この音羽山は洛東東山の一峰。そこに今も名刹清水寺がある。

大意　音羽山を今朝越えて來れば、時鳥が梢の方遙に、思ひかけず今サ始めてあれ鳴くわ。

評　「音羽山を越えける」といつても、この路は音羽山と阿彌陀が峰との山峽を山科へ出る路で、今澁谷越といふ處である。作者は近江方面へ何か所用があつて、拂曉に京の家を出立して、澁谷越にかゝつた頃は、朝もまだ早い頃だつたらう。折柄はからず、都にはまだ聞かなかつた杜鵑の一聲を、若葉さす梢の一方に遠く聞きつけた景氣は、いひ知らず面白い。これを見上げた喬木の梢に高く鳴いた趣に見た解もあるが、それでは「梢はるかに」が打ち合はない。又「そ」の用法は、上の「いつのまにさ月來ぬらむ」の歌と同じである。實景を只ありに述べて、簡古質實なのは、延喜時代の人の作には稀に見る處で、この作者には折々かうしたのがある。

夏山の木ずゑしみゝに時鳥鳴きとよむなる聲のはるけさ

から胚胎したやうに一寸思はれるが、內容からいへば全く別裁に屬する。

時鳥のはじめて鳴きけるを聞きてよめる　そせい

時鳥はつこゑ聞けばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた

釋　○はつこゑ　はじめて鳴く聲。○あぢきなく　口語のつまらなくの意。○ぬし　主。○はた　當の義。さし當つた意にいふ。こゝはもまたの意ではない。

大意　時鳥の初音を聞くと、さし當つてつまらなく、誰れともその人の定まらぬ戀心地がそゝられることは、奈良人の詠にある。じかしそれは、既に術ない程の戀に惱んでゐる人の事であつた。

何しかもこゝばく戀ふるほとゝぎす鳴く聲聞けば戀こそまされ　（萬葉卷八）

神なひのいはせの杜のよぶ子鳥いたくな鳴きそわが戀まさる　（同　上）

など、何につけても傷心の種となり、戀ひまさる端となる事を思へ。然るに素性のは全く立場が違つてゐる。彼には戀の基調はない。只時鳥の聲を聞くと人戀しい思がふと起るといふ。その理由は彼れの環境が絕對に寂しいからである。既に寂しいその上に、哀感をそゝる時鳥に鳴かれては溜つたものではない。油然として王定まらぬ戀心地が湧くのは、當然の歸結である。「はた」の語調甚だ力量に富んで、置處が頗る妙である。「あぢきなく」は自己の行爲をよそ〳〵しく打ち眺めて、批評した口氣で、一寸考へると面白くないやうだが、元來が眞の戀に打ち込んでゐる場合でないから、かうした餘裕もその心境にある譯だ。

二句、家集にも六帖にも鳴くこゑ聞けばとある。これが正しからう。「初聲」は意も調も少し急で浮いてゐる。且又この集の詞書は、歌にあらはれた事は粗く書き、あらはれぬ事は委しく書いて、歌の意を扶けるのが例だから、歌に既に「初聲」とあつたら、煩はしく詞書に「はじめて鳴ける」と重ねて書く筈がない。

奈良のいそのかみ寺にて、時鳥の鳴くをよめる

いそのかみふるき都のほとゝぎすこゑばかりこそ昔なりけれ

釋　○奈良のいそのかみ寺にて云々　「いそのかみ寺」は大和國山邊郡石山（イソノカミ）の良因院をいふ。作者住持の寺である。「奈良の」とあるが古來の集訟となつてゐる。奈良と石上とは處が離れてゐるのに、いひ續けたのは不審である。或は「石上へ」は奈良を過ぎて行けば遠からぬ程にもあればいひ續けたり」といひ、或は「歌にいへるふるき都は

奈良の故京をさしたるなれば、安康帝の石上なる穴穂宮、仁賢帝の廣高宮と紛れぬ爲に、奈良のと添へたり」といひ、或は「平安の京となりては、石上あたりをも廣く奈良といひならへり。譬へば今の世に丹波國なる愛宕を京の愛宕といふ類なり」といひ、或は「奈良のは全く後人のさかしらに加へしなるべし。歌は石上の懷古なるをや」ともいつて一決しないが、昔の奈良の京は廣大で、石上に隣接してゐたうへに、後世大和の七大寺十五寺を南都七大寺十五大寺といふ類で、大まかに書いたものと見てよからう。○いそのかみふるき都　石の上布留（フル）といふ續きで、布留は石上のうちの地名である。それに舊きをいひ添へた。

大意　この石上の古い都跡は、何もかも昔とは變りはてた中に、只時鳥の鳴く聲のみがサ、昔の通り變らずにあつたわい。

評　「こゑばかりこそ」の「こそ」の用法が力强いので、他の事物は一切昔でない趣が反證される。作者とて昔の時鳥の聲を聞いた譯ではないが、これは變化ないものと斷定して詠んだ。作者が住んでゐる良因院のあたりは、安康、仁賢二代の帝都の址で、衣冠の邸は梵僧が不斷讀經の場となり、花草の苑は野人が鋤き捨てた野らとなつて、前朝の事は茫として夢のやうに覺える中に、なまじひに感哀を催す時鳥の聲ばかり昔のまゝなのが、對映上却つて傷心の種子となるのである。上に、

ふる里となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり

とあると感興の基本が同じである。又萬葉集に、

あを丹よし奈良の都はふりぬれどもと時鳥なかずあらなくに（卷十七）

これは景物までも同じで、全く等類の歌だが、詞に精粗の差がある。所謂椋の葉磨きをかけて、古撲を切磋して清新としたのはこの作である。

題しらず

夏山になくほとゝぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ

よみ人しらず

釋　○夏山　夏季の山をいふ。○心あらば　思ひ遣りがあらばの意。

大意　この若葉さす頃の山で鳴く時鳥よ、汝も思ひ遣りの心があるならば、このやうに物思ひをして居る自分に、お前の鳴く聲を聞かせてくれるなよ。

評　お前の聲を聞けばいよ〳〵物思が增して堪へられぬからといふ餘意が含んでゐる。心ないものに對して「心あらば」と希ひ、「聲な聞かせそ」と誡へた。蓋し切なさの思ひ餘つた叫である。何か憂苦のある山里人の述懷で、時鳥の聲を悲しい聲と斷定しての趣向である。されば「なく」が主腦の語となるので、輕く看てはならぬ。まこと彼が聲は音短く節促つて淒絶惻絶、人の心を傷ましめる調子なので、漢土ではこれを血に泣くとも、蜀の望帝の魂の化した物とも、さま〴〵悲哀な傳說を傳へてはゐるけれど、面白く賞美する意に取り成した詩作は極めて稀である。日本でも古くは多く然うであつて、萬葉集にも、

時鳥なかぬ國にも行きてしがその鳴く聲を聞けばくるしも（卷八）

など詠んでゐる。それを尋ねても聞かうと願ひ、初聲を夜明かしでも待つやうに愛翫する趣に詠むのは、平安時代になつての事である。實際彼れの聲音は悲調を帶びてゐるが、環境や背景からして、又面白くも感ぜられもする。

○

ほとゝぎすなく聲聞けば別れにし故郷さへぞこひしかりける

釋 ○さへ　添ひ加はる意の辭。

大意 時鳥のなく聲を聞くと、さまゞ懐かしく思ひ出される事が多く、住み捨てた故郷の事までがサ戀しくなつたわい。

評 遊子の腸を斷つ不如歸の一聲は、漢詩にいひ舊した事である。「さへ」の一語は一寸考へなければならぬ。思ひ出の第一に推すべき筈の故郷を、「さへ」と第二におとしたのが訝しい。想ふにこの故郷は作者が厭はしく思つて住み捨てた處かも知れない。さのみ懐かしくもない故郷までが、この聲ゆゑに戀しく慕はしくなつた意と見たら適ふだらう。

○

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

釋 ○ながなく　汝(ナ)が鳴く。○なほ　やはりの意。○うとまれぬ　「ぬ」は現在完了の助動詞。○思ふものから　「ものから」はこゝでは物ながらの意。

大意 時鳥よ、お前が氣が多くて、鳴く里のあちこちに澤山あるので、お前を慕はしくは思ふものゝ、やはり疎疎しく思はれるわ。

評 單に表面から解釋して、時鳥ばかりの歌としては、立意が利己的で、甚だ面白くない。これは必ず眞意は外にあるので、比喩の歌と見るのが至當だらう。即ち旨い事ばかりいつて自分をあしらひながら、他にも言ひかはす女の澤山ある人を、時鳥に喩へての作に違ひない。伊勢物語には、これを賀陽親王(カヤノ)　桓武帝の皇子が異心(コトゴコロ)ある女に給うた歌としてあるのは、この間の消息を捉へ得たものである。「あまたあれば」と愍氣はしても、一面に思はずには居られない、いや思ふからこそ愍氣もする。この内面的葛藤に頗る面白い情緒が閃いてゐる。この集雜上に「月面白しとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる」と詞書ある貫之の歌に、

かつ見れど疎くもあるか月影のいたらぬ里もあらじとおもへば

は、その事情も構想も全く同一であるから、相通はせて見たら了解されよう。いづれも時鳥なり、月影なりを擬人して表面的叙述を完了して、寓意を隱然たらしめた手腕は巧妙である。

○

思ひいづるときはの山の時鳥からくれなゐのふり出てぞなく

釋 ○思ひいづるときはの山　思ひ出づる時に、常磐山をかけた。「思ひいづる」はわが戀人を思ひ出すのである。常磐山は山城國の名所といふ。○からくれなゐの　唐紅の如くの意。紅にからの美稱を添へて「唐紅」といふ。その紅色を染める時に、紅の染汁に布帛を入れては、度々振り動かして色濃く染め付けるので、「ふり出て」の序詞となつた。○ふり出て　振り立てといふに同じい。

大意 戀しい人を思ひ出す時に、常磐山の時鳥が、恰も自分とおなじやうに、聲を振り立てゝサ、あれ鳴くわ。

評 戀人を思ひ出す時は聲立てゝも泣かれる。この事相を基調として趣向を立てた。初句は結句に影響があるので、單なる序でもなく、時鳥を思ひ出すのでもない。また昔を思ひ出すのでもない。契沖が時鳥が自分の妻を思ひ出す時と解したのも牽強である。又「唐紅のふり出て」に拘はつて、血涙紅涙と解した說もあるがわるい。只「唐紅」は序であるとのみ覺えてよい。然し常磐山の綠色に唐紅の配合は自然の句となつて、一首の表を飾つてゐる。初句に「いづる」、結句に「出て」と、同意の語が重なつてゐるのは、不用意と見える。

○

こゑはして涙は見えぬほとゝぎすわが衣手のひづをからなむ

釋 ○ひづ　ひぢと同語。浸つて濡れたのをいふ名詞。

大意 鳴く聲はしても、その癖に涙は見えぬ時鳥よ、この自分の袖が物思の涙の爲に、びつしより濡れてあるのを、お前の涙に借りてもらひたいわ。

評 もとより物思ある人の作である。想ふにこの作者は時鳥とは反對に、涙は見えて聲はせぬ、卽ち忍び泣に泣いてゐる人だらう。「は」の辭をうち重ねて相對へたのも、さうした下意がありさうに思はれる。時鳥に借りてくれとまでいふので、その涙の多量なことが想像され、涙の多量なことで、物思の甚しい事が推定される。又涙の見ゆる見えぬといふのは、手近の梢を渡つて鳴く時鳥らしい。鳥の啼くにも涙をいふのは、春上に「鶯の氷れる涙云々」と詠んだ類の聯想である。

○

あしひきの山時鳥をりはへて誰れかまさるとねをのみぞ鳴く

釋 ○あしひきの　山の枕詞。○をりはへて　時延(ヲリハヘ)で、時長く續くをいふ。居り延へといふ說もある。○誰れかまさると「か」は疑辭。「と」はとての意。○ねを　「ね」は聲を立てるにいふ。

大意 時鳥が折も折とて、自分が物思をして泣いて居る處へ、引き切りなしにいつまでも鳴き競つて、誰れが勝つかといふやうに、聲を立てゝサ、ひたすら鳴くわ。

評 世に侘びしれて山里に籠つた人などの作だらう。打ち眺めた山の茂みに、絕間なく聞える時鳥の聲の、自分の泣くに競ひ顏なので、「誰れかまさる」とて時鳥が鳴くやうに、有心に取り成したのが一ふしである。景樹が「こゝらの時鳥の互に聲を競ふ事なり」といつたのは、結句の意を何と見たのか。すべて音を啼くは只泣くのをいふのではない。心を聲に交へて啼く意だから、時鳥のうへだけなら、只鳴くとあるのみでもよい筈だ。これは憂思ある人が、時鳥の鳴くをも同情に推想したもので、人の啼くと時鳥の鳴くとを撮合して、「誰れか」といつたのである事はいふまでもない。

この歌再び後撰和歌集に入つて、三句うちはへてとある。「をりはへて」はあまり耳遠いので、たまゝ異傳を得たので擧げたと見える。

○

今さらに山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりはわが宿になけ

釋 ○今さらに　今改めての意。○聲のかぎり　聲のありたけ。

大意　これ時鳥よ、お前も山から出て來て、折角里馴れた事だから、今改めて山へ歸るなよ、是非に聲のありたけは、此方の宿に居て鳴き盡しなさい。

評　五月も大分更けて、時鳥の鳴く音の間遠になつた頃の作である。時鳥の間遠になつたのを、古巣の山へ歸るものとして詠んだ。「今更に」の一語不盡の妙がある。折角今まで馴染んだものをと仰へて、「聲のかぎりは」との懇望、彼れ時鳥を熱愛する情緒が、深く強く表現されてゐる。

二句、六帖にみやまに歸るとある。

以上の詠人しらずの諸作、格調はあまり高古でない。延喜時代にさのみ遠からぬ頃の作らしい。

やよや待てやま時鳥ことづてむわれ世の中に住みわびぬとよ　　みくにのまち

釋 ○やよや待て　「やよや」は俗にやいのといふに似てゐる。對手を呼びかける語。「待て」は命令格。○ことづてむ　言傳(コトヅテ)をしよう。○住みわびぬとよ　住みあぐんだといふ事ぞよの意。

大意　山へ歸る時鳥よ、これよ一寸待つてくれ、山里人へ傳言を賴まうわ、その傳言は外でもない、自分はもうこの世の中に住みあぐんだといふことよ。

評　追つ付け貴方のお住みなされる山へ、私も隱れようと思ひますの餘意がある。この作者は仁明帝の更衣で、貞朝臣(サダノ)登の母君である。登朝臣は母の過失に依つて、僧となつて深寂と號したと、三代實錄に出てゐる。されば「言傳てむ」とある山里人は、或は山寺に籠つたわが子の深寂をば指されたのかも知れない。實に一旦の過失から世に捨てられて、物思の絕えぬあまり、いつそわが子深寂のゐる山にでも籠つてしまひたいと思ふ折しも、時鳥が鳴き渡つたのである。夏も大分深けた頃なので、それを山へ歸るものと聞き成して、さて一趣向を立てた。一首の語調の迫つて窘しけなのは、まさに作者の胸の切ない鼓動を聞くやうである。舊注、奥儀抄などの說に、時鳥は死出の山を通ふ鳥だから、人などに後れて世の中歎かしく思つた時よんだもので、

なき人の宿に通はゞほとゝぎすかけてねにのみ泣くと告げなむ　（集中、哀傷）

と同意だらうとあるが、どうも承け難い。

この三國の町の署名に一考を要する。母の罪が子にまで及んで、屬籍を削られた程だから、無論町は勅勘の人であるとすると、よみ人知らずと署すべきである。尤も承和の御時だから、永い間に何時か勅免を得たのかも知れない。

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた　　紀友則

さみだれに物おもひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ

釋 ○さみだれに　「さみだれ」は普通梅雨の名稱となつてゐるが、こゝは梅雨の降る季節を指していふ。○いづち　何方。

大意　梅雨の頃によろづ心細く、夜もくよくよと物思して居ると、時鳥はこの夜深に啼いて、どちらへ行くのであらうぞ。

評 あゝ心細い事よの餘意がある。實はこの餘意が一首に亘つた主觀で、梅雨の頃といひ、夜深けといひ、時鳥といひ、暗闇といひ、不分明なことといひ、どれも不安な悲しい感じを惹き起す媒である。これ巧まぬ巧で、一寸見にはさのみ手のないやうなのが、この風調の高尚な所以であらう。時鳥の歌では絶唱ともいはれる拾遺集の、

鳴きすてゝいづち行くらむ時鳥淀のわたりのまだ夜深きに

の藍本として、餘り遜色がない。

○

夜やくらき道や惑へるほとゝぎすわが宿をしも過ぎがてに鳴く

釋 ○夜やくらき　夜が暗いのか。○道や惑へる　道を間違へたのか。○わが宿をしも　「し」は強辭、「も」は歎辭。○過ぎがてに　通り過ぎる事の出來にくさうにの意。

大意 この頃の五月闇で夜が闇いので、どちらへもえ行かぬのか、それとも道に迷つてさまよつて居るのか、時鳥が所も多いに私の宿をサ、取り分けいかにも通り過ぎにくさうに、どちらへも行かずに鳴いて居るわ。

評 假令夜が暗くても時鳥が道を惑ふわけもあるまいが、人間の慣ひから推想したのである。もと〳〵數多の時鳥の鳴き過ぎたのを、一羽の時鳥のさまよつて鳴くと聞き成したのが、趣向である。更にそのさまよひ鳴くに就いて、「夜や闇き道やまどへる」と、その兩端を叩いて、時鳥の行動を不安らしく臆測し心配した處に、作者の親切らしい纒綿の情致がみえる。「しも」の用法に注意を要する。特に取り分ける意の辭なので、他に強くさし當てる餘意を生じて、譯すると、所も多いにわが宿をの意となる。

やどりせし花たちばなもかれなくになど時鳥こゑ絶えぬらむ　大江千里

釋 ○やどりせし　宿を取つた。○かれなくに　枯れぬのにの意。「なく」は否定のぬの延言。○など　口語のなぜに當る。

大意 時鳥の宿を取つて居た橘も、まだ枯れはせぬのに、なぜにまあ時鳥の聲が、一向こゝにはせぬやうになつた事だらう。

評 橘を時鳥の宿とする事は萬葉集にも再三見え、上にも「花橘に宿はからなむ」と詠んである。さて宿にした橘は依然としてこの軒端にあるのに、時鳥の來なくなつたのは不審といふ。この理窟らしい不理窟が、詩味を酵成する。橘の枯れぬ事と、時鳥の聲の枯れて絶えた事とを湊合して、上下の句に對へて闘はしめたのは、後にも、

月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

と詠んだのと同一の手法で、この作者の好んだ風體らしい。又「花橘も枯れなくに」は、廣蔭の說に、橘の花の散らぬのをいふのであらうと。これも一說で捨て難い。

結句、六帖にきなかざるらむとある。この意で初句を解すると、去年宿を取つた橘がいまだに枯れぬ趣になる。但こゝの排列の次第から見ると、きなかざるでは合はない。

夏の夜のふすかとすれば時鳥なくひとこゑに明くるしのゝめ　　二三四　きのつらゆき

釋 ○夏の夜の　「の」文字を「は」の意なり」と宣長、千秋等は解し、景樹は「いかにしてもこのまゝにては聞えず。顯本にはとあるぞ正しき」といひ、廣蔭は「結句の『しのゝめ』へかゝるのにて、體言を連續せしむる意の辭ならむ」といふ。これは夏の夜がと解して「明くる」に係けて見るが穩かである。○ふすかと　臥すかと。○しのゝめ　東雲なるかなの略。「しのゝめ」は、夜明方をさしていふ。字義は篠之芽で、その色に赤みがある故、あかる(明)の意に通はせて、明くといふ語の枕詞となり、それが一轉して、直に夜明方の名稱となつた。さゝがには蜘蛛の枕詞なのを、直に蜘蛛の事とする類である。一說にしぬのめは篠の群の義ともいふが、あかるの意に連絡がないので、意義が不完である。

大意 寐るかと思へば、時鳥の鳴くその一聲に、意外にはやもう、夏の夜の明ける東雲の空であることよ。

評 さて〳〵寐る間もない程に短いなの餘意がある。二句は寐るか寐ないかのうちになどいふ如く、碌に打ちも臥さぬさまで、これ秋の夜、冬の曉などの幾度寐覺めても猶明けやらぬのに對へた趣向である。夏の夜がいかに短いとて、時鳥の一聲のうちに明ける事はないが、短い印象を強める爲に誇張して表現した。これを一聲を待ち得た間に夜が明けるとも、一聲のみで二聲と鳴かぬうちに東雲となつたともいふ說は、理に泥んで興趣を忘れたもので、論ずるに足らぬ。下句頗る力强い叙法である。

暮るゝかと見ればあけぬる夏の夜をあかずとや鳴くやま時鳥　　みふのたゞみね

釋 ○あかずとや　飽かずといつてかの意。

大意 日が暮れるかと思へば、はやもう明けてしまふこの夏の夜を、あまり殘多く不滿に思つて鳴くのか、あの山時鳥は。

評 わが短夜を惜む心から、時鳥の鳴く意中をも同意に推想した。又「飽かず」を明かずとかけたと見られぬでもないが、さうとすると、明かず明けぬるの反對の懸合が、餘に露骨過ぎて、下手な狂歌に近い。故に飽かずを本義にのみ采るを穩かとする。

なつやまにこひしき人やいりにけむこゑふりたてゝなく時鳥　　紀秋岑

釋 ○なつやま　夏季の山。○こゑふりたてゝ　聲高く張り上げての意。

大意 この夏山に戀しい人が籠つてしまつたのであらうか、頻にこの節聲を張りあげて時鳥が鳴くわ。

評 戀に泣かれるのは人情の常なので、夏山になく時鳥を聞いても、その山中に彼れの戀しい人が籠つたらうと、その意中を推測した。山に入ることは、世に佗びて山に住居するのも、出家遁世して山寺に入るのも種々あつて、どれと定めた事はないが、殊にこの頃の世態では、世を厭つて出家して山籠りする、それが心深い仕業のやうに見られた。その實例としては多武峰少將が最も著名であらう。當人は覺悟の上の事だが、あとに殘された父母妻子は、泣いてもわめいても追つ付かない。乃ちこの趣を夏山の時鳥に撮合した。新撰萬葉集にこの歌

に合はせて、「一夏山中驚二耳根一、郭公高響入二禪門一」とあるも、この歌の意をよく辿つたものである。

題しらず

こぞの夏なきふるしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ　よみ人しらず

釋 ○なきふるしてし　澤山に鳴いて珍しけもなくしたのを「鳴きふるす」といふ。「てし」は現在完了の「て」の助動辭に、過去の助動辭の「し」の重なつたもの。○あらぬか　それにはあらぬかの意。

大意 去年の夏頻に鳴いて、古臭くしてしまつた時鳥の聲が又聞えるが、あれは去年の時鳥か、それとも別の時鳥か分らぬが、聲が第一去年のまゝ變らぬわ。

評 時鳥はどれも一樣の聲で、又年によつて聲に新古の別ある筈もない。それらの理趣を超越して、そこに想像を描いて、新古の別をおもひ、聲に差別をつけ、これはどうしても去年のであると斷言せぬばかりにいひ詰めた痴意が面白い。上にも「今も鳴かなむ去年のふる聲」と詠んだ類である。四句、何中何ありともいふべく、同じ語法を反復して切り調へたので、最も力强く聞える。それに應じて結句も旨くおき得てある。これをもし聲ぞ同じきなどいはうか、上來の語勢忽ち頓挫して、尾枯れとなつてしまふであらう。

時鳥の鳴くをきゝてよめる

さみだれの空もとゞろに時鳥なにを憂しとか夜たゞ鳴くらむ　つらゆき

釋 ○空もとゞろに　空もどんどと。「とゞろ」は響動するをいふ。動詞にはこれをとゞろくといふ。「も」はさへもの意。○夜たゞ　「たゞ」は直の義で、宵から曉まで直に引き續くを「夜たゞ」といふ。夜通しにおなじい。

大意 梅雨の空もとゞろと鳴り響くほどに、時鳥は何事を憂いと思つてか、あのやうに夜通し泣くのであらうぞ。

評 天地の寂寥を破つて、梅雨の闇の夜空を鳴きとよもす時鳥の悲愴な聲は、よもすがら獨起き居る愁人の斷腸に堪へぬ處、坐に同情を寄せて、どんな憂き事があつてか泣くと、不審も打つて見たくなるのである。時鳥の聲はさほどの大聲でもないのに、「空もとゞろに」はその鳴くことの盛んさを誇張したもので、三句以下の語を成す素地を作つてゐる。立意は何でもないが、この誇張とかの疑問と相俟つて、その應接の間に不言の妙味が生じてくる。

さぶらひにて、をのこどもの酒たうべけるに、召して「時鳥待つ歌よめ」とありければよめる　みつね

ほとゝぎす聲も聞えず山彦はほかに鳴く音をこたへやはせぬ

釋 ○さぶらひにて云々　「さぶらひ」は禁祕抄に「下侍三間、有二炭櫃一、四面敷二疊一、號二侍臣亂遊所一也、云々。酒宴等於二此所一行レ之」とある通り、禁中で五位六位の殿上人達の詰所を侍所とも、下侍ともいふ。「をのこ」は男子の義で、家隷をいふ。主上から藏人頭をはじめ五位六位の人々をさして宣ふ語であるが、この集は勅撰で御覽に供へるものだから、その語を以て書いた。「酒たうべ」の「たうべ」は口語の食べと同じい。さて詞書の意は殿上の侍所で、侍臣等が酒宴した時に、躬恒をその座に呼び出して時鳥を待つ歌を詠めと所望したので、躬恒が取りあへず詠んだといふ意。この「召して」を、主上の御前に召したやうに解いた諸註は誤である。召すは天子

に限らず、尊卑兩者の間には廣く用ひられる詞で、躬恒は當時甲斐少目といふ極めて淺い官位の者だから、殿上人の詰所である侍に呼んだのは、卽ち召すといつてよい。若し强ひて主上の召した事とすると、「歌詠めとありければ」とあるを、どう解釋するつもりか。餘に失禮の文體ではあるまいか。前後の例を推すに、主上の御詞には必ず仰せ云々とある。秋部上に「寬平の御時七日の夜、うへにさぶらふをのこども歌奉れと仰せられける時、人にかはりてよめる」とある詞書を見合はせて心得るがよい。○山彦　こだま。反響をいふ。山に靈があつて物の聲に應ふるやうなので、男神の美稱なる日子を添へて呼ぶ。或說に「ひこ」は響の急語で、萬葉集九に「足日木乃山響令動」とありといふ。しかし山響は義訓だと思ふ。○やはせぬ　春歌下「櫻花春くはゝれる云々」の條に旣出。

大意　待てども〳〵時鳥の聲がまあ聞えぬわ、なぜに山彦は、餘所で鳴く聲をなりとも應へて、此處へも響かさぬぞ、應へて響かせて聞かせさうなものだに。

評　獻酬數巡、夜も更け渡つた折柄、時鳥も啼き出しさうな五月の空のけはひなので、歌人躬恒をこの座に呼び出して、待つ歌詠ませて酒の肴としたのは、時に取つての殿上人等の風流であらう。この際皆樣の酒のお肴に、本物の時鳥はもとより、山彦だつてよその反響くらゐお聞かせしてもよかりさうなものを、どれも氣が利かないと申し上げた。時鳥の鳴かぬあまりに、應へぬ山彦を恨み咎めたのは、客を借りて主を形する筆法である。待つといふことを詞に顯さないで、その聲を待ち戀ふる意があり〳〵と見えるのは、流石に老手である。躬恒でなくて誰れに出來よう。當夜の入興はさもと思ひ遣られる。

三句、顯本にあま彦とあるは山彦に同じい。

山に時鳥の鳴けるをきゝてよめる　つらゆき

時鳥ひとまつ山になくなればわれうちつけに戀ひまさりけり

釋　○ひとまつ山　人を待つといふに、松山をかけた。松山は松の生えた山をいふ。名所ではない。○うちつけ　突然に、卒爾になどの意。

大意　時鳥が人を待つといふ名の松山に、あれあのやうに鳴くので、自分もふつと人を待つ心になつて、戀しく思ふ事が、これまでよりは增さつたわい。

評　これは當時の男女會合の習慣をまづ思はねば解るまい。夫妻にまれ、相思の間にまれ、男は女の家に夕暮毎に通つて往つたものである。今何の思念もなく山本を越えてゆくと、時鳥が山松の梢をかけて頻に鳴く。松に待つの響があるので、端なく自分の來るのを待ちつゝ、時鳥の如く泣いて居るかと、愛人の上に想到されたのである。こゝに至つて端的に居たゝまれぬ程人戀しくなつてくる。さもありさうな自然の聯想である。「人まつ山」は旣に春歌上の「白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」の條でいつた通り、この作者の慣用の語法である。大和物語にも「君まつ山の時鳥」といふ歌がある。恐らくはこれを點化したものだらう。

はやく住みける所にて、時鳥の鳴けるを聞きてよめる　たゞみね

むかしへや今も戀しきほとゝぎす故郷にしも鳴きて來つらむ

釋 ○はやく住みける所　以前住んだ所。卽ち故郷である。○むかしへ　昔方。「へ」は方の意。行方（ユクヘ）などのへと同じい。

大意 住み馴れた昔が、今でも戀しいのかしら、あの時鳥が所も多いに、自分が昔住居をした土地にサ、取り分け鳴いて來たのであらう。

評 わが昔戀しくて故郷を音づれたので、時鳥の來て鳴く意中をも、同意に推想したのは、作者の狡獪な處で、畢竟はわが意中を時鳥に託してうち出したのである。「しも」の餘意は前の「わが宿をしも過ぎがてに鳴く」の處でいつた通りである。處も多いに軒には忍草生ひ、垣には蔦かづらが這ひ纏つて、露けき野原と荒廢した故郷のあたりに、わざ〳〵鳴音を洩らしにくる時鳥は、けに這般の心ありけなものと見られる。詞のうへでは「昔」と「今」と鬪はせてある。

時鳥の鳴けるをきゝてよめる　　みつね

時鳥われとはなしに卯のはなのうき世の中になきわたるらむ

釋 ○われとはなしに　我れには非ざるにの意。「我れ」は作者自身をいふ。○卯のはなの　「うき」にかゝる序詞。○なきわたる　時鳥の上では、空を鳴いて渡ること。それを自身の泣いて年月を經る意にかけた。

大意 自分は世の中の憂さに堪へないで、泣きつゝ月日を亘るが、時鳥は自分と同じ身でもないのに、何で憂いこの世の中に啼き暮すのであらうぞ。

評 自身をこの上もない憂き身と定めて、時鳥の鳴き渡る所爲をいぶかしみ、彼れを主とし、おのれを客として相對比して、姿致を取つた。かうした厭世觀はこの時代一般に漲つてゐた事で、殊にこの作者にしば〳〵歌はれたが、後世に至ります〳〵甚しくなつて、遂には陳腐厭ふべきものとなつた。「卯の花の憂き世」と疊み重ねた叙法は、萬葉集卷十に、

うぐひすのかよふ垣根の卯の花のうき事あれや君が來まさぬ

とある三四の句を踏襲したのである。蓋し時節の景物を借りての序詞だから、詞づかひが細やかにうるはしく聞える。又何故にといふ語を句中に挿みて聞くのは、例のらむ留めの一格である。

はちすの露を見てよめる　　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

釋 ○はちす葉　蓮の葉。○しまぬ　染まぬの意。○なにかは　「か」は疑辭。「は」は調を強める爲に添へた辭。反辭ではない。

大意 蓮は泥中に生ひたちながら、その泥水の濁にも染まぬほどの潔白な心を以て、何であのやうに、葉の上の露を玉として見せて、人をば欺くことか。

評 法華經の湧出品に「不レ染二世間法一如二蓮花在レ水」とあるを取り合はせて、初二句は詠んだものか。桑門の作者おのづからさうした準據があらうと思はれる。又「濁にしまぬ心」は蓮の心だから、初句は蓮のと云ふだけで十分なのを、露の置くに取緣もあるので、熟語として「蓮葉の」と連ねたのである。尙このこと委しくは、春歌上、

宿近く梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

とある歌の處で、いつたのを見合はせるとよい。萬葉に「蓮葉にたまれる水の玉に似たる見む」と歌つたやうに、覆盆の如き立葉のうへに溜つた露の、宛轉として皎潔なのを見た時、怪しく白玉かと思ひ惑ふを、却つて蓮が心あつて露を玉と欺くやうに取り成して詰問したのは、頗る奇巧を弄した處で、落想人の意表に出てゐる。この種の想は眞摯の情にこそ乏しいが、氣韻こそ高くないが、また一種の感興があつて面白いと思ふ。蓋しこの僧正の獨壇である。

因にいふ、こゝに不思議なのは佛像の蓮花座蓮臺は繪畫彫刻に盛んに現れ、蓮の散華は法會にも經卷にも見えるが、萬葉集でもこの集でも、蓮の花を詠んだのは絶對にない。

月のおもしろかりける夜、曉方によめる　ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

釋 ○まだ　こゝは口語の意と同じい。正意ではなほの意であるが。○宵ながら　「宵」は夜と同意。又初夜の意にも用ゐる。こゝも初夜である。「ながら」はこゝではまゝにといふに似た接尾語。

大意 夏の夜は短いもので、まだ更けもせぬ宵の間に、はや明けてゆくのを、これではあの月は、とても西山まで行き渡る間もあるまい、すると空の何處に宿を取つて隱れる事であらうぞ。

評 端居しつゝ涼夜の月を見耽つてゐるうちに、早くも明方になつた一時の驚きに、道理を滅却して、深夜なしに宵のまゝに明けたと速斷した痴意稚氣は、やがて夏の夜の短い事を表現する誇張の言語となつた。又曉方の月は大抵山の端に見馴れた心から、今見明した中空の月に對つて、かく突然と間もなく明けては、月は空の何處に宿るだらうかと心配した。これらの痴愚の想は、卽ち詩趣の要素を成すものである。空のいづこといふべきを「雲のいづこ」と轉義したことも、自然の景象が匂になつて面白い。立意は新奇だが尖巧に傷らず、姿も清く長けも高く、語調また流滑である。流石に元輔が祖、清女が曾祖たるに愧ぢない伎倆。

隣より常夏の花を乞ひにおこせたりければ、をしみて、この歌をよみてつかはしける　みつね

塵をだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこ夏の花

釋 ○隣より云々　「常夏」は撫子の一名である。夏から秋の末までも咲く花なので、夏を常しなへにする意で常夏といふ。この集以後の詞である。「乞ひにおこせたりければ」は貰ひに使をよこしたからの意。○すゑじ置くまい。○妹とわがぬるとこ夏　妹と我が共寢をする床といふに、常夏をかけた。妹は妻をも愛人をもさしていふ。

大意 手前の常夏は花が咲いてからこの方は、塵をさへ置かせまいとサ思ひますわ、その理由は妻と手前が中よく寢る床といふ其のとこ夏の花だから、大事に存じまして。

評 これ程大事なものなので、折角の御所望ではありますが、折つてさし上げる事は、とても出來ませんの餘意がある。他より物を請求所望された場合に、極めてその物の貴重ないはれ因緣を絮說することは、卽ち間接に謝絶の意味を表するもので、この手段は吾人が日常の交際上によく利用されてゐる。かう直接を避けて間接に、

露骨を厭つて婉曲に就く理由は、これに依つて他の感情を害しないようにと、力めて其の辭令を巧んだのである。又夫婦間の疎隔して相住せぬ時は、その床も枕も使はぬから、おのづから塵が置くので、古へから床や枕やに塵を詠み合はせて、夫婦間の愛情を歌つたのが多い。こゝもその意で、他に斷りやうもあらうに夫婦愛を宣言しての謝絶は、一寸手きびしいが、これ位また有力な立派な理由は又とあるまい。いかに何としても夫婦中に水はさせない。まあこんな事をいつたりやつたりするので、以てその隣人は極めて隔のない懇親の間柄であることが想はれる。又詞書に「をしみて云々」とあつて、其の花を遣つたとはないが、「惜みながら戯れにこの歌を詠み添へて遣はしゝならむ」といふ上田秋成等の說は、事情を揣摩し得たものと思ふ。「常夏」のとこの一語を主眼として、それを夫婦の床に准へて花のなつかしい趣を見せ、さて床の縁によつて、「塵をだに据ゑじ」と極めて大事な所以を述べ、まして折つて上げる事はなり難いとの餘意を含めたのは、恰も一挺の梭から千尋の繭絲を抽き出して組織した匹練のやうで、しかも絶えて補綴の痕がないのは老手である。三句は初句の上にまはして聞くべきである。又四句から五句へのいひかけは、わるくすると卑しげに聞えるが、これは自然で節立たないから、却つて簡淨で嬉しい。六帖に同人の歌、

妹とわがぬる床夏の花なればなべて人には見せむものかは

とあるはこの前身か。姿碎け、修辭も粗笨で、「塵をだに」と打ち出した妍麗艶冶な姿に遠く及ばない。それを景樹は「其の塵をいはむとする方に引かれて、なべての人に見せじといふ初の主意は傍になりて、よくせずは然は聞取り難きまでなり」と難じて、六帖のをかしと定めたのはあらい。この兩首は全然同一のものでない。六帖のはなべての人には見せじと、露骨に出たもの、この集のは塵をだにするぬ大事の物ぞといつて、言外の餘意を以て謝絶したので、とても同一の論になる作ではない。

三句、六帖に植ゑしよりとある。

夏と秋とゆきかふ空のかよひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ　みな月のつごもりの日よめる

釋 ○みな月　陰暦六月の異名。水無月（みなナシ）、また水之月（みなノ）の轉語ともいふ。○ゆきかふ　往き交ふで、行きちがふ態。○かよひ路　通路。○かたへ　片方。中古文には、多く半分の意に使用してゐる。こゝもさう解してもよいが假に直譯にしておく。

大意 今暮れて行く夏と、引き換へに來る秋とが往きかひする空の通路は、その秋の通つて來る片一方は、定めて涼しい風が吹くであらうか。

評 夏の果てゝ秋になるを「往きかふ」と擬人し、その縁で「かよひ路」といつた。もとより形もない攫まへ處のないものだから、空中にかよひ路を求めたのは適當の想像で、下句の爲に好都合な素地を作つてゐる。「片へ涼しき」はきはどい處に着眼したもので、炎夏涼秋の境目に立つ六月三十日としては、ほんに動かぬ妙趣向である。そして、秋のくる一面の涼風を想像したことは、早く此處にもその風の吹けばよいと待ち望む心持が、言外にほのめいてゐる。

三句、六帖に通ひ路にとあるは調がつまり、意も味ひも劣つて聞える。

古今和歌集卷第四

秋歌上

秋たつ日よめる　　藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚かれぬる

釋 ○秋たつ日　立秋の日をいふ。○きぬと　來たと。○さやかに　あざやかにと同じい。

大意 秋といふ者が來たと、目にははつきりと見えないけれども、昨日に變つてあざやかな風の音にサ、さては秋が來たぞと思ひ知られたわ。

評 あながちに秋にのみ風の吹き立つものでもないが、立秋の日しも恰も風の吹き立つたのを見て、これを秋の證左としたのが、詩人の興趣である。「さやかに」の語下句に響いて、風の音の耳にさやかなことも聯想される。又四句の下に秋きぬとあるべきを、初句に讓つて略いた。かう視覺と聽覺とから來た感じを、上下の句に按排して反映させたのは一趣向であるが、「目にはさやかに見えねども」は説明に過ぎて、餘情に乏しい。昔は人の許を訪ふに、その家の格子をほと〳〵と叩き、或は扇を鳴らして我が來たことを知らせる習慣であつたから、秋を擬人して、あの風の音に依つてその來たことが知られたといふ構想は、當時に於いては甚だ面白く感ぜら

れたものだらう。故に「驚かれ」も驚愕の意ではなく、人の許を訪ふことを驚し聞ゆると物語などに書いたのと同一の用法で、思ひ知つた、わかつたといふやうな意味であらう。

結句、新撰萬葉に驚かれけるとある。

秋たつ日、うへのをのこども、かもの川原に川せうえうしける、ともにまかりてよめる　つらゆき

河風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

釋 ○秋たつ日云々　「うへのをのこ」は上の男の義で、いはゆる殿上人である。「うへ」とは清涼殿の殿上の間をいふ。其處に伺候する四五位の侍臣達の事である。夏部の躬恒の歌の詞書の解參看。「かもの川原」は京都の鴨川原。「川せうえう」は川遊び。「せうえう」は逍遙の字音で、遊ぶと訓む。莊子の逍遙游の語に本づく。「ともに」は諸共にの意。隨伴の意ではない。然し當時貫之は殿上人ではなかつた。「まかりて」は本は退くの意なのを、行くと同意に、この頃から使つてゐた。○涼しくもあるか　「も」は歎辭。「か」はかなと同意の歎辞。

大意　川風が大層涼しい事よ。思ふにこれは、この岸に打ち寄せては波が立つが、その波と一所にサ、秋は立つのであらうか。

評 この秋は冷やかな川波と共に立つて來るのかしらと、その川風の餘に涼しい所以を想像した。故に「共に」の語が主眼である。輕々に看過してはならない。さて波の立つは涼しきまで吹く風のしわざで、卽ち秋のしるしなのを、「たつ」の縁語によつて、波と秋とを連絡して文なした細やかさは、この頃の風體で、殊にこの作者の長所である。

題しらず

わがせ子がころもの裾をふき返しうらめづらしき秋のはつ風　よみ人しらず

釋 ○わがせ子　春歌上「わがせこが衣はる雨云々」の條に既出。○うらめづらしき　「うら」は心のこと。衣の裏を寄せてある。○秋のはつ風　秋になつて始めての風。

大意　夏とは違つて、わが夫の君の着物の裾を、裏の見えるほどに吹き返して、それは〳〵心珍しい秋のはつ風である事よ。

評 秋立つ頃のきぬ〴〵の朝など、別れにくさうに庭に下りたちながら、前栽のあたりを立ちさまよへる男の後影を、床しく懐かしけに見送つてゐると、その衣の裾を吹き返して、秋風の吹き渡るのが、夏になかつたことなので、珍しさに女の詠んだのである。されば上句を「うら」といひ出す序とばかり解くのは穩かでない。大やう平安朝初頭の作らしい。體格雄渾で氣味清新である。只一寸傾かれるのは、「裾」の一語である。男は大抵の場合袴をはいてゐるから、風が來ても吹き返せない。新撰萬葉、歌林良材に、初句をわぎも子がとあるはその故であらう。着流しでまだ外に出ない間の事としては、風の吹き返すまでの事はあるまい。或は「裾」は袖の誤寫か。六帖には、作者を躬恒とあるが、更にかの風體でない。又家持集にあるのは、杜撰である。

きのふこそさ苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風のふく

釋 ○さ苗　稲の苗をいふ。「さ」は早の字を當てゝ書くが義は異なつて、さ月、さ處女などのさと同じ美稱である。○さ苗とる　苗を苗代田から採つて水田に植付するまでの所作をいふ。「とる」は執るの義で、その事をなすをいふ。○しか　過去の助動詞のきの變化。

大意　つい昨日あたり苗の植付をしたと思ふを、何時の間に稲の葉が延びて、それがそよ〳〵と動いて、このやうに涼しくも秋の風が吹く事であらうぞ。

評　光陰の經つはさて〳〵早いものよの餘意がある。この餘意を引き立てゝ、强く聞かせる手段として、早苗採と稲葉の秋風とを對揚して、その間に介在する幾ばくの月日の有無に着する分別を放下して、早苗とりしは昨日のことゝいつた誇張、例の事ながら面白い。尤もこれは漢詩にもよくある例で、過去を近くいひなす筆法である。かうして「何時の間に」を呼び出す伏線を作つてゐる。歌柄たけ高く、詞遣ひさら〳〵として、一點の塵垢もとめない。要するに神韻を以て優つてゐる。公任卿の和歌九品にこれを下品に序でて、「すこし思ひたる處あるなり」と評したのは、充分にこの眞價を了解されなかつた故と思ふ。新撰萬葉に、

いつの間に秋穂たるらむ草と見し程いくばくもいまだ經なくに

又貫之集に、

植ゑし袖いまだひなくに秋の田をかりがねさへぞ鳴き渡るなる

など、構想は同じながら、いづれも露骨で疎笨で、風格が甚しく下る。

下句、六帖に稲葉もそよと秋風ぞふくとあるは不調である。

○

秋風のふきにし日よりひさかたの天の川原にたゝぬ日はなし

釋 ○ひさかたの　天の枕詞。春下に既出。○天の川原　天の川の磧。銀河の事を天河、天漢といふ。直譯してあまのがはと訓む。川原は河畔の平地をいふ。この歌より以下は棚機の事を詠んだものだから、こゝにその概略を述べよう。初秋の頃に牽牛、織女の二星が、銀河の邊に現れる。支那の傳說に、毎年の七月七日の夜を期として、烏鵲が翼を延べて天の川に橋とし、織女がこれを渡つて牽牛と交會するといふことが、續齊諧記、博物志、淮南子等に出てゐる。素よりしどけない傳說の事であるから、牽牛の方から行くやうにも、又舟で渡り或は徒渡するやうにも、さま〳〵にいひなすのである。七月七日の夕卽ち七夕に二星を祭る事は、兒女の業となり、乞巧奠（キコウデン）とて針線を供しなどする風習、奈良朝時代に我が國にも傳來して、孝謙帝の代に、禁中に乞巧奠を行はれた事が、國史に出てゐる。又高天の原にある天の安河原を天の川原ともいふので、織女星を神代の天の棚機姫の神に附會してたなばたつめと訓み、牽牛は男なので、彦星と稱した。

大意　妾は秋風のこの間吹き初めた日からこの方、今日はお出になるか〳〵と、毎日この天の川の畔に出て佇立んで、君を待たぬ日とては一日もないわ。

評　或は牽牛になり、或は織女になつて、渠等が意中の祕密を洩し、情事の消息を通ずるは、萬葉集以來歌人の常手段である。これも織女の身になつて詠んだ。待つといふ意を囘護して道破しないのは、婉曲の味ひのある所以であらう。素より牽牛に逢ふ日は七夕と定まつてゐるのを、七月朔日の立秋の日から、夙く川原に立ち待

つに、その繊情の切なさが表現されてゐる。卽ち情熱の前には理窟も何も無い譯である。「日」といふ語の重複したのは、恐らくは不用意ではあるまい。知りつゝも憚らなかつたのだと思ふ。その理由は、夏部の「五月まつ花橘の香をかげば」の條で說明しておいた。萬葉集卷十に、

秋風の吹きにし日より天の川河瀨に出立ち待つとつげこそ

に似てゐる。この題の歌は、萬葉集中旣に雷同の趣が甚だ多い。これもその儔で、かの集の遺珠であるかも測られない。あながちに彼れを引き直したものとも定め難い。格調は太だ蒼古である。

○

ひさ方のあまの川原のわたしもり君わたりなばかぢ隱してよ

釋 ○かぢ　楫の事にのみいふは後世の意で、古くは舟を遣る具は、櫓をも棹をも廣くさしていつた。○隱してよ　隱してあれよの意。「よ」は命令辭。

大意 これよ天の川の渡守よ、彥星樣がこちらへお渡りなされたなら、すぐに舟の楫を、そつと隱してお呉れよ。

評 すれば川を渡つてお歸りなさる事が出來まいから、何時までも御逗留なされるだらうの餘意がある。かの陳遵が車轄を井中に投じて賓客を留めた故智を襲はうといふ譯でもあるまいが、情人の別を一途に惜む心から、「楫を取り隱してよ」とは、宛たる巾幗の口吻で、織女星、否寧ろこの歌の作者その人を見るやうである。構想痴にして妙。天の川を舟渡しとして渡守をおいたのは、萬葉集卷十なる、

わが隱せる楫棹なくて渡り守舟貸さめやもしましはありまで

に似て、構想は更にこまやかに、語々一層の洗鍊を經てゐる。

○

あまの川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ

釋 ○橋に　橋にしての意。○わたせばや　渡すせるかしての意。○たなばたつめ　「たなばた」は棚機である。機を織るには棚を構へるのでいふ。「つ」は連辭ののと同じい。「め」は女の意。合はせて機織女の義であるが、專ら神代の天棚機姫神をさしていふ。又棚機とばかり略してもいふ。これを織女星に附會した事は、上に說明しておいた。○しも　殊に取り出でていふ意の助辭。

大意 彥星樣のお渡りになる天の川には、紅葉を橋にかけるせるかして、時節も多いに棚機樣が、紅葉の時節の秋をサお待ちなさるわ。

評 晩秋紅葉の節は、無論二星相逢ふといふ初秋七夕の候には後れてゐるが、大まかに紅葉を秋のものとして、趣向を立てた。又「紅葉を橋に渡す」は織女が秋を待つ理由を、作者の詩的想像に任せて假設したまでだから、更に天の川の大小廣狹には關はらぬのを、景樹は「紅葉の枝ながら打渡す狹き流なり」といつたが、さほどの細流なら、今更紅葉の橋の必要もない。さつさと徒涉してもいゝ筈である。又、顯本に、二句紅葉を舟にとあるによつて、「大川のさまに聞えて安らかならむ」とある舊說も泥んでゐる。これらの分別を脫却して見ると、「紅葉の橋」大どれて幼けで、却つて面白くも見えよう。

更に思ふ。「紅葉をはしに」の紅葉を紅葉の枝とするのは、意で迎へて解いたもので、實は不當のやうである。

恐らく「はし」は石橋（イハハシ）の類をいふので、梁の字が當るらしい。紅葉を梁（ハシ）にとは、瀨々に散り溜つた紅葉を、川瀨にしおいた石橋と見立てたのだらう。

○

こひ〳〵て逢ふ夜はこよひ天の川霧たち渡り明けずもあらなむ

釋 ○こひ〳〵て　「戀ひ」を打ち重ねたので、事を深く強くいふ語法。○こよひ　今宵。この語の下なるぞを略いてある。○なむ　希望の助辭。

大意 去年の秋より、長の月日を戀ひ焦れ〳〵して、わづか一度、彦星樣と逢ふ夜はこの今夜よ、それ故に例ならぬ事ながら、何卒天の川に霧が一面に立つて闇くして、いつまでも夜が明けずにあつて貰ひたい。

評 これも織女になつて、その意中を詠んだ。「逢ふ夜はこよひ」のいひさし、語調はげしく促つて、おのづから長日月を待ち焦れた情の激越した趣が見える。これが無理な願も思ひ立つ所以である。わづか七夕の一夜を千夜とちぎる。ほんに霧でも立ち渡らないと、いとゞ短く明けてしまふ心地がするだらうと哀れである。集中戀部三に、

こひ〳〵て稀にこよひぞあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

とあると同一の意想で、珍しくはないが、續け柄はをかしい。

寛平の御時、なぬかの夜「うへにさぶらふをのこども歌奉れ」と仰せられける時、人にかはりてよめる　友則

天の川淺瀨しらなみたどりつゝ渡りはてねば明けぞしにける

釋 ○寛平の御時云々　「なぬかの夜」は七月七日の夜のこと。眞淵がこのかを一つ二つのつと同じ數へ詞として、「なぬかの日の夜」とあるがよいと論じたが採らない。「うへにさぶらふをのこども」は上に既出。「人にかはりて」は歌を召された或殿上人に代つての意。詞書の意は宇多天皇の御代、七夕の夜、主上が殿上人等に歌よみて奉れと仰しやられた時、或殿上人に代つて友則が詠んだ歌との意。○しらなみ　知らなくての意に、白波をかけた。「み」は接尾の辭。○たどり　覺束なく踏み迷ふをいふ。○渡りはてねば　この「ねば」を心得かねて、舊くねゞど又はぬゝにと說いたのははやい。これは四五句の間に詞を補つて聞く格である。卽ち「渡りはてねば夜の明けむとも思はぬに明けぞしにける」と續けて見るがよい。萬葉集卷八に「狹立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝明の風は決寒しも」とあるも同格である。

大意 久し振で渡る、この天の川の水の淺瀨がわからぬので、白波の立つ處を尋ねさまよひ〳〵して、際取つたのかしら、まだ明けようとも思はぬに、夜が意外に明けてしまつたわい。

評 これは牽牛（ヒコ）星になつて詠んである。舟筏をまだるしとして、直に川中におり浸つて只渡りに渡らうとするは、卽ち丈夫の所作で、いかに戀心にはやつてゐるかゞ見える。川の徒涉は今日では頗る突飛らしく思はれるが、交通不便な昔の時代では珍しくはない。隨分都内の川でも徒涉したものだ。けれど急がばまはれ瀨田の長橋で却つてそれが爲に手間取つて、大事な一夜を無益に明かして、織女に逢ひ損つた失望落膽、その憾は天の川の水と共に竭きなからう。滑稽な悲哀をねらつたその落想の新奇さ、殆ど天外から來たやうだが、實は萬葉に淵

源してゐる。同集卷十に、

天のがはこぞの渡代(ワタリヂ)うつろへば河瀨をふむに夜ぞふけにける

とあるを、一層誇張したのである。けれど用語が洗鍊を經て、その巧妙さは遙に原作に勝つてゐる。既に昨日の淵は今日の瀨と變る飛鳥川の例もあるやうに、去年渡つた天の川ながら、更に淺瀨の辿り難い趣で、「しらなみ」の一語が殊に活いてゐる。秀句は動もすれば皐しけに聞えるが、これはその弊がないばかりか、淺瀨を踏みたどる渠れが毛脛に向股に、激しくいざよふ水のけしきの見るやうなのは、全くこの一語の點綴されたによる。宇多帝の七夕の歌召されたのは、長恨歌の御繪に對して、伊勢貫之等の歌を召されたのと、何等かの關係があるやうな氣がする。長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、云々」とあるからである。多分后妃を襲はれた折柄の御事であらう。

四句、家集に渡りはてぬにとある。

同じ御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

釋 契り　約束するをいふ。○つらき　こゝでは口語の氣強いといふ意に近い。○たなばた　棚機津女(タナバタツメ)の略。○年に　一年にの意。○逢ふかは　逢ふといふものかいの意。「かは」は反動辭。

大意 そも〳〵のはじめ、一年に一度と約束されたであらう棚機樣の心が廿氣強いわ、なぜといふに、一年に只の一度位逢ふのが逢ふのかい、それは逢ふといふものではないわ。

評 七夕の會合を、二星の心からさう約束したものと見て、二星がその稀の逢ふ夜に滿足したのをもどかしがり、そんなのは逢ふといふものではないと憤慨した、この作者の態度が面白い。作者は恐らく一日逢はねば千秋と待ち焦れる人であらう。「棚機の」とはあるが、こゝは彦星をも攝してゐる。結句同語を反復した反語、頗る力強い表現である。三句は初句の上にまはして解するがよい。

七日の夜よめる　凡河内躬恒

年ごとにあふとはすれど棚機のぬる夜の數ぞすくなかりける

釋 ○ぬる　寐る。

大意 棚機は毎年缺かさず今夜逢ひはするが、よく〳〵思へば、一年にわづか一度宛だから、年こそ多けれ、まことに逢つて寐る夜の數はサ、少ないことだつたわい。

評 「年毎に逢ふ」といふに多い趣をもたせて、上下の句に多いと少ないとを對照させた算數的の手段は、なほ平凡ながら、一度は二星の昔から年久しく變らぬ契を羨ましく思つたが、飜つて逢ふ夜の數を思へば、極めてわづかで氣の毒の至りと、彼が爲に弔意を述べた一揚一抑の筆法は奇警である。萬葉集卷十に、

玉かつら絶えぬものからさぬらくは年のわたりに只一夜のみ

とあるに胚胎して、一層明快であるだけ、缺點としては含蓄味が乏しくなつてゐる。「あふ」と「ぬる」とは詞を易へたまでゝ、畢竟同意である。

この歌寛平の后宮の歌合に出て、前の興風のと左右に番へてある。然るにこの集では詞書が違つてゐるのはい

ぶかしい。この集に收める時、わざと適切な詞書を作つたものか。

結句、六帖の一本に數は少なかりけりとある。

○

たなばたにかしつる絲のうちはへて年の緒長くこひや渡らむ

釋 ○たなばたにかしつる絲の　棚機に貸した絲の如くの意で、手向けることを貸すといつた。抑も織女祭の事は、荆楚歳時記に「七夕婦人結二彩縷一穿二七孔針一或以二金銀瑜石一爲レ針、陳二瓜菓於庭中一以乞レ巧、有二嬉子一網二于瓜上一則爲レ得レ巧」とあつて、竹竿を渡して絲を繰り懸けて、願ひ事をいひあげる、これを願の絲といふ。景樹の考に「手向くる事を貸すといへるは、凡神佛には手馴し穢したる物を捧ぐる事なし。七夕のみはありふれたる衣類調度などをも暫く手向くれば、貸すとはいふめり。もと根無し事の戯れ業なればなり」とある。さもある事と思はれる。○うちはへて　「うち」は接頭語、「はへ」は延へで、引き延べる意。○年の緒　息の緒などいふと同じく、年は長く續くものなので、緒に喩へたのである。

大意 棚機様に供へてお貸し申した絲のやうに、長く延び〴〵に、この先も年久しく人に戀ひ焦れて、月日を過すであらうか。

評 思ふ人に逢ひ難いので歎く折柄の七夕祭に、手向けた願の絲を引き出した譬喩歌である。普通の序歌とは少し違ふ。年久しくといふべきを、「年の緒長く」と轉義したのは、絲の緣をも兼ねたのである。かやうの修辭は巧ではあるが、歌柄がしみたれてくる。さてこの歌織女の戀を詠んだやうに解釋した說もあるが、それは初句の「棚機に」の「に」文字のたじろく事を心付かぬものである。又結句の「こひ」を乞ひと釋して、わが手業の巧を願ふ意に解いた說もあるが附會である。是等は四季の部には、戀歌はないと推定しての說と思はれる。けれど四季の部中に戀歌はいくらもある。次の素性の歌も亦この儔で、いづれも寄二七夕一戀の歌である。あへて拘はるに及ばない。

題しらず

そせい

こよひこむ人にはあはじ棚機の久しきほどに待ちもこそすれ

釋 ○もこそ　萬一をいふ意の辭。

大意 今夜來る人には逢ふまいと思ふ、なぜといふに今夜は七夕だから、萬が一にも棚機の一年に一度逢ふ待ち遠さに肖かつて、自分も久しく待つことになるかも知れぬによつてサ。

評 「來む人には逢はじ」といふ前提に、まづ人を驚かしておいて、實はわれ等が交情の棚機に肖かつては大變と、はかない事にも緣喜を擔ぐに、その人を思ひ捨てがたくする愛情の篤さを認める。更にいふ、このあやかるといふことが、抑も七夕祭卽ち乞巧奠の大目的である以上は、間違つて詰らぬことに肖かるまいものでもない。無意味の苦勞性でない事がこれで今解されよう。ところでこの歌は、題詠ならば寄七夕戀の歌で、婦人の立場になつて詠んだものである。當時の慣習では、通例男が婦人の許に通ふので、婦人の方から男の許にくるのは異例であるから、もし實詠とすると、作者素性は坊さんだから、內情はとにかく、これは婦人關係の事ではなく、今宵來む人を友人と見てよからう。

結句、新撰和歌、六帖、家集等にあえもこそすれとある、この方が解りが早い。

なぬかのよの曉によめる　むねゆきの朝臣

今はとて別るゝ時はあまの川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

釋 ○今はとて　今は歸る時刻なりといひての意だが、意釋のやうに詞短に早く經する方が、語勢を失はないでよい。

大意 夜も明方になつたによつて、もう今日はといつて別れる時は、歸途の天の川をまだ渡りもせぬ前にはや、川水に浸りもしたやうに、かう袖サが意外にひた〳〵と濡れるわ。

評 これも彦星の身になつて詠んだ。涙を道破しないのを妙とする。袖の濡れるのは涙故などいふ理窟はさしおいて、渡らぬ袖の濡れたのを思ひ掛けないやうにいひ成したのが、作者の手段である。畢竟濡れるといふ聯想で、別れの袖と天の川を渡る袖とを湊合させた巧に過ぎない。別れかねて猶豫した情趣は、一首のうへに行きめぐつてゐる。さて宵に逢つて曉に歸るは、この時代に於ける夫婦間の常習であつた事を記憶されたい。

やうかの日よめる　みふのたゞみね

けふよりは今來む年の昨日をぞいつしかとのみまち渡るべき

釋 ○今　口語の追つ付けといふに當る。○いつしかと　何時かと。「し」は强辭。

大意 今日は七月八日であるが、さて今日からは、追つ付け又來む年の七月七日の昨日をサ、何時か〳〵とばかり待ちあぐんで、月日を過す筈だ、さて〳〵つらい事よ。

評 古來織女の意中を此方より推察した作のやうに解釋してあるが、當らない。前の歌どもを見るがよい。さうした趣のは、皆歌に「棚機の」とことわつてあるではないか。そのことわりのないのは、皆牽牛又は織女の身になつて詠んだものである。こゝも後の方の意である。「けふ」にかけ合はせて、「來む年の昨日」と文なしたのは自在の措辭で、又時間を溯つて逆寫した點は一寸新手であるが、餘りわざとらしくて、纖弱で、體格輕浮に傷く。蓋し忠岑の歌の弊はとかく巧に失するにある。六帖にこれを躬恒の歌としたが、どうも彼れの風體ではないらしい。

以上七夕を詠んだ歌十一首、概ね凡作で見るに足らない。その中「秋風の吹きにし日より」、「久方の天の川原の渡守」、「天の川淺瀨しらなみたどりつゝ」の三首を白眉とする。蓋し七夕の乞巧奠は上代盛んに漢土と交通してから、その文化に隨從して輸入され、奈良時代の歌人等に、新奇の好題目として諷詠された。けれども元來無稽の臆說なので、詠む人も聞く人も、單なる好奇心と遊戯心とを滿足させるだけで、實感を動かすまでには至らない。その名歌のないのは偶然でない。降つて平安朝卽ちこの集の頃に至つては、徒に奈良朝歌人の糟粕を舐るに過ぎない。

題しらず　よみ人しらず

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり

釋 ○心づくし　心の限りを使用する意から出て、心配する事をいふ。

大意　先頃とは樣子が違つて、葉のまばらに透いた木の間から、洩れてさして來る月の光の、さやかに物哀れなのを見ると、さて〳〵物事辛氣な秋は、意外に早くも來たわい。

評　夏木立の茂りも、さすがに秋が來たしるしには、一葉二葉と透いて、もりくる月の光は物寂しいので、秋思の催すに耐へぬあまりの感懷であらう。なほ思ふに、もとから憂思ある人の作であらう。うき秋の取越苦勞に、木間もる三日月につく〴〵と詠め入つて、「心づくしの」と打ち出したその辭旨、頗る凄婉である。これを初句の「木の間」とあるに重きを置いて、「木の間洩る月なれば、障り多くて明かにも見えぬが、心づくしの種なるなり」とある舊說は、字句の末に拘泥して、大體の興趣を忘れたものである。萬葉集卷十一に、

　木の間よりうつらふ月の影をしみたちやすらふに小夜更けにけり

とあるをも思ひ合はせるがよい。上に「もりくる」といひ、下に「來にけり」とある同語のさし合ひ、古歌には多い例だが、この歌ではいさゝか穩かでない。

「心づくしの秋」秋を物思の時悲しい時と觀ずるのは、漢土の詩人の常套語であつた。既に悲秋といふ熟語があり「欲レ不レ悲レ秋不二自由一」（白樂天）とも提唱して居る。この想は支那文學の將來に依つて、殊に文筆者の間に宣傳され、遂に深く國民思想に食ひ入つてしまつた。

二句、新撰和歌にはおちくるとある。これは新古今集冬部に藤原清輔が、

　冬がれの森の朽葉の霜のうへにおちたる月の影のさやけさ

とも詠んでゐるから、入方の月でなくともいふ詞だが、この歌では「もりくる」の方が、遙に妥當である。

○

大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

釋　○大かた　廣く總體をさしいふ詞。○からに　よつての意。

大意　世間一統の秋が來るにつけて、自分は悲しく感ずるのに、他人はさほどにも思はぬのを見ると、秋の爲悲しいのではなく、素からの自分の身がサ、悲しいものぞと思ひ知つたわ。

評　契沖以後の諸家等、わが身こそ秋を悲しきものと思ひ知るの意として、下の大江千里の歌、

　月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

と相表裏したものゝやうに解いてゐるのは、粗妄である。句題和歌といふものを檢すると、「秋來只識二此身哀一」の詩句を題として、この歌が擧げてあるのでもわかるではないか。句題和歌は、千里が勅に依つて、古句を題として新歌を獻つたものなのだから、この歌の作者は千里でなければならぬのを、こゝの「讀人しらず」のうちにはひつてゐるのは、蓋し傳寫の際、署名の脫落したものではあるまいか。殊に風體といひ修辭といひ、意想まで、大いにかの「月見れば」の歌に酷似してゐる點から見ても、ます〳〵千里の作たることが動きなからうと思ふ。さて歌は詩句に據つたものとすれば、いかにも上手にたしかに飜譯されて、その技倆の尋常でなさが認められる。たゞ原句が平凡で、想には采る處がないから仕方がない。

○

わがためにくる秋にしもあらなくに蟲の音聞けばまづぞ悲しき

釋 ○秋にしも　「し」は强辭、「も」は歎辭。

大意　悲しい思をおこさせようとて、わざ〳〵自分の爲に來る秋でもないのを、なぜか自分の爲ばかりに來る秋かのやうに、蟲聲を聞くや否や、何はさておいてサ、秋が物悲しいわ。

評　蟲の聲は如何にしても陽氣なものではない。假令獨唱にしても合唱にしても、秋思はまさにこれによつてそそられる。されば「まづぞ悲しき」は、「まづぞ秋は悲しき」の略語である。劉禹錫が秋風引、

何處秋風至、蕭々送雁群、朝來入庭樹、孤客最先聞。

と同巧異曲ではあるが、說明に過ぎて、禹錫が自然ないひなしに如かない。

○

物毎にあきぞ悲しきもみぢつゝうつろひ行くを限りと思へば

釋 ○もみぢつゝ　紅く色付きながら。○うつろひ　變るをいふ。こゝは散る意ではない。

大意　惣體の物毎につけて、秋はサ悲しいわ、草や木の色が段々紅くなり〳〵して、變つて衰へ行くを、この時節の限りと思へばサ。

評　草木の色付き初めたのを見て、その結果を豫想して秋を打ち佗びた。「限り」は秋の限りの意であるのを、上句の「秋ぞ」に讓つて略いたのである。これを宣長、景樹等の諸家の、草木の限りと釋きなしたのは、「物毎に」とある初句の落着を顧みず、ことわりの齟齬するにも心付かなかつた誤である。歌はあまり面白くない。

○

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

釋 ○よひ　こゝは夜をいふ。○露けかり　口語の露つぽくあるの意。

大意　草の葉こそ露に濡れるものなれ、自分が獨寢の床は草の葉ではないが、まるで草の葉のやうで、物悲しい秋の來る夜は、いつもとは違つて、それは露つぽい事であつたわい。

評　戀人に逢ひ得ずして獨寢した人の作だらう。待つ人は來ず、なまじひに物の悲しい秋は來る、怨めしい限りである。まして時が感哀の催され易い小夜中ではないか。ひし〳〵と寂寥の感に打たれ、床の邊は數行の涙に沾つた。たま〳〵草葉におく露の滋さの秋來てはまさるのを見て、乃ちこれを湊合した。床の露は卽ち涙であるのを道破せず、ひたすら草葉のうへで辻褄を合はせたのは、上の源宗于朝臣の「今はとて別るゝ時は云々」の歌と同巧である。後世藤原清正が、

わが袖は草のいほりにあらねどもくるれば露のやどりなりけり

と詠んだのは、恐らくはこれから脫化したものであらう。この「あらねども」は逆叙した一種の譬喩法である。初句、六帖にふしてぬるとあるはいかゞ。

これさだのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事のかぎりなりける

釋 ○これさだのみこ　是貞親王は光孝帝第二の皇子で、宇多帝の御兄であらせられる。貞觀十二年源氏を賜ひ、

播磨權守また左近衛中將に任ぜられ、寛平三年親王となり三品に叙し、太宰帥に補せられ、延長元年七月に薨ぜられた。○いつはとは　何時は物思ふ時ぞとはの意を、詞を略いていつた。○わかねど　分かざれどの意。○物思ふ　憂思あるをいふ。○かぎり　極點。

大意　何時は物を思ふ時といふ時節の差別無しに、年中物思はあるけれど、この秋の夜がサ、殊に物思する頂上であつたわい。

評　白居易の詩、

大抵四時心擾苦、就中腸斷是秋天。

を飜譯して、秋天を秋夜に換へた。されば杜甫が詩句の「中夜起坐萬感集」といつた趣に似て、常に憂苦ある人の秋の長夜を歎く趣である。景樹が「初二句優にして調に力あり、よりて事なき末の句も、自然にめでたく聞ゆ」と褒めたのは、一應は尤もの事のやうだが、初句にあるべき物思ふの語を、四句に讓つていはぬ省筆法の見るべきのみで、他に一向優れた點がない。大和物語に、

いつはとはわかねどたえて秋の夜ぞ世のわびしさは知りまさりける

といふ歌をあげて、在原滋春の詠としてある。等類の歌ながら、大いに劣りざまなのは、修辭が拙だからである。この親王家の歌合の頃は、滋春も歌合の作者の一人で、この歌を詠出したのを、本集の撰者等が採錄の際に、かう引き直したものかと思へど、大和物語では、滋春が相模國萇輪の里にての作としてある。同書は元來しどけないものだから、強ひては信用し難いが、姑く暗合と定めておかう。又宗于集を檢すると、「物思ふ頃ひとりごとに」と端書があつて、この歌が出てゐる。宗于は卽ち是貞親王の子だから、わが家の歌合に出詠する事は、その謂れがないでもない。さてはもと宗于の歌なのを、轉寫の際作者の名を書き落した爲、遂に「讀人しらず」の中には混じたのではあるまいか。本集の撰者達は、皆この親王家の歌合に出合つた人達だから、作者のわからぬ理由がない。そこをよく思ふがよい。若し又脫落としないで、このまゝに解かうなら、卽ち作者は分明であるが、勅勘など蒙つた人なので憚つて、わざと「讀人しらず」としたともいはれよう。すれば作者は宗于ではなくて、別人だらう。宗于は勅勘を蒙つた形跡もなく、現にその名を署して他に幾首も集中に載つてゐるから。

かんなりの壺にて、人々あつまりて、秋の夜をしむ歌よみ　みつね

かくばかりをしと思ふ夜を徒に寐てあかすらむ人さへぞうき

釋　○かんなりの壺云々　「かんなりの壺」は神鳴の壺で、宮中五舍の一つの襲芳舍をいふ。「つぼ」は中庭になつてゐる處をさしていふ語だが、こゝは直にその殿舍をさしていつてゐる。さて他の四舍は坪庭の内の木の名を以て、照陽舍を梨壺、淑景舍を桐壺、飛香舍を藤壺、凝華舍を梅壺といつたのを、この襲芳舍ばかりは、昔雷の落ちかゝつた事があつてから、神鳴の時は近衛の諸官伺候の場所となつて、雷の壺と稱へたといふ。「秋の夜をしむ」は秋の月夜を惜むの意。眞淵が「惜しむは古く愛する意に用ひ、こゝもその意なり」といつたのは、歌の意を聞き誤つての說である。「ついでによめる」はその折につけて私も詠んだの意。以下處々に散見する詞書中のこの語は、皆この意味で通ずる。○さへ　副の義で、物の一つある上に添ひ加はつたのにいふ辭。

六意　夜の明けるのが情なくて、これ程に惜しいと思ふ、あつたら秋の月夜であるものを、惜しいとも思はず、むざ〳〵と寐てしまつて、この夜を明かすであらう人までがサ情ない。

評　初夜或は夜半の頃までは、一緒に月を賞した數多の人達が、更闌けるに隨ひ、ぬけ〳〵に退散してゆくので、その人達が家に歸り着いて、大方もう寐た時分だらうと思ひ遣つて、わが良夜を惜しみ、明くるを憾む心から、これほどの良夜を見さしても、徒に夢に過すであらうあの人達の心までが、憂く思はれるといふ。されば「徒に寐て明かすらむ人」は、弘く世間の人にかけていつたのではない。この神鳴の壺の月見の宴に集りながら、半途に退出した人達に專らさしあてゝ、彼等の不風流なのを非難したのである。もし明くる朝早くこの歌を彼等の許に贈つたとしたなら、いよ〳〵妙であらう。躬恒集に月を見てといふ詞書で、

明くるまでこよひの月を見てもあらで寐て明かすらむ人の心よ

とあるのは、この前身かと思ふ。わるくもないが氣少なく力弱く、そのうへ率易に流れて露骨である。後案の風韻高く邁れて、句々洗語々錬、その響の玉のやうなのに遠く及ばない。又詞書にも歌にも、月といふ語は見えないが、實際月夜に對した興趣である事は動かせない歌だから、なまじ道破せぬ方が味ひが深い。後世の題作の、一首の生命をば忘れて、只管微細を穿ぐつて屑々たるものとは、大いに逕庭がある。

結句「人さへぞ」とあるから、必ず對へたるものがあるべき筈である。或抄には、秋の名殘を惜む憂さに對へたと解いたが、さうすると、部立も秋の末の方に入らなければならぬ。契沖、眞淵、宣長、雅嘉等の諸說、皆曖昧である。景樹が「半途に退出せし人も、月の爲には憂く思はるゝを、最初より關係なく寐てあかすらむ人さへも憂し」と解したのもいかゞ。これでは輕きを先にし、重きを後にした辭樣となつて、さへの用法からいふと、輕重が轉倒する。これは前に釋した如く、夜の明ける事が憂いのに對へたと見るべきであらう。

題しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月

よみ人しらず

釋　○白雲に　雲居といふに同じで、天を指す。大空を雲とのみいつた例は、古くから多くある。○はねうちかはし　雁と雁とが互に羽を相交へるをいふ。白雲と打ちかはすのではない。○秋のよの月　下になるかなの語を略いてある。

大意　遙に高い大空のあたりに、羽と羽とを打ち交して、連れ立つて飛び渡る雁の、その數までもよく見える秋の夜の月であることよ。

評　さても〳〵さやかな光よの餘意がある。白雲を實在の雲と見て、雲に羽を交すと見た解は、取るに足らぬ。それでは雁の影も數も見える筈なく、月もさやかな月でなくなる。又新撰萬葉には、四句をかげさへ見ゆるとして、その譯詩にも「秋天飛翔雁影見」とあるうへ、顯昭本にもかげとあるから、この集も元はかげとあつた事は、何の疑もあるまい。源俊賴が影の方を執してから、諸家大旨この說に贊同してゐる。影とは面影、後影、人影などいふ意の影で、雁の飛ぶ形貌である。月光によつて映射した地上の影ではない。この二つを混じてはならぬ。さて數と影との優劣如何と見ると、數とあるは、二句の「羽うちかはし」の雁の多數である光景に照應し、且は月の光の淸明なる感じを强くいひ顯し得たやうである。けれど又翻つて考へると、飛ぶ雁の互に羽を打ち交すなど、殊更に纖細を穿つたのは、毫釐の末も見える月明の趣を既にいひ竭したのだから、又も「數」と

あつては、餘に小刀細工に陷つて、一首の風格を損じさうである。寧ろ「影さへ」と大まかにいつた方が妥當であらう。いづれにせよこの四句は俗に「蟻の這ふまで見える」といふも類の誇張である。古來月明を歌つた吟什は尠くないが、これほどにその清光が身にしみ入る心地のする歌はない。體格も高渾で、風調は何處までも平安時代のものである。公忠集、

池水のもなかをいでてあそぶ魚の數さへ見ゆる秋のよの月

は、全くこの飜案であるが、とても飛ぶ雁の印象の鮮明なのに及びもつかない。

結句、新撰萬葉に月かなとあるのは、力弱く響いて面白くない。

○

さよ中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたる見ゆ

釋 ○さよ中　夜中。「さ」は眞の意の美稱。○ぬらし　口語のたらしいに當る。○雁がね　雁の鳴く聲をいふ。「ね」は音である。これを單に雁の事とするは、平安朝にはじまる。○月わたる　月が空をめぐり行くをいふ。

大意 あれあの雁の鳴く聲が聞えるはるかの空の方へ、もう月が廻つて見える事よ、さてはもはや夜中とまで、夜が更けたらしいわ。

評 天地の靜寂を破つて、過雁の聲が端なく落ち來るに、ふと見上げると、その聲する中空に一輪の明月の清うたのを見て、さて〳〵思はず夜を更かした事よと愕いた。總べて物の音は、夜が更けるまゝにいよ〳〵澄み增るものだから、「雁が音の聞ゆる空」に深夜の景氣が曉然としてゐる。身邊身外何物もなく、只耳に雁聲、目に明月を見たこの折の感慨は、限なく歌ひ盡されてある。格調が高古莊重で、用語も古く、更に平安時代のものでない。果してこの歌は、萬葉集卷九にある奈良人の述作で、獻二弓削皇子一歌三首と詞書のある中の一首であつた。この集の序に、萬葉に入らぬ歌を採つたとあるから、誤つて選に入れたらしい。この他にも萬葉の歌がこれかれ交つてゐるが、類句索引などない時代だから、據ない誤と思ふ。

是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

釋 ○ちゞに　上の「ち」は千の意、下の「ち」は物を數ふる辭で、はたち、みそぢのちに同じい。一つ二つのつの通轉である。○物こそ悲しけれ　物悲しいといふを、二つに分けていつた。○ひとつ　一人の意。

大意 秋は世間一統の事で、自分一人の秋ではないけれど、それを自分一人の秋かのやうに、世間の人はとにかく、自分は月を見ると、さま〳〵に物悲しいわい。

評 月を傷心の媒であるやうに歌ふのは、この集以後の事か。奈良朝時代の人士の月に對する感想は、極めて平和に愉快であつたらしい。萬葉集を見渡すと皆さうである。そのたま〳〵悲觀的に歌つたのは、戀の歌か、さもなくば、周圍の情況の悲しい場合に限られてゐる。尤もこの歌とても、白居易が關盼々に贈つた詩、

燕子樓中霜月夜、　秋來只爲一人長。

を譯したものとすれば、なほ戀愛によつた作だから、悲しいといふのもその理由がある。千里は重代の儒者ではあり、句題和歌をも作つた人だから、これも翻譯物と見る方が穩當であらう。但、詩の長の字をその信に

直譯せず、「ちゞに悲し」といひ換へ、わが身ひとりといふべきを「ひとつ」と轉義して、上下に數量の語を對照させたのは巧手である。「ちゞ」も多數の轉義である。「秋にはあらねど」と道理をいひ詰めたのは、却つて原作の餘韻あるのに劣る。

又いふ、かうした反轉法を用ひた辭樣は、これを眞直に置き換へて詠吟しては、折角の詠歎の味ひを殺ぐ。原形のまゝで詠吟すると、眞の味ひが出てくる。これが所謂調である。まあ下句は上句の脚註と見たら、ほゞ當るだらう。

ひさかたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ　たゞみね

釋 ○月の桂も　「月の桂」は、詞林採葉抄に兼名苑を引いて、「月中桂長二百五十丈、月輪內有之、下有河、此木秋花開、云々」と見え、又初學記、酉陽雜俎等にも見えた支那の故事である。「も」は口語のさへもの意。○なほ　口語のやはりの意。

大意 この國土とは違つた大空の月の中の桂でさへも、秋はやはり紅葉するせゐかして、いつもよりは光があるやうに、照り增るのであらう。

評 それでなくては、かう秋の月のさやかな譯がないの餘意がある。秋は總べて、草木の紅葉して照りあふ時節なので、月光のいみじく照つたのを見て、月桂の典故に據つて、桂の紅葉を聯想した。卽ち人間の秋を月中にまで延長した想像は、自由自在といへよう。懷風藻に、山田史三方が「銀河月桂秋」と作つたのも、この儔であらう。殊に萬葉集卷十に、

もみぢする時になるらし月人のかつらの枝の色づく見れば

とある、修辭は稍劣るが、想に於いては確かにこの先鞭を着けてゐる。後撰集、貫之の歌に、

春がすみたなびきにけり久方の月のかつらも花や咲くらむ

これは構想語意風調までも全然一致し、只春秋の相違がある爲、敍述に多少の變化を生じたまでである。どちらが先に出來たのだらうか。貫之と忠岑とは師弟だといふ說に從へば、善くも衣鉢を傳へたものといつてよい。なほ再吟して試みると、紅葉の方今一きは細やかにいひおほせてある。これはこれ、この作者の本領。三句、六帖、古異本、忠岑集等に秋くればとある。

月をよめる　在原元方

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

釋 ○光し　「し」は强辭。○くらぶの山　春上「梅の花匂ふ春べは」の條に既出。○山も　「も」はさへもの意。

大意 このやうに秋の夜の月の光がサ、春夏とは違つて格別明るいので、暗いといふ名のくらぶ山さへも越えられさうな。

評 明暗の二つを對照させて趣向を立てた着想は、春上の貫之の、

梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける

の什と同じで、やゝこの勝れてゐることは、既に其處で論じておいた。抑もかう名詞の緣語で一首を組織する

ことは、極めて容易に極めて拙ない手段で、若し實感の人を動かすに足るものがないとしたら、洒落地口乃至下手な狂歌と何の相違があらう。

以上の月數首は、秋に關係のあるもの、又は秋季の景物を詠み合はせたるものに限つてゐる。單に月ばかりを詠んだのは、雜部に收めてある。

人のもとにまかれりける夜、きりぐすの鳴きけるを聞　藤原たゞふさ

きてよめる

きりぐすいたくな鳴きそ秋のよの長き思はわれぞまされる

輯 ○人のもとに　「人」は朋友を指したものか。景樹は、これを女の許と釋してゐる。○きりぐす　萬葉集又はこの集のは、こほろぎの事である。促織に似た蟲をいふのは、後世になつて轉つたのである。○いたく　甚しく。○秋のよの長き　秋の夜の如く長いの意。○長き思　長くて切りの無い辛苦をいふ。夜長を侘ぶる思の意ではない。

大意 きりぐすよ、さうひどく啼くなよ、この秋の夜の長いやうに果しも無い辛苦は、お前よりも自分がサ格別勝つて居るわ、といふは表面の意で、この家の主人公よ、君は果しも無い辛苦を思うて泣きなさるが、餘りにさう泣きなさるな、そりや辛苦をいつたら、私の方が遙か增つてひどいのである、といふが裏面の意。

評 それを辛棒して自分は泣かずに居るものをの餘意がある。「なく」の聯想から、きりぐすの鳴くをも愁思あつてのやうに取り成すことは常套ながら、世を歎き人を恨み身を啣つてゐる主人を、只今耳近く啣々と暗愁を訴へて居るきりぐすに擬して、且は諫め且は慰めたので、その懇切な友愛の熱情と、諷諭の妙とが、楮表に溢れてゐる。景樹は、これを戀歌と定めて、蟋蟀も女を喩へたこととし、「何か打詫びて泣きたらむを、其許よりも我ぞ勝れると、打返しいひ慰めたるなり」といつた。參考の爲に姑く一說として揭げておく。「ながき思」は盡きぬ思の轉義で、夜長に響かせてある。

四句、和漢朗詠集には長き恨はとある。

是貞のみこの家の歌合の歌　としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもしらずなく蟲はわがごと物や悲しかるらむ

輯 ○わがごと　我が如くの意。

大意 この長い秋の夜の明けるのも知らずに、あのやうに鳴く蟲は、自分のやうにあれも、何か悲しくあるのであらうか。

評 當然の聯想、平凡の詩境、取り立てゝいふ程の事もない。が只夜通し蟲が鳴きあかした事を知つてゐる人は、卽ち夜通し起き明してゐた人でなくてはならぬ。何かの物思にかきくれて寐もやらぬ曉方など、今も鳴きしきる蟲の音に、親切らしく同情したのは、實は物に託して自分の秋思を歌つたのである。

題しらず　よみ人しらず

秋萩も色づきぬればきりぐすわが寢ぬごとやよるは悲しき

釋 ○秋萩も色づき　萩の葉の枯れて色變るといふ。○寢ぬ　寢られぬの意。

大意 やう〳〵秋更けて、萩の下葉もそろ〳〵色の變る時節になると、物悲しさに夜も寐られぬまゝに聞いて居れば、あの蟋のしきりに鳴くのは、自分が寐られぬと同じやうにサ、夜は物悲しいのかしら。

評 夜すがら寒蟋に伴ひ明しての作であるが、「悲しき」といつた聯想にゆづつて、鳴くの一語を道破しない點に、やゝ婉曲の糸ひがあると見られる。その他は、狀況といひ、構想及びその表現の順序といひ、悉く前首と同一軌である。なほいへば、措辭の自在な點では或はこれが勝るかも知れないが、凄婉で含蓄味があり、しかも語調の流麗なる點では彼れが優つてゐる。

猿丸太夫集には、初句秋萩の、四句わが身のごとやとあるが、勿論わるい。ことに同書は僞書である。

○

秋の夜は露こそことに寒からし　草むらごとに蟲のわぶれば

釋 ○寒からし　寒くあるらしの約。

大意 この秋の夜は、いつもより露がサ格別に寒くあるらしいわ、叢毎に、あれあのやうに、蟲が鳴いてつらがつて居るを思へばサ。

評 秋の夜寒に、草村の露はまず〳〵繁くおき、蟲の音は悲しげに響く。しかし蟲の鳴くは、何も露に關はつての事ではない。が、この兩者に交渉をもたせて、蟲が難儀がつて鳴くのは、露の冷いせゐらしいと推定した。「露こそことに」は蟲の音に有力な脈絡がある。

結句「わぶれば」を、眞淵が「わぶるはの誤ならむ」と疑つたのが却つて誤であることは、意樣によつて了解されよう。景樹が、語例を擧げて誤でないと辯護しながら、猶わぶるはの意に解したのは滑稽である。

○

君しのぶ草にやつるゝふるさとはまつ蟲の音ぞ悲しかりける

釋 ○君しのぶ草　人を慕ふ意のしのぶといふ語に、しのぶ草をかけた。「しのぶ草」は、和名抄に垣衣とある草で、多くは簾又は舊い樹の皮や枝の間に生じ、一根に叢生し、葉は長さ四五寸位の甚だ厚いもので、深綠色で、背に金星がある。冬を經ても枯れない草である。俗に八目蘭（ヤツノ）といふ。釣りなどにしてもてはやす蕊（シノブ）とは違ふ。○やつるゝ　見ざまの惡くなるをいふ。○ふるさと　春上「人はいさ心もしらず云々」の條參看。但こゝは、住み捨てゝ年經た里をいふ。○まつ蟲　松蟲に待つを寄せた。さて古歌にある松蟲は、りん〳〵と鳴く今の鈴蟲の事で、今の松蟲は古の鈴蟲である。この名稱古今全く相反してゐるから、注意を要する。

大意 見捨てゝ寄り付かない貴君を戀ひ偲（シノ）ぶといふ名の付いた忍草が、軒端などに生えて見苦しくなつた故里は、外とは違つて、荒庭に鳴く松蟲の聲がサ、人を待つといふ名のあるせゐか、一入悲しいことであるわい。

評 主人一度去つて廢宅の秋は閑である。生えた草の名は偲ぶといひ、鳴く蟲の名は待つといふ。これさへ既に傷心の種であるのを、ましてや、いくら偲んでもいくら待つても、無情な主人は全く故郷を忘れ果てゝ、振り返りもしないではないか。空しく見る人聞く人の感愴を催すばかりである。斷腸の極とはこれであらう。想ふに、その主人の住み捨てた故里に、今もなほ住んでゐるこの歌の作者が、その故人である主人を思ひ偲ぶの

あまり、その故宅の荒廢した光景を歌ひ、これに託して、一面には主人の鄕愁をそゝつて萬一の歸來を望み、一面には自己の思慕の情を叙べたのである。されぱこの歌は、その主人公の許に贈つて一寸驚かしたものに違ひない。景樹が、この「君」を既に世に亡き人と解したのは、事情に暗い說である。それでは「故里」の語も一向剴切ではない。「君しのぶ草」の語法は「袖ふりはへて」の類で、この事は春上「春日野の若菜つみにや」の歌の條にいつておいた。一首の中に二所まで、緣語のいひかけを用ひてあるが、更に厭味にも狂じても聞えないのは、內容に實感の人を動かすものがあるからであらう。離別の部の行平朝臣の詠、

たち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今歸りこむ

も、このおなじ體である。結句、形容詞を用ひて、「悲しかりける」と說破したのは直截で露骨で、詠歎の味ひを殺ぐやうだが、又一面から見れば、この歌の主意は故宅の主人公に對しての諷諫にあるから、その使意を達する手段としては、却つてかう直截に表現する方が効力が多い。さてこの歌の風格を案ずるに、たしかに承和以後の作である。

○

あきの野に道もまどひぬまつ蟲の聲する方にやどやからまし

釋 ○まどひ　迷ひの意にちかい。○まつ蟲　松蟲に、待つの意をもたせた。

大意 この面白い秋の野に、心がうかゝと浮かれ迷ふばかりか、道も踏み迷うたわ、まゝよかうなれば、いつそあの人を待つといふ名の付いた、松蟲の聲のする方へ往つて、宿を借して呉れるならば借らうか。

評 「道も」は、草花などの面白さに、心も惑つたのに對へたのである。秋の野邊に遊び耽つて、日暮になつてしまつた實況が思ひやられる。何も骨折つて歸るにも及ぶまい、いつそこの野の待つといふ松蟲の許に往つて、今宵一夜泊らうかとは、窮りない逸興に任せた、心のすゝみを歌つたものである。曠達物に拘はらない詠者の氣質があらはれてゐる。松蟲の秀句などは輕く聞くがいゝ。

○

秋の野に人まつ蟲の聲すなり我れかと行きていざとぶらはむ

釋 ○なり　歎辭。○いざ　いでに近い。誘ひ立てる語。○とぶらはむ　訪はむといふに同じい。

大意 この秋の野で、人を待つといふ名の付いた松蟲の聲がするわい、お前が待つのはこの私かと、その聲するあたりに往つて、ドリヤお見舞ひ申さう。

評 「人まつ」とあるのに、自然なつかしげな心地が現れる。つまりは、秋の野に松蟲の聲がするから、その方に往つて見ようの意であるのを、上は「人まつ」といひ懸け、さて「我れかと」と下に對へて闢はしめたその構想が、作者の巧を弄した處である。

○

もみぢ葉の散りて積れる我が宿に誰れをまつ蟲こゝら鳴くらむ

釋 ○宿　こゝは庭をさす。宿はもと屋(ヤド)前の義である。○誰れをまつ蟲　誰れを待つに、松蟲をかけた。○こゝ

ら　澤山の意。

大意　誰れも踏み分けて來る人も無くて、紅葉が散つてさうして積つたこの庭だのに、さうとも知らず、待てば來る人のあるものゝやうに、誰れを待つとて、あのやうに松蟲が澤山鳴く事であらうぞ。

評　唐詩に「青苔黄葉滿二貧家一」といつたのに似通つた柴門の裡、落葉の下などに、さうした蟲が繁く啼いたなら、どんなに哀れであらう。二句散りつもれるといはず「散りて積れる」と時間をもたせたのに、秋來寂寞として訪ふ人も無く、只木の葉の散るのみが日毎の出來事であつた趣が見えた。即ち拂はぬ庭の景色である。勿論こゝは訪ふ人もなく、又待つべき人もない幽棲である。これ「誰れをまつ蟲」の一疑問を提唱し來つた所以である。景樹いふ「松蟲のこゝら鳴くは、盛に鳴立つるけしきなれば、秋の半頃と覺ゆるに、紅葉の散積れるは、暮秋より初冬のさまなれば、打合へりとも見えず。松蟲も人氣遠き山野などの方ふさはしければ、後撰集、六帖等にこの上句秋の野に來宿る人もおもほえず」とあるぞ正しき」と。尤もらしい說ながら、修辭も語調も大に後れてゐる。思ふにこの「もみぢ葉」はあながち楓櫨などいふ木に限ることではあるまい。櫻の紅葉などの秋の初からも散つて積つたのを斥したのだらう。さすれば景樹の難も無用の辯となる。

○

蜩（ヒグラシ）の鳴きつるなべに日は暮れぬとおもふは山の陰（カゲ）にぞありける

釋　○蜩　かなゝ蟬のこと。夕暮多く鳴くによつてこの名がある。○なべに　並（ナベ）にの義で、口語のつれてといふに同じい。必ず濁るがよい。○とおもふは　と思ふは誤りでの意。○にぞありける　一本「にざりける」とある。

大意　山里に來て見れば日を暮すといふ名の蜩の鳴くのにつれて、いつの間にかはや日は暮れたと思ふは間違ひで、木深い山の陰なので闇いのであつたわい。

評　綠樹相蔽うて晝もなほ暗い山陰は、即ち茅蜩の常に鳴く處なので、この蟲の名に因んで一趣向を立てたのである。平凡で感興がさう深くない。後撰集に、

ひぐらしの聲きく山のちかければ鳴きつるなべに入日さすらむ

とある貫之の歌も、その想ばかりか、その弊まで似てゐる。

四句、顯本、六帖、朗詠にと見えしはとあるは、却つて面白くない。よく意釋の補足語を辿つて、その意を曉られたい。定家の密勘に「家の本にはとおもへばとあり」とあるが采らない。

○

日ぐらしの鳴く山里のゆふぐれは風よりほかに訪ふ人もなし

大意　都とは違つて何時も寂しいが、殊に茅蜩の鳴くこの山里の秋の夕暮頃は、そよ〳〵と音する風より外には、一向に音づれる人もないわ。

評　まあ寂しい事よの餘意がある。これを寂（ムナ）しと說破しないで回護した處に、含蓄の味があつて、餘韻が遠長い。更に細說すると、蜩の聲といひ山里といひ夕暮といひ風といひ、どれ一つでも秋の物寂しい感情をそゝるには充分の材料である。それを悉く湊合した上に、「訪ふ人もなし」と詠め捨てたのに、いよ〳〵强い寂し味が印象

される。まして此の結句の語調の細くからびて力無げなのが、全首の意調によく調和して、旨く收め得てある妙は淡々と筆をつけて、些の痕迹を露さぬ點にある。後世西行が、

あはれたゞ草のいほりのさびしきは風より外にとふ人ぞなき

と作つたのは蹈襲である。殊にさびしきはと說破したのは、餘韻索然としたうへに、結句の語調が强く、全首のからびた調にふさはない。

結句、小町集には人ぞなきとあるが、その調の劣つてゐる事は、今いつた如くである。又小町集は後人の纂めたものだから、作者はやはりこの集に「讀人知らず」とあるのが正しい。

はつかりをよめる　在原元方

まつ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

釋 ○初雁　秋はじめて來る雁をいふ。○ものから　ものながらの意。

大意　待つ人の聲を聞き付けたのは珍しいものだが、その待つ人ではありもせぬものゝ、不思議に待つ人同樣に、初雁の今朝鳴く聲が珍しい事よ。

評　風冷かに吹き立つて、露など繁く置いた朝、おもはず過雁の第一聲を耳にした景氣であらう。「けさ」の一語這般の景致を映出する眼目である。待つ人の聲を對照に取り出したのは、雁は年々に往き交ひして遠來の客めいてゐるからの聯想で、しかも待つ人同樣に雁を見た作者の心情の美しさが、快い感じを起させる。隨つて結句が旨く活きてくる。落想奇といふ程の事もないが、自然で、清圓流麗、明珠が盤上を走る趣がある。風體元方の他の作に似ない。全くこの人一代を通じての佳作である。

秋風にはつ雁がねぞきこゆなるたが玉づさをかけて來つらむ　是貞のみこの歌合の歌　とものり

釋 ○秋風に　秋風の吹く時に、又は秋風の吹くにつれての意。○玉づさ　玆では書狀をいふ。奈良時代には專ら使といふ語の枕詞に用ひた。眞淵は「玉は美稱、づは助辭、さは章の字音なり」といひ、宣長はこれを破して、上代の風俗として、「梓の木に玉を著けたるを使のしるしに持てあるきしなるべし。そは思ひ懸けたる人の門に錦木を多く立てしと、心ばへの似たる事にて、渾べて使を遣る音信の志を顯し、しるしとしたるなるべし。さて後に文字渡り來て書をかはす世になりて、消息文は使のもてくる物なる故に、かの玉梓に准へて、それをも同じく玉づさといへるなるべし」といひ、又村田春海は「陸奥にて男女の懸想するに、王づさといふ物をかたみに贈ることあり。殊に桃生郡、玉造郡などの山里にては、常にする事にて、厚紙を折りて結ぶさま、五十種ばかりあり。その結び樣にて事の故由を知ると、その國人の語るを聞けり」といつた。宣長又いふ「讃岐の人女を娉ぶに、藁を結びて贈る業あり。里人共は皆しる事なり。若し萬葉に玉梓と云へるは、かゝる事にはあらじか」と。語意はいづれにせよ、使と續く枕詞なのを、萬葉集三「いつしかと待つらむ妹に玉梓の事だにのらずいにし君かも」とある歌は、玉梓を直に使の事に詠んである。なほ足引を直に山の事としたのと同じい。かうなつては書狀は使の代用をなす物だから、その役目の同じな處から更に一轉して、玉梓を書狀の意に用ゐるやうになつて來たらしい。それはこの集に近い以前の事であらう。○かけて來つ　翼にまれ足にまれ、頸にまれ着けて持

つて來るをいふ。「玉梓をかけて來る」とは雁の書札を傳へる事で、前漢の蘇武の故事である。蘇武が武帝の代に匈奴に使して、爲に久しく囚れて澤中にゐた、漢の使が更に匈奴に往つた時、匈奴は武は既に死んだと紿いた、たま〳〵武帝上林苑に射て雁を獲られた、足を見れば帛書が係けてある、怪んでそれを取つて見られると蘇武の書であつた、これによつて武が未だ生きて胡國に在る事を知られたといふ。委しくは漢書、蒙求等の書に出てゐる。

大意　この頃吹く涼しい秋風に誘はれて、初雁の聲がサあれ聞えるわ。雁は遠方からの書狀を翼にかけて持つて來るといふ事だが、あの雁は誰れの書狀をかけて來たであらうか。

評　遠人を懷つてゐる折などの感興だらう。蘇武の典故を思つて、この雁も誰れかの書狀を持つて來はせぬかとの疑は、史實を知る者に取つては、頗る興味饒いものである。卽ち過去の面白い追想と現在の景致とが融合して、いはれぬ味ひが生まれる。二段に切り整へた節奏の巧に、一氣流轉の妙を具へてゐる。出語また渾成、聲調また嘹亮。これが友則の特色である。

三句、六帖にひゞくなるとある。

題しらず　よみ人しらず

わが門にいなおほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり

釋　○わが門に　我が門前にの意。○いなおほせ鳥　田の畔などに居て秋鳴く鳥であらう。秋歌下、忠岑の歌にもこれを詠んである。和名抄に「羽族、名稻負鳥、萬葉集云其讀以奈於保世止科」とある。按ずるに萬葉集にこの名は見えない。新撰萬葉を續萬葉ともいへば、新撰の二字か續の一字か〻落ちたのだらう。さてこの鳥の生體がわからない。能宣、順、和泉式部、公實等の歌皆交接敎鳥の典故に據つて、鶺鴒を詠んだらしい。顯昭、定家、眞淵も鶺鴒、宣長はにふなひ雀、景樹は河原鶺鴒などいつて、定說がない。甚しいのは馬だらうともいつた。前にもいつた如く中古の歌人等、百千鳥、呼子鳥、及びこのいなおほせ鳥を集中三鳥の祕事と稱へて、傳授物として扱つた。然し傳授してもその實物は依然として不明なのであつた。抑も三鳥の名目は文選に見えて、雜體詩三十首に、「願言寄三鳥」といふがある。蕭銑の註に「三鳥者楚辭本屬三當時所見一無三定名一也」とある。これ等に擬へて、强ひて三鳥の目を立てゝ祕事としたらしい。

大意　自分の門前にいなおほせ鳥が鳴くにつれて、今朝吹く涼しい秋風に誘はれて、雁は意外に來たわい。

評　に文字四つあるは、小町の「花の色は云々」の歌に似て、今少し耳につく、詩境はほゞ辿られないでもないが、いなおほせが鳥が不明なので、隨つて確たる事もいはれない。評語をさしおく。

○

いとはやも鳴きぬる雁か白露の色どる木〻ももみぢあへなくに

釋　○いとはやも　最も早くも。○雁か　「か」は歎辭。○色どる　彩色する意。○あへなくに　「あへ」は春下「櫻花とくちりぬとも」の歌の條に既出。「なく」は打消の助辭のぬの延音。

大意　一通りならず早くまあ鳴いた雁であることよ、白い露が置いては彩色する諸木も、まだろくに色付きおほせぬのにサ。

評 山野の秋色また閑でもないうちに、數行の渡鴻が急に寒さを告げる、意外でなくて何である。さればこそ「いとはやも」とは驚歎されるのである。實は雁は來べき季節に來たので、作者自身の心のたゆみから、それを早いと感じたのである。「白露」を擬人して、彼れが諸木を彩色するやうにいつたのも、それを下の「もみぢ」に對照させて、字面に色彩の配合をもたせたのも巧は巧だが、その爲に風骨がやゝ傷くやうな氣がする。

結句、六帖にもみぢあへぬをとある。

○

春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧のうへに

釋 ○いにし　往にしの意。○かりがね　もと雁が音の意であるが、今は只雁の事に用ひてゐる。

大意 ついこの間の長閑な春の霞に、幽かに見えぬやうになつて立ち去つた雁は、この秋の霧の上に現れて、思ひかけず今サあれ又鳴くわ。

評 この卷にある、

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風のふく

とほゞ同型で、初二句と四五の句とを對揚させて、鴻雁の去來を見て、春秋退轉の速かなのに驚歎したのが主意である。故に「今ぞ」に意外と感じた趣をもつ事は、既に「いつのまにさ月來ぬらむ」の條でいつた如くである。初二句、一聲づつに影消えて、霞の中に遠ざかつて往つた歸雁の面影が見るやうである。これが卽ち今の秋霧の上を飛び渡る景色に似寄つてゐるので、思ひ出されたのである。まことに恰好の聯想ではないか。「春霞かすみて」と體用の別こそあれ同語を重疊したの、初二三五句の頭字、いづれもア韻の響あるのなどは、又聲調の流滑な所以である。四五の倒句法も諧調となつて、節奏いよ〳〵妙である。殊に四句は語調が強いので、五句を收めるには、更に一倍の大力量を要するのを、忽に字餘りの一案で、容易く解決したのは、頗る敏活の手腕である。又結句の終りのに文字はとかく調が促つて不快なのを、これは字餘りである爲に耳立たない。詞を使ふこと優麗に典雅に、巧ではあるが纖細に墮ちず、格調おのづから高邁である。

この歌、袋草子には「延喜の御時、躬恒が子の小童を召しけるに、時は八月にて、瀧口より竹の臺のもとに參りたりしに、雁の鳴きたりければ、勅ありて歌を奉らしめ給ふに、春霞と唱へたれば、人々あざけり笑ふ。然るに次句を聞きて各感じたり」といひ、古今著聞集には「寛平歌合に、初雁の題にて、友則左方にて、この歌の初句を讀み上げたる時、右方の人々笑ひぬ。次句霞みていにしと歌ひ上げたるを聞きて、皆靜まりかへれり」とある。けれど若し事實さうした折柄の歌ならば、何でこの集に「題しらず」と記されよう。躬恒の子或は友則の作としたら、何で「よみ人しらず」と記されよう。皆傳ふる者の誤である。又寛平歌合とあるは、后宮の歌合をさしたものか。然るにそれにはこの歌がない。杜撰である。

○

夜をさむみ衣かりがね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり

釋 ○夜をさむみ　夜が寒くて。○衣かりがね　衣を借るに雁がねとかけた。○うつろひ　衰へ凋れるをいふ。

この歌は、ある人のいはく、「柿本人丸がなり」と。

即ち葉の黄ばみいたむこと。

大意　この頃の夜の寒いので、衣を借るといふ名の付いた雁の鳴くにつれて、寒さの爲に萩の下葉も色が變つてしまつたわい。

評　「夜を寒み衣」といふまでを序詞と解した說もあるが、さうでない。「夜を寒み」は雁の來るにも、萩の下葉の移ろふにも打ち合つた主要の句だから、序詞の如き輕い意のものでない。衣を借ることは、奈良朝詩人が「旅にして衣借すべき妹もあらなくに」、又「さぬの岡越ゆらむ君に衣借さましを」など歌つて、古へは夫婦の間などでは互に著物を借り合つたものだ。故に夜寒の頃の雁が音にいひかけて、詞の文とした。この修辭は「少女らが袖ふる山」「時鳥人まつ山」の例である。「萩の下葉も」の「も」文字は、雁金の鳴くに對へたのである。萬葉集卷八に、

雲のうへに鳴きつる雁の寒きなべ萩の下葉はうつろへるかも（結句又、もみぢつるかも）

とあるを蹈襲して、原作以外にあまり蹈み出してゐない。どれも皮膚の感覺と視覺とを基礎として、想が構成されてある。或は萬葉の歌が平安調に、自然轉唱されたものではあるまいかとも思ふ。「衣かりがね」の秀句は、當時にあつては奇警と思はれたらうが、後世人々道破して竟に陳腐となつてしまつた。

左註に「人麿が歌なり」と記してあるが、更に歌聖の風骨でない。新撰萬葉にも收められたのを思へば、平安朝初期のものらしい。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船はあまのと渡る雁にぞありける

評　○聲をほにあげて　聲を高く打ち上げての意。「ほ」は秀の意で、物のすぐれ出たのをいふ。さて物を顯すを「ほに出だす」とも、「ほに顯す」ともいふので、舟の帆を擧げるにかけて、聲を帆にしてあぐといつた。○あまのと　大空をいふ。天を海に見成して、海には迫門（セト）水門（ミナト）など渡り處あるに准へて、天の門（マト）といふ。「戸」と書くは借字である。

大意　この節の秋風に、聲を帆に即ちあらはに高く擧げて、追手に走る如く來る船は、よく〳〵見れば船ではなくて、空の海の渡り所を高く鳴いて渡る、雁でサあつたわい。

評　着想の本據は雁が遙かの天末から飛んでくる景趣が、小舟の沖から漕ぎつれて返つてくるのによく似てゐるので、雁の聲を上げるのを帆に擧げてと譬喩し、折柄の秋風を追手にあへしらつて、「くる舟は」と隱喩し、「天の門渡る」と緣語を以ていひ續けたのは、冬部の列樹の歌、

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

の筆法と全然同一である。層一層に巧み重ねてはあるが、さう纖細でもなく聲調勁快である。二句五句の字餘り、上下の斤量が相當してゐる。

雁の鳴きけるを聞きてよめる　みつね

うき事を思ひつらねて雁がねのなきこそわたれ秋のよなよな

評　○うき事　心憂き事。○思ひつらねて　いろ〳〵思ひ竝べて。○雁がねの　「の」はの如く。の意。

大意　幾羽となく連つて鳴いて渡るあの雁の如く、自分は身の憂き事の數々を思ひ續けて、泣いてばかり明かすわ、この秋の夜る〳〵はサ。

評　秋思の催すに堪へず、秋の長夜を明かしかねた折も折、過雁の聲々に鳴き立てるのを聞いて、彼が列を成して行くので、「思ひつらね」と寄せ、空を鳴き渡るをわが泣いて月日を亘るにかけて、雁の緣語で仕立てた述懷である。故に「秋のよな〳〵」はわが泣き渡ることの連夜であることを擬へたのである。詞書の文體も、その意で書かれてある事を注意されたい。

是貞のみこの家の歌合のうた　たゞみね

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目をさましつゝ

釋　○山里　山家をいふ。○わびし　心憂く苦しい意。

大意　都と違つて山家は、いつもといふ中に、殊に秋がサ難儀に思れるわい、夜は物哀な鹿の鳴く聲に、幾度となく目を覺し〳〵するによつて。

評　境は山里、節は秋、時は夜半であるのに、嶺上の鹿の音が絶えず物思ふ人の夢路を破る。この取り集めた哀れさは、實に侘しい頂上だらう。都人の馴れぬ山住の情致がよく現れてゐる。この作者の歌としては割合に平淡な作といはう。但萬葉の、

山ちかく家やをるべきさをしかの聲を聞きつゝいねがてぬかも（卷十）

の類想である。

三句、六帖の一本に悲しけれとある。

おく山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿のこゑ聞く時ぞ秋はかなしき　よみ人しらず

釋　○おく山　深山をいふ。外山、端山に對した語。但こゝは輕く山の奥といふ位の、け近い處の意に用ひてある。

大意　秋はすべて悲しい時であるが、人里離れた山のあたりで、最早散つた紅葉を踏み分けてあるきなどして鳴く鹿の聲を、遠く遙かに聞く時がサ、取り分け秋は悲しいわ。

評　秋の更けた山陰のあたり、あの鼻聲の悲しげな鹿鳴に、一段の感哀を促されては、秋を悲むまいとしても心にまかせない。二句は暮秋の落葉した時節を示し、かねて鹿の動作の形容に用ひたので、かう推測を斷定していふのは、なほ下に、

秋萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えずておとのさやけさ

の上句の叙法に同じい。それを一說に「紅葉ふみわけ」を作者自身の紅葉を踏み分ける意として、新撰萬葉の、

秋山寂々葉零々。鹿聚鳴音數處聆。勝地尋來遊宴處。無朋無酒意猶冷。

とある、この歌の譯詩を證に引いてゐるが、彼れを以てこれを釋する事は、本末が轉倒してゐる。況やこの譯詩は原歌の意を損じて、極めて妥貼を缺いてゐるから、さう信用はならない。下句の力ある「ぞ」の辭に、「は」の辭を粘せしめた爲に生ずる餘意は、意釋に解いた如くである。

小倉百人一首に、作者を猿丸太夫とあるのは據がない。猿丸集にも見えない。尤も同集は僞撰である。

題しらず

秋萩にうらびれをればあしひきの山したとよみ鹿の鳴くらむ

釋 ○うらびれ　うらぶれの轉語。顯昭が誤であると云つたのは非。愁ふるの意。○をれば　宣長がをるにの意と解したのは早い。この語意、意釋に就いてよく心得られたい。上の七夕の歌に、「天の川淺瀨しらなみたどりつゝ渡りはてねば」とあるをも參照するがよい。○とよみ　響動する意。

大意 やうく枯れ行く萩の下葉をながめて、物思してゐると、それだけでも既に堪へ難く思はれるのを、何でこの山本を響かして、かう鹿が鳴くのであらうぞ。

評 いよく悲しく泣き出したいの餘意がある。凋殘した萩、その見じめさは、既に詩人の心を傷ましめる。折柄かの山陰に端なく悲しい響を傳へて、曳聲に鹿鳴の聞えたので、時もあらうに何でかうは鳴くのかと、あまり思ひ遣りなさ過ぎるやうに、彼れを暗に詰つてゐる。初句は悲秋の時節を示すが主意で、傍ら鹿をいひ出す楔子とした。蓋し萩と鹿とを詠み合はせて、萩の花妻などいふ事は、奈良時代からの常套になつてゐる故である。故に「秋萩」とあるに拘泥して、景樹が、萩にも鹿も愁ふるものなるかとまで、餘意を推したのは誤つてゐる。又廣蔭が初句の「に」文字を秋津羽に匂へる妹など云ふにの意義に解し、二句の「うらびれ」を宣長の解に從つて項垂れの意として、「秋萩の如くに物思に項を投げてゐれば」と釋したのは、全然わるい。さて想は萬葉の、君にこひうらぶれをればしきの野に秋萩しのぎさを鹿鳴くも（卷十）

夜を長みいのねらへぬにあし引の山びことよめさを鹿鳴くも（卷十五）

この頃の朝けにきけばあし引の山をとよもしさを鹿鳴くも（卷八）

などあるに胚胎して、あまり變つた節もない。

初句、奥義抄に「普通本には秋風にと侍り」とある。又六帖には「妹にわがうらこひをれば足引の山下とよみ鹿ぞ鳴くらむ」とある。

○

秋萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えずておとのさやけさ

釋 ○しがらみふせて　しをり搦みて踏みしだくをいふ。「しがらみ」はこゝは動詞である。繁く絡むの意か。竹木を編んで流れを遮るを柵といふも、この語の名詞となつたもの。○おと　聲に同じい。鳥獸の鳴聲をおとといふは古言である。萬葉五に「鶯のおと聞くなべに」同十七に「時鳥なくおと遙けし」源氏物語初音の卷に「鶯のおとせぬ里は」など例が多い。○さやけさ　あざやかさと同じい。分明なるをいふ。「さ」は形容を意味する助辭。

大意 この頃の盛りの秋萩を、胸に分け靡かしおし伏せて、姿を隱くして鳴く鹿が、人の目には見えないで、その辯あのまあ聲があざやかな事わ。

評 懷かしい鹿の音に、その姿を見たく思つても見られないのを憾む。これ四五の句に、視聽の二つを闘はせた爲に生ずる餘意である。初二句は上の「おく山にもみぢ踏み分け」の條でいつた如く、可憐愛すべき萩花を借り

て來て、鹿の動作を形容したのである。かやうに丁寧に想像を措くことは、卽ち鹿に對しての懷かしい心持を表示したもので、おのづから下句の素地を成してゐる。多少の工夫こそ費してあるが、四五の句、對照が密貼し過ぎて、味ひが乏しい。

結句、顯本にこゑのさやけさとある。

秋萩のはな咲きにけりたかさごのをのへの鹿は今やなくらむ　是貞のみこの家の歌合によめる　藤原敏行朝臣

釋 ○たかさごの　山をさしていふ。委しくは序文中に旣出。○をのへ　尾上の義。峰をいふ。

大意 あれ秋萩の花が意外に咲いたわい。さては山のをのへの鹿は、今サ鳴く事であらうか。

評 萩の花の候は鹿の妻戀して鳴く時なので、この兩者を配合して、遂には萩を鹿の妻とまで歌つたのが萬葉にある位で、殆ど分離し難いやうな慣習になつてゐる。されば、

わが宿のふぢなみの花咲きにけり山時鳥いつか來鳴かむ

などと同じ手法の、型にはまつた想像は、敢へて珍しいとはいへない。この種の想は殆ど日常の口頭語に近い性質を帶びてゐる。さてかうなると、只一篇に漲る氣分如何、修辭の美如何、聲調の美如何を問題にするより外はない。この歌はその點において、悉くそれらの條件を突破するに足るだけの資格がある。風神暢爽、朗誦すべき作である。躬恒集に、

わが宿のあき萩のはなさく時はをのへの鹿のこゑ立てゝなく

も、この類想類型で、しかも形式に於いて頗る劣つてゐる。

昔あひ知りて侍りける人の、秋の野にて逢ひて、物がたりしけるついでによめる　みつね

秋はぎのふる枝に咲ける花見ればもとの心はわすれざりけり

釋 ○あひ知りて　これに二義がある。たゞ識り合ふをいふのと、夫婦相思の關係をいふのとである。こゝは昔馴染の女を斥したと思はれる。○ふる枝　舊枝。萩には草立と木立とある。舊枝に花の咲くのは木萩である。○もと　以前の意。幹（モト）の意をかけた。

大意 秋萩の去年の舊枝に、相變らずこの通り咲いた花を見れば、萩は以前の心を忘れずにあつたわい。

評 然るに秋萩とは違つて、昔の人は舊（モト）の心を忘れはてた事よと、暗に諷詆した餘意がある。秋郊散策の折柄、圖らず昔馴染の婦人に出會つたが、二言三言の話こそしたれ、あまり打ち解けもせぬのを不平に思ふ餘り、野生の古枝の萩を倩ひ來つて、その年々に花を着けるのを讃歎して、「花見れば」といひ、「忘れざりけり」と打ち合はせたのは、おのづから比興體に屬する作である。ましてやその古枝の萩にさして、この歌を贈つたとしたら、いかにかの女は顏の赤らむまで羞ぢ入つたらうと、その情況が想像されて、頗る妙である。雜上の、

石上ふるから小野のもとかしはもとの心はわすられなくに

の詞を襲用して、意を異にした換骨奪胎の手腕、實に自在といつてよい。結句の調は卑弱ながら、通體優美に流暢である。古來結句を人の忘れぬ意、又はわが忘れぬ意と解釋したのは誤である。こは三句以下の語調を、

よく咀嚼し得なかつた故だらう。又詞書の「あひ知りて侍りける人」を朋友の事とした宣長等の說は、四季の部立に泥んで、戀歌でないと思つたからの誤である。

結句、六帖にかはらざりけりとある。

題しらず　よみ人しらず

あき萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

釋 ○ひとりある人　獨身者をいふ。「ある」は居ること。○いねがて　寐ね難くの意。

大意 秋萩の下葉がそろ〳〵枯れかけて、色が變るわ、これでは夜寒が增してくるだらうから、もうこれからはサ、獨住をして居る者は、寢入り惡くさうにする事か。

評 一叢の胡子花花既に散つて、葉も亦衰へ、秋氣はひし〳〵と迫つて來た。そのわびしさ凄まじさは、物思はぬ人の夢をも圓かにさせない。ましてや樞の身の只ひとりある人では、どんなものか。空しく衣襟の冷たさを卿ちつゝ、膝を抱いて天明を待つことであらう。作者はその中の一人である。否寧ろ作者自身が主である。「今よりやひとりある人の」と將來の苦酸を豫想してをのゝいた點は、まことに同情に堪へない。二句切れの歌である。誤つて三句まで續けてはならぬ。

○

なきわたる雁の涙やおちつらむ物おもふやどの萩のうへの露

大意 雁も物思があるかして、あのやうに空に鳴いて來るが、その泣く涙の落ちたのだらうか、物思をして悲しんで居るこの庭の萩の上に、自分の袖の涙のやうに繁く置く露はサ。

評 見る所愁景でないものはなく、觸れる所愁緒でないものはない。折も折過雁の聲を聞いては、これを同情に推想して、萩の露はその涙だらうかといふは、畢竟「なき渡る」からの聯想である。四五句に宇餘りを用ひたのは、三句まで一旦にいひ下した上句の語勢に、權衡をたもたしめる爲である。意は悲しく切に、詞は玉の如く穩秀に、聲響悠揚、諷すべく誦すべきものである。但集中秀歌十首の一つに定家の推選したのは、俄に諾ひがたいが、この集中での今調の歌として勝れたものゝ一つであらう。

○

はぎの露玉にぬかむと取ればけぬよし見む人は枝ながら見よ

ある人のいはく「この歌は奈良のみかどの御歌なり。」

釋 ○玉にぬかむ　玉にして貫かうとの意。春上に「玉にもぬける春の柳か」、萬葉集八「さを鹿の萩にぬきおける露の白玉」などある。○けぬ　消えぬの約。○よし　口語のいゝわと同意。まことによしと許すのではない。

大意 恰も玉のやうな萩の露の餘りの見事さに、眞實の玉のやうに緒に通して見ようと思つて、手に取るとつい消えたわ、よし賞翫する人は、いくら玉のやうに見えても、取らずに枝にあるまゝで見なさい。

評 花の色に匂つた露は、いかに美しかつたらう。さればこそ、一寸玉に貫かうといふ洒落氣も出るのである。で障つて見るともろくも碎け散るので、我れながらよせば善かつたと後悔されて、枝ながら見ることの賢明な

ことを力説して、見む人に警告してゐる。蓋し露を愛賞する至情である。尙思ふに、玉に貫かうとて手に取つたといふは誇張で、實は一寸指頭で露に觸れて見た位の事であらう。そして誰れもこの萩の露に對しては、手を觸れずには居られぬものと想定してしまつた、その穉氣が面白い。節は短く音は促つて、古拙な修辭に却つて素朴な味ひがある。

下句、六帖に見む人はなほよそながら見よとあるは劣つてゐる。又左註に「奈良の御門の御歌」とあるのは、例の諸けがたい。

○

をりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白つゆ

釋 ○しぬべき　仕舞ひさうの意。○たわゝ　しなゝ〳〵するをいふ。撓むと同語。

大意 大層綺麗なので、一枝折つて見たいが、しかし折つて見たら定めて落ちてサしまひさうな、秋萩の花の枝がしなふほどに置いた、あの白露がサ。

評 折つて露を散らすよりは、折らずに賞翫した方が、寧ろましだとまで思ひやつた口氣である。前首と着想が似て、これは修辭が舒暢で、彼れは氣魄が鬱勃としてゐる。

四句、六帖に枝もとをゝにとある。

○

萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

釋 ○小野　野と同じい。「小」は美稱。大野に對へたのではない。○露霜　露と霜との意に解いたのもあるが、つゆじもと濁つて、秋の末から冬へかけて露のやゝ氷りかけた物の稱とするがよい。萬葉集にもこの意で用ひてある。○ぬれてを　「を」は歎辭。○さ夜　上の「さ夜中と」を參照。

大意 思ふ人の許行くに、多分萩の花がもはや散るであらう、と思ふその野道に置いた露霜に、難儀ながら濡れてまあ行かうわ、萩の花の散るが惜しくて、見捨てゝは行かれぬ故に、行先は夜は更けようとも構はずにサ。

評 濡れても、夜は更けても往かうといふ。その往先のたゞの人でない事が了解されよう。ましてや「小夜は更くとも」の口氣から推せば、時刻は夕暮頃と見てよい。するとわざと出かけた萩の花見ではない。妹がり行く野路の夕間暮、流石に秋が更けてか、露霜は繁く萩の花は散りかゝる景氣に打たれて、その端的の感慨を歌つたのである。諸註、今を既に夜中であるやうに心得て、初二句を單に修飾の詞とし、「よしやこの夜は更けぬとも露霜に濡れつゝ妹がり行かむの意」と釋したのはいかゞと思ふ。これは結句の「ふくとも」をふけぬともと同意に速斷した誤である。この差別をよく吟味するがよい。

色澤情韻俱に高く、語古格古高古の妙は、上の詠者不詳の歌中の「さよ中と夜は更けぬらし」の什と相拮抗する。ことわりや、これも萬葉集卷十の、

秋萩のさきちる野べの夕露にぬれつゝきませ夜は更けぬとも

を表裏に取り成して、潤飾したものである。然し原作よりは更に一頭地を抽んでてゐるのは手柄である。

秋の野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくもの絲すぢ　是貞のみこの家の歌合によめる　文屋あさやす

樣 ○玉なれや　玉にあればやの意。○絲すぢ　絲といふに同じい。

大意 この秋の野に置く白露は、恰も玉と見える、あゝいかにも玉であるかして、まことの數珠のやうに繋ぎかける事よ、蜘蛛の絲筋が。

評 露を玉に喩へ、これを絲に貫くといふ趣向は、上にもしば〳〵見え、この作者また、

しら露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

とも詠んで、往時玉といふ物が、平生盛んに取り馴らされて、いかに珍重されたかが知られる。おなじ比喩でも玉の如しと直喩にいはず、「玉なれや」と隱喩を用ひた爲に、蜘蛛の絲の貫きかけるのがさも自然に聞える。萬葉集卷八、

さを鹿の萩にぬきおける露の白玉
おふさはに誰れの人かも手にまかむちふ

を藍本として、鹿と萩との代りに蜘蛛の絲筋を使つたのは、却つて平凡の詩境となつた。

二句、新撰萬葉にこりたる露は、四句、六帖につらぬきとむるとある。優ならしめようとて、入選の際改めたものか。けれどもこりたるの方、露の繁きさまを形容し得て、いさゝか勝つてゐるやうに思はれる。つらぬきとむるよりは本文の方が無論よろしい。

題しらず

名にめでてをれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな　僧正遍昭

樣 ○名にめでて　名に心がとまつての意。「めで」は愛するの意。○をれる　折りてあるの約。一本おれるとあるに據つて、宣長が馬より下りた意に解したのは、語格違ひを忘れたものである。○女郎花　をみなへしと訓む。秋草の名。○おちにき　操を立てあへぬにいふ。僧徒の穢行あるを墮落といふに通はせてある。○な　禁止の辭。

大意 お前の若い女といふ名に愛でて、折つておいただけの事ぞ、これや女郎花よ、必ず拙僧が女に手を掛けて墮落してしまつたなど、人に噂して呉れるなよ。

評 女郎花の名に緣り擬人して、「語るな」と誡めたので、饒舌な艶妻の狀態が現はれて、甚だ面白い趣向である。所謂「歌のさまは得たれど誠少なき」滑稽は、この僧正の擅場である。後世蜀山人が、

女郎花口のさが野にたつた今僧正さんがおちなさんした

とやつたのは、よくこの意を得て翻案したものである。又この歌の詞書遍昭集には、「さう〳〵しく侍りしかば、馬に乘りて物にまかりし道に、女郎花の見えしを、及びて折りし程に、馬より落ちて伏しながら」とある。これに據つて、この集の序註には、「嵯峨野にて馬より落ちてよめる」とあるは「おちにき」に墮落の意と落馬の意とをかけた事になるが、餘にふざけ過ぎて、實際に疎い。遍昭集は素より後人の撰だから、恐らくは好事者の杜撰であらう。後拾遺集に「法師の扇を落して侍りけるを返す」とて、和泉式部、

はかなくも忘られにける扇かなおちたりけりと人もこそ見れ

とあるは、今の證左となりさうだが、それは俳諧の部に入れてある位で、この歌は律せられない。されば詞書に「題しらず」とあるまゝで說き得る範圍內で釋するのを妥當とする。さて奈良朝歌人は女郎花をその名稱に因んで詠みもしたが、かうまで擬人に巧む事はなかつた。それはこの作者の時代から始まつたものである。この集が巧緻の點に於いて、萬葉集より一層進步した一證と見られる。けれど爾來女郎花の歌とさへいへば、必ず譬喩と擬人とを常套とし、陳々相倚り腐々相累り、浮華厭ふべく、死氣楮表に滿ちてゐる。つぎ〳〵の歌人は敏行といひ、貫之、躬恒といひ、貞文といひ、いづれも豪傑の士であるのに、一首も彼れ女郎花の眞趣を直叙したるものゝないのは、傍痛いことである。

僧正遍昭がもとに、奈良へまかりける時に、男山にてをみなへしを見てよめる　ふるのいまみち

女郎花憂しと見つゝぞ行きすぐる男山にし立てりとおもへば

釋 ○僧正遍昭がもと云々　遍昭の住所へと志して、奈良へ赴く時、男山を過ぎて、女郎花を見て詠んだ歌との意。○男山　山城國久世郡石淸水八幡宮のある山。雄德山とも書く。淸和帝の貞觀元年豊前の宇佐より勸請して祀る。○男山にし立てり　「し」は强辭、「立てり」は立ちてありの約。

大意 あの優しい女郎花といふ女が、一人でゐるならば語らはうとも思ふが、男といふ男山にサ立つてゐると思へば、自分には靡くまいから、彼れ女郎花を憂き事よと餘所に見ながらサ、通り過ぎるわ。

評 例の擬人して、女郎花に男山を對照せしめ、わが語らひ得ぬが遺憾だといふ。要は見附け物の一寸をかしいだけである。實感の歌ではない。諸註、男の中に立てゐいたづら女にて、苦々しと見つゝ行き過ぐるの意としたのは、三句及び下句を輕く見過した結果であらう。

遍昭が奈良に居たことは、この卷の終の「里はあれて云々」の詞書に據ると、その母の家が奈良附近にあつたらしいから、遍昭も時折逗留して居たと想はれる。その子の素性が石上の良因院に住してゐたことも、何か所緣がありさうである。石上は夏部の素性の歌の詞書に、「奈良の石上寺」とあるので、當時奈良の一部と見られてゐた事は明らかである。作者の布留今道は、元來大和の布留の里人で、（雜下、日の光藪しわかねば云々の歌の詞書を參照）今は仕官して都住居をしてゐる。たま〳〵遍昭が奈良に居られる頃、歸省かたゞ〳〵訪問を兼ねての旅行の途次、淀の渡をして男山にかゝり、そこに女郎花を見たのである。

是貞のみこの家の歌合の歌　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

釋 ○名をむつましみ　名の懷かしく親しく思はれるをいふ。「み」は例のサニともクテとも譯する辭。○旅ならなくに　旅でもないのに恰も旅のやうにの意。こゝの旅は眞の旅行の意である。

大意 女郎花の女といふ名がサ、格別睦まじさに、うか〳〵遊び暮して、今宵は旅ではないのに旅めいて、この秋の野に一宿しさうだと、女郎花を賞翫する意を誇張したのは、春歌下、

秋の野に泊りはしさうな。

評 當時行旅の際は野臥山臥が通例であつた。今はその旅ではないが、女といふ稱呼が氣に入つたので、この秋の野に一宿しさうだと、女郎花を賞翫する意を誇張したのは、春歌下、

いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らずば千代もへぬべし

の筆法と同じい。それを季吟、宣長、景樹が、「同じくは秋の野に宿るべし、女郎花の名の睦じさに、旅にて寐るやうにはあらず」の意と解いたのは、結句を誤解して、遂に全體の意を謬つたのである。この歌宗于集にもあるが、かの集は後人の撰だから信憑し難い。

題しらず

女郎花多かる野べにやどりせばあやなくあだの名をや立ちなむ

をのゝよしき

釋 ○あやなく　わけもなく、詰らなくなどの意に近い。文無(アヤナク)の義。○あだ　移り氣で當(アテ)にならぬをいふ。空の義。○名をや　名やといふに同じい。名は評判の意。「を」は歎辭、「や」は疑辭。

大意　女郎花の多くある野原に泊りもするならば、眞實の女に逢つて寐たのでもないのに、わけもなく仇々しいといふ名が立つであらうか。

評　それ故泊りたいが見合はせるの餘意がある。實は秋の野に遊び暮して、いざ歸らうとする段になつて、花を見捨てゝ歸る心淺さを嘲られまいとして、花故浮名の立つのが迷惑なやうに假託して、口舌の間に瞞過しようと試みたのが面白いのである。以上はこの歌を表面から見た一應の解說である。もし比喩の作として見ると、景樹が「女多きあたりに宿るべき事ありつるやうの時、准へて詠めりしと見ゆ」といつたやうな一說が生ずる。作者美材は野相公篁の孫で、寬平中に進士に及第し、延喜二年にまだ壯年で歿した人である。名家の門葉といひ、才學といひ、年配といひ、如何にも婦人社會に歡迎されさうな人物だから、ある御簾の前などで、そんな女郎花どもに惡る留めされて、この歌を詠み捨てにして逃げ退いた事とも想はれる。

二句、新撰萬葉に「匂へる野べに」、結句、新撰和歌に「名をや流さむ」とある。

朱雀院のをみなへしあはせに、よみて奉りける

左のおほいきさうち君

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれに寄すらむ

釋 ○朱雀院　朱雀院は亭子院(テイジヰン)ともいふ。累代上皇の御所で、三條の南、朱雀の西四町、四條の北、西坊城の東にあつた。この集の頃には、宇多上皇がお住ひであつたから、こゝの朱雀院は宇多上皇をさしたのである。○をみなへしあはせ　女郎花を洲濱などに飾り立てゝ、歌を添へて左右に番へて、勝負を競ふ遊戲である。この類、菊合、撫子合、前栽合、菖蒲合など、種類が多い。○心ひとつ　一心といふに近い。單に心、或は二つなき心と解した說もあるがわるい。

大意　あの女郎花の女は、秋の野の風にあちへこちへと打ち靡いて、心の定まらぬやうに見えるが、そも〳〵まことの一心を、誰れに寄せるのであらうぞ。

評　彼れが風次第に彼方此方にくねるを見て、その節操を女のうへで疑つたのを趣向とする。入らぬ心配のやうだが、作者が既にその女郎花に心を寄せてゐるものとすれば、その心配は當然である。それも或は浮氣な女のたよりなさを擬へたのかも知れない。輕薄な調子である。作者は時平の左大臣で、當時男盛であつたことを思ふと、何だか意味がありさうにもある。諸註、三句を一方にのみ打ち靡く意に解いたのは粗鹵。

秋ならで逢ふことかたき女郎花あまの川原に生ひぬものゆゑ　藤原定方朝臣

釋 ○秋ならで　秋にあらずしてはの意。○逢ふことかたき女郎花　逢ひ難きをみなといふに、女郎花をかけた。○生ひぬものゆゑ　「ぬ」は打消の助動詞。「ものゆゑ」は早く解すれば物ながらの意。

大意 あの女郎花は何故か、秋でなくては逢ふ事のむづかしい女である事よ、天の川の河原に生えもせぬもの故、何時でも逢はれさうなものを、棚機同前にサ。

評 秋になれば、二星相逢ふ七夕の典故に據つて、自分と女郎花との交會の、餘に二星の境遇に似たことを訝つた。「天の河原におひぬものゆゑ」頗る巧語言である。

結句、一本にたゝぬ物からとある。

たがあきにあらぬものゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ　つらゆき

釋 ○たがあきに　誰が飽くといふに、秋をかけた。○なぞ　何ぞの意。この語から轉つて、などが出來た。○まだき　まだの意。○移ろふ　色の變るに、心の變るを含めた。移るの延言。

大意 誰か飽きたといふ秋でもないもの故に、移ろふにも及ばぬのに、女郎花はどうした事ぞ、あのやうに色に出て、早くも自身の方から移ろふのであらう。

評 衰へ方の女郎花を見て詠んだ。人が飽きもせぬうちに、もう向で變つてしまう、さて〳〵女は移り氣なものだなあといふ意の譬喩である。歌はこずんで、叙述も明快でない。

二句、六帖にあらぬものからとある。

妻こふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのが住む野の花と知らずや　みつね

釋 ○おのが　己れがの意で、鹿自身をさす。○知らずや　「や」は疑辭。

大意 妻を戀ひ慕ふ鹿がサ、頻にあれ鳴くわ、えゝ、鈍な奴よ、女といふ稱の花は、お前が住む野に在る花だとは知らぬのかい。

評 詠者が勝手に女郎花の名に緣つて、それを鹿の妻に取り成して、鹿に小言をくれたその痴想に、面白味をもつ。

結句、躬恒集に花にあらずやとあるは、調がおくれてゐる。

○

女郎花ふき過ぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ

大意 女郎花を吹き越して來る秋の風は、目にはそれと見えはせぬが、香がサ著しい、それで女郎花を吹き過ぎて來たとは知られる。

評 女に逢つて來た男の、その女の移り香の高いのを聯想したのだらう。下句理窟張つて面白くない。「目には見えねど」はいひ過ぎで無用である。「こそ」の用法も正格ではない。試に引き直すと目にこそ見えね香はしるくしてなどいふがよからう。春上に、この作者が、

春の夜の闇はあやなし梅のはないろこそ見えね香やはかくるゝ

と詠んだのと、なまじひに着想の同一であるだけ、いよ〳〵飽き足らぬ心地がする。

四句、六帖に目には見えずてとあるは優つてゐる。新撰萬葉に、二三の句行き過ぎてくる秋風のとあるは劣つてゐる。

人の見ることやくるしきをみなへし秋霧にのみたち隠るらむ　たゞみね

釋 ○たち隠る　「たち」は接頭語。

大意 人の見る事が迷惑なのか、それ故にあのやうに女郎花の女は、とかく秋の霧にばかり隠れるのであらう。

評 嬌羞人を怕れて、動もすれば物に蔭らふは、女の通性であるばかりか、殊に當時の婦人社會の慣習を知ると、この歌の痛切さがわかる。王朝時代の上中流の婦人は、情的關係以外では、知らぬ男否知合でも、絶對に顔を見せない。姿も隠してゐる。御簾越、几帳越、即ち物越で男には對面する。出這入には扇で顔を蔽ふ。そこで秋は霧深くして野草をもおほふを、女郎花の方より羞かしさに、心あつて隠れるものゝやうに、反對に描寫したのを一ふしとする。

新撰萬葉に、初二句君に見えむ事やゆゝしき、四句霧のまがきにとある。六帖も、四句は新撰と同じい。

○

ひとりのみながむるよりは女郎花わが住む宿に植ゑて見ましを

釋 ○ひとり　獨身でゐるをいふ。○ながむる　物思しつゝ見詰むるをいふ。

大意 獨身で女戀しけに物思をして居るよりは、寧ろ女といふ名の女郎花を、自分の住む宿に移し植ゑて見て、心を慰めようものを、今までそこに心つかずに物思してゐたのは愚だつたよ。

評 はかない物種につけても心を遣らうとする、輾轉反側の情が哀れである。諸家、後撰集に、

わが宿に植ゑてだに見む女郎花人はしたなき秋の野よりは

を類歌として、初二句を女郎花が獨詠むる意と解した契沖の說に據つたのは、結句への折合の妥貼でないことを忘れたものである。且初二句の語意を誤解してゐる。却つて奥義抄等の舊說の方が可い。「ひとりながむる」といふ語は、源氏などにも見えて、獨身者の煩悶を意味する時代語である。

物へまかりけるに、人の家に女郎花うゑたりけるを見てよめる　兼覽王

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば

釋 ○物へまかりけるに　或所へ往つたのにの意。「もの」はその事物を顯はさず、弘くさしていふ語。○うしろ

めたく　不安心な意。氣懸かり。

大意　あの女郎花の女は、さても〳〵不安心に思はれる事よ、その故はこの荒れてある宿に、後見する者もなしに、只一人立つて居ればサ。

評　軒は朽ち簀子は壞れて、傾きかゝつて寢殿に、ほんの身を隱すだけの屏風几帳を、昔の名殘にしつらつて、親も乳母立つ者も同胞も仕女もない少女只一人住んでるあたり、庭は野のやうに荒れはてゝ、蓬葎さては女郎花の自生してあるのを見て、この女主人公を女郎花に譬喩したものであらう。空穗物語の俊蔭の女の獨住の條を思ひ合はせると、いよ〳〵このうしろめたさが痛切に感ぜられよう。

寛平の御時、藏人所のをのこども、嵯峨野に花見むとてまかりたりける時、歸るとて、みな歌よみけるついでによめる

平のさだふん

花にあかでなに歸るらむ女郎花多かる野べに寢なましものを

釋　○藏人所のをのこども　藏人所は類聚國史に、「弘仁元年三月十日始置二藏人所一令下侍二殿上一掌中機密文書及諸訴上」とあつて、頭は四位、藏人は五六位、その下に非藏人、出納、小舍人、雜色所衆、瀧口などの職がある。「をのこども」はこの下輩の人々をさす、うへのをのことは違ふ。混じてはいけない。○嵯峨野　今の京都の西北の嵯峨村。○なに　口語のなんでの意。

大意　見事な花を、十分に飽くまで見ないで、人々は何で歸るのであらう。自分はこの女郎花といふ女の多くある野邊に、今宵は寢ようと思ふものを。

評　初二句は人々の行動について訝りもどき、三句以下自分の欲望を陳べた。遊行などの歸さは、通例の場合日暮になる。この歌も時刻は日暮であることを、まづ記憶しなければならぬ。さて日は暮れても尙この野に遊んで居ようの意を、「寢なましものを」と、女に心の惹かされた趣に取り成して興じたものである。この打ち解けた輕い冗談には、その若々しい好色者であることを思はせられる。作者は世に平仲（ヘイチウ）と呼ばれた有名な好色家である。この構想が人柄相應なのも可笑しい。

是貞のみこの家の歌合の歌　としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけし藤ばかまくる秋毎に野べをにほはす

釋　○きて　來ての意。○ぬぎかけ　脫ぎ掛けの意。「掛け」は衣桁などに掛けるのでいふ。○藤ばかま　宿根草で、莖圓く節長く葉は對生して長く、高さ三四尺又は六七尺もあり、夏秋の際枝の末毎に淡紫色の細小花集り開く、葉に香氣が多い。○にほはす　薫らするの意。

大意　この藤袴は、以前どんな人が着馴して、此處に脫ぎ掛けて置いたか、毎年毎年秋の來る度毎に、その移り香がこの野邊を匂はすわ。

評　かう毎年も匂ふは、必ず尋常の袴ではあるまい、名香をよく炷きしめた、いともあてなる人の袴だらうの餘意がある。往古上流社會の好んで薫物した事は、既に春上「色よりも香こそあはれと思ほゆれ云々」の條で說明しておいた如くである。藤袴の名稱から、袴の上で仕立た譬喩、巧ではあるが眞摯でない。以下の二首また浮

華である。

四句、新撰萬葉に秋くる毎にとある。

藤袴をよみて、人につかはしける　つらゆき

やどりせし人のかたみか藤袴わすられがたき香ににほひつゝ

釋 ○かたみか　「かたみ」は記念の物をいふ。「か」は疑辭。

大意 この藤袴は先達て此方にお泊りなされた貴方の、形見に脱ぎ置がれたのかしら、とかく今に忘られにくい貴方の移り香に匂ひ〳〵して、貴方の事が懐かしく思はれますよ。

評 詞書の「人」を朋友と見る説と、情人と見る説とがある。この時代までは、男同志でも友情の切な間柄では、いたく思慕する趣を歌つてゐるから、いづれにしてもその意は適切であらう。袴の香は例の意匠である。又思ふに實際はこの歌を藤袴に付けて贈つたものではあるまいか。詞書にさうことわつてないのは、書信の往復を始めて物の獻酬には、物の枝に附けるのが、當時一般の常習であつたからであらう。カ音の多さが耳立つて聞える。

ふぢばかまをよめる　そせい

ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけしふぢ袴ぞも

釋 ○ぬし　持主。○知らぬ　知られぬの意。○ぞも　「ぞ」は指定の辭。「も」は歎辭。

大意 主の分らぬよい香がサ、高く匂つてゐるわ、かう匂ふ藤袴は、この秋の野に誰れが脱ぎかけて置いた袴であるぞよ。

評 往古はその人の好みによつて、甲は梅花がよいとか、乙は黒方（クロバウ）が好きだとかいふ具合に、常用の薫物の加減を試みたものだから、さつと薫るや否や、大やう誰れだらう位の見當がつく。處で今は藤袴の香なので、「知らぬ」のであるのを、「誰がぬぎかけし」と袴の上で仕立てあげた。前二首と同趣で、疑問體の形式まで同一である。どれが先出か不明であるが、年輩からいへば、貫之は中での後輩で、敏行が先輩である。

題しらず　平貞文

今よりはうゑてだに見じ花薄穂にいづる秋はわびしかりけり

釋 ○花薄穂にいづる　薄の穂を成すをいふ。これを又尾花ともいふ。一種の薄の名とするは當らない。

大意 もうこれからは、薄は庭などに植ゑてさへも見まいと思ふ。なぜといふに、あのやうに薄が穂に出て哀れな景色の見える秋は、心細くいやであつたわい。

評 古は秋草を植ゑることが盛に行はれ、薄も移植されたことは、哀傷部にも「君がうゑし一村薄」とあるのでも知られる。春上に「花の木は今はほりうゑじ」とあると同趣で、面白からうと思つた豫想が裏切られて、眼前の秋色の、徒に斷腸を促すに過ぎぬのを打ち歎いてゐる。二句の「だに」に古來異論がある。或は意義がないといひ、或は植ゑてまで見るべきでもないの意といふは、皆誤つてゐる。秋の野にわざ〳〵行つて見る事は勿論の事として、よく庭には植ゑる物だが、「今カラハ植エテサヘモ見マイ」といふのである。和歌九品に、下の中に

据るて、「事の心無下に知らぬにもあらず」と評してある。聲調は蒼涼で、その體に協つてゐる。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　ありはらの棟梁

秋の野の草のたもとかはな薄穂にいでてまねく袖と見ゆらむ

釋 ○たもと　袂は手本（タモト）、袖は衣手（ソデ）の義で、つまりは同一物である。差別していふ時は袖は全部をいひ、袂は手の當る一部をいふ。○穂にいでて　内にある事の外面に露顯する事をいふ。それに薄の穂を出すをかけた。

大意 花薄の穂は秋の野の惣體の草の袂であるか、否さうでもないのに、何でその花薄の穂に出て風に靡くのが、恰も人が色に出て戀しい人を招く袖のやうに見えるのであらう。

評 穂薄の風にゆらぐ樣子が、實に人が袖から手を出して招くのに似てゐることは、郊外で吾人のよく見る所である。「袂」は草の方につけていひ、「袖」は擬へた人の方でいつた。初二句の下、何故（○○○）にの語を補足して聞くべき格であるが、意詞やゝ晦澁の嫌があるやうである。

われのみやあはれと思はむきりぐ〜す鳴く夕蔭（ユフカゲ）のやまと撫子　素性法師

釋 ○のみや　「や」は疑辭。○あはれ　可怜の意で、身にしみて歎賞するをいふ。○夕蔭　夕日の傾いて未だ暮れ果てぬ間の物蔭をいふ。奈良時代からの語。○やまと撫子　唐（カラ）なでしこに對へた稱で、顯昭の註に「紅梅色にて花の裾さゝけて變り、秋の野に一筋〳〵ぞ咲きたる」とある。今の河原撫子のこと。

大意 他に來る人も無くて、自分ばかりが、あゝ美しいと思つて見よう事かまあ、この蟲の鳴く夕蔭に咲いた、あつたら撫子の花をサ。

評 すさまじい寂びた秋色の表現を主眼としてゐる。他に同情の友も無くて、形影の單なるのや、暗蟲の唧々たるのや、夕日絶え〳〵にさして物蔭の暗い入相時、大和撫子の物はかなげに咲いたのや、一つですら感哀を刺戟する材料でないのはない。ましてこれを湊合してゐるときては、溜つたものではない。風韻幽玄、聲調も各種の韻を平均に配し得て、極めて平靜である。佳作と稱へてよい。

舊註、初句の「や」を反動辭として、自分ばかりか誰れもあはれと思はぬ者はなからうの意に解し、諸家またこれに從つたのが多いのは、一番の吟味を缺くものである。

題しらず　よみ人しらず

緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける

大意 春萌え出た時は、只皆おなじ青い一色の草とばかり思つたが、春見たとは存外に、秋になつて見れば、このやうに色々の見事な花でサあつたわい。

評 春と秋とを對比し、又數多（ムムム）い事を「いろ〳〵」と轉義して、「ひとつ」に對照させ、且は種々の色彩ある事をも暗に響かせた。一首の組織を案ずると、上句と下句と全然聯對法を用ひて、主客反對の比較を取つたので、その變化の甚しいさまが顯れ、それを意外と驚いた情致が見える。叙述の手法は、全く一家の機軸を出してゐる。但意は襯密過ぎて、想像の餘地に乏しい。聲調は清脆である。後拾遺集に、

霜枯はひとつ草とぞなりにける千ぐさに見えし野べにはあらずや

とあるは、只これを歩襲したに過ぎない。

○

もゝ草の花の紐とくあきの野に思ひたはれむ人なとがめそ

構 ○もゝ草　數多の草をいふ。「もゝ」は百である。數字を以て多くの意を代表させた。○花の紐とく　花の開くをいふ。物の結目の紐を解けばその口の開くに譬へた語。○思ひたはれむ　思ひ戯れむの意。「たはれ」は淫るの意から出てゐる。

大意　この色々さまゞの草の花が、帶紐解いて亂れた面白い秋の野で、巫山戯て遊ばうと思ふ、それ故人は見ても見ぬ振して、怪しからぬ奴と咎め立てをして呉れるなよ。

評　「百草の花の紐解く」を、數多の女がうち解けて衣の紐を解き下けたのに擬へ、これを楔子として、遊ばむといふべき處を、「思ひたはれむ」と取り成したので、「人な咎めそ」の一句が、必然の聯想として寄つて來たのである。要するに秋草の咲き亂れた野邊に足がとまつて、頗る興に入つた趣を、比喩で述べたのである。修辭の技巧は認められるが、面白過ぎた憾がある。然し作者の目的はそこにある。

四句、六帖に思ひみだれむとある。

○

月草にころもはすらむ朝露にぬれてののちは移ろひぬとも

構 ○月草　今の螢草。その花早朝に開き晝萎び、碧色で採つて衣に摺るに善く染み着けば、着草といふ。月と書くは借字。又鴨頭草とも書く。露草と同一物。さてこの花の色は染み付き易く、又褪め易い。故に昔から月草には移ろふことを頻に歌はれてゐる。○すらむ　摺り附けむの意。

大意　このよい色の月草の花で、自分の着物は摺つて染めよう、よしこの朝の露に濡れた後には、忽に色が變つてしまうとも、そんな事は構はずにサ。

評　風格高古で、更に前二首の比でない。果して萬葉集卷七に既に見えて、寄草と題した譬喩歌であつた。例の誤選であらう。「朝露にぬれての後」は衣に摺りての後の意の轉義で、同語のさし合を避けた一手法である。元來この歌は、ともすれば氣の變り易い女を、色の移ろひ易い然し美しい月草に擬へ、とにかくあの女に一度契をかはして見よう、よし契をかはした後は心變りはするにしてもと、後の事はともあれ、刹那の享樂に醉ひたい希望で、理性と情熱との葛藤に、遂に情熱が勝を制した趣である。若い血の湧き立つた響が聞える。但この集では、比喩の意を見ず、單に月草の歌として收めたのではあるまいか。「朝」の一語が眼目である。月草の咲いた樣子も、露のおほい樣子も、これによつて活躍する。

さて上古染色法の發達しなかつた時代では、木草の花或は葉の汁を以て、直に染め着ける事、丁度小忌の摺衣のやうであつた。奈良朝時代は、支那との交通に由つて、大いに斯術の進歩を致したけれど、打ち解けた物古典的な物には、なほ摺衣もあつたとすると、萩や月草やの色よい草花が目に觸れゝば、摺つて見ようと思ひ寄るも常の事で、今考へるやうに單なる洒落氣や不自然ではない。

四句、萬葉集にはぬれてのちにはとある。おのづから意詞相協つて、且古調である。

仁和のみかど親王におはしましける時、布留の瀧御覽ぜむとておはしましける道に、遍昭が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて、おほん物がたりのついでに、よみて奉りける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

解 ○仁和のみかど云々　春歌上の「君が爲春の野いでて」のにおなじ詞書に、既に說明したから略する。「布留の瀧」は大和國山邊郡石上の布留にある瀧。布留川の上流。「遍昭が母の家」は遍昭は大納言良岑安世の男であるから、母は安世卿の室である。「庭を秋の野につくりて」はこの親王の御饗應の爲に、殊更に庭に秋草の花など植ゑて、秋の野の狀に作り成したのである。「おほん」は大御の音便。○里　人家ある處。○ふりにし　舊くなり果てた。○なれや　なればやの意。○まがき　垣と同じい。「ま」は美稱。○野ら　野のこと。「ら」は添辭で、夜ら、稀ら、淸らなどのらと同じい。

大意 京とは違つて里は荒れて、そのうへ住む人は舊臭く年寄つてしまひました宿のせゐかして、御覽の通り庭も籬も甚しく荒れ果てゝ、あれあのやうに、恰も秋の野らで御座いますわい。

評 むさくるしい處である上、萬事行き屆かぬが恐縮の至で御座いますの餘意がある。この歌は遍昭がその母に代つた作である。「里は荒れて」は、勿論寄興の戲言ではあるが、もと盛んであつた趣も見えるから、平安の京から布留へ行く途中とすると、遍昭が母の家は奈良の故京か、又はその附近と見ねばなるまい。桓武天皇の皇子大納言良岑安世卿の未亡人の家である以上は、いかにも造り磨かれた立派な住居と思はれるのに、「里は」「人は」と「は」文字を疊用して、力を籠めて侘びしけにいひ立て、「も」文字を疊用して、何處も見る影無く荒れたやうにいひ張つた水火の取り成し、例のこの作者の壇場であることは異論はないが、又一面に、この事實に反いた描寫は、明らかにそれが親王に對しての謙辭であり、內面的には敬虔の意が漂つてゐることを感ずる。時に取つての好辭令ではないか。質實ではないが、寄託の興が深く、含蓄の餘味も亦太だ饒い。又上句の「は」文字の相對、下句の「も」文字の相對に呼應して、全首の和諧暢達の素を成してゐる。

古今和歌集卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　　文屋朝康

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

釋 ○普通本には作者を文屋康秀とある。但古今六帖、及び秋の下卷の貫之筆（高野切）といふには、作者文屋朝康とある。朝康は康秀の子である。契沖の説に、「春歌上に、二條の后の東宮の御息所と申しける時、御前にて康秀が「かしらの雪」と詠みしは、貞觀十一年より後、天慶元年より前の事にて、五十餘の齢なるべし。さてこの是貞親王は、仁和の御門（光孝）の第二の皇子なれば、この歌合の頃康秀若し世にありとも、いと老い果てゝ、さる事には列るべくもあらず。こゝは次の歌と共に、朝康とこそありつらめ」とあるは當つてゐる。○からにつけて、よりてなどの意。○しをるれば　撓ひ折るゝこと。○うべ　成る程、尤もにもなどの意。諾ふの略で副詞。小倉百首にむべとあるは轉訛。○あらし　「し」は風又は息をいふ。故に荒い風は「あらし」である。

大意 山風が吹くによつて、それに揉み立てられて、秋の草や木があのやうに萎れるから、道理で山の風を物を荒すといふ名のあらしといふのであらう。

評 山風に秋の草木の萎れる實際の光景を基礎としての作ではあるが、「あらし」の秀句が著想の中心である爲に、畢竟口舌の巧に過ぎないので、詩趣は卽ち缺乏してゐる。公任の九品に、これを下品の上に置いて、「わづかに一ふしある歌なり」と評したのは允當である。又漢字の嵐の一字を拆いて、うべ山風を嵐と洒落れたのだといふ說がある。かやうの文字上の遊戲は、夙く支那に行はれ、又わが朝にも傳はつて、文人詩客の弄んだ例證が數多あるから、これも亦それに倣つて試みたものだらう。冬部「雪降れば木毎に花ぞ咲きにける云々」の歌の梅の字を拆いた例もある。さては國語の秀句と漢字の拆字との巧を兼ねた作で、雕蟲の技は驚くほど達者である。初句は新撰萬葉にうち吹くに、二句は六帖にはなべて草木の、この集の序註には野べの草木の、結句は新撰萬葉、及び貫之筆本にあらしてふらむとある。うち吹くには浮泛で力がない。なべては抽象的で妙でない。野べのは山には對照があるが、眞淵の「この歌には秋、といはまほしく、且ことも廣ければ」との論に從ふがよい。てふらむは、眞淵は「この集の頃の詞遣ひなり」といひ、景樹もこれに左袒したが、語調が翦くて奮はない。といふらむの字餘りの方が、初句及び四句の湿しい調に匹敵して、權衡が取れる。

○

草も木も色かはれどもわたつみの波の花にぞ秋なかりける

釋 ○これも康秀のではあるまい。六帖には朝康とある。○わたつみ　海をいふ。雜上「わたつみのかさしにさせる」の條參看。○波の花　風の爲に波の白く立つのを白い花に喩へていふ。

大意 世の中の草も木も、この秋といふ時節の爲には、うら枯れて色が變るけれども、あの海の波の花には、この節でも、色の變る秋といふ事が無かつたわい。

評 變ると變らぬとの對照で、詩境は平凡だが、修辭の巧はやゝ見られる。波を花に喩へるのは常套とはいへ、おのづから春といふ感じが浮いて、結句へ對應してゐる。又色の變らぬ事を、「秋なかりける」と轉義したのは露骨でない。かゝる文字三昧は、文琳父子が得意の處である。なほ思ふに、草木の色變るも波が花と立つも、皆秋吹く風の仕業だから、一首の上に秋風の風情がめぐつてゐる。卽ち陰に秋風が活躍してゐる。新撰萬葉に、初句草木みな、三句大海のとある。又六帖に、下句波の花こそ秋なかりけれとある。

秋の歌合しける時によめる　きのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風の音にや秋を聞きわたるらむ

釋 ○ときはの山　山城の名所といふ。常磐木のみ生えてゐる山故に付いた名だらう。

大意 秋になつても木の葉の色も變らず、いつも同じ綠の常磐の山は、ほか〳〵の山とは違つて、自分自身は秋のしるしもないが、この頃夏とは吹き變つた梢の風の音にサ、世間の秋を聞いてゐる事だらうか。

評 諸註「常磐の山は」の「は」文字を、にてはの意とし、其處に住んでゐる人のうへを想ひ遣つた歌のやうに解したのは、間違つてゐる。これは常磐山を擬人したのである。常磐の名義を基礎としての構想は甚だ面白くもないが、只この擬人に多少の趣がある。風の音が秋を知らせる所以は、秋上の敏行の「風の音にぞ驚かれぬる」の歌で、その趣が知られよう。

この歌再び拾遺集に入つて、大中臣能宣の歌になつてゐる。同集またこれと並んで能宣の、

紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれ鳴きてや秋をしるらむ

といふがある。案ずるに能宣の歌は淑望の作を換骨した事が明らかだから、後人が淑望作の原歌をその傍に書き入れて心覺えとしたのを、轉寫の際遂に本文に混入してしまつて、能宣の歌となつた事は疑ひもない。

題しらず

霧たちてかりぞ鳴くなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ

よみ人しらず

釋 ○片岡のあしたの原　片岡は大和國北葛城郡二上山の東方に横はつてゐる丘陵である。そのあたりを王子村大字王子といひ、片岡山達磨寺などある。その近傍の原野をあしたの原といふ。朝の原、芦田の原などと書く。

大意　霧が立つて雁がサあれ鳴くわ、この分では最早片岡の朝の原は、紅葉した事であらう。

評　嘗て片岡の朝の原の秋色を味つたことのある人の作だらう。八重立ち籠る霧、峰飛び越ゆる雁、取り集めた悲秋の景氣に感じては、曾遊の朝の原のしもと林の紅葉を、今やと聯想せざるを得ない。況や霧の立つは木の葉の色づくに關係がある。否たゞさう聯想したゞけではない。やがてその秋色にあこがれた、根强い熱心を見せてゐる。格調蒼古で、萬葉集中に置いても恥かしくない。あの時代の作には、この種の想像、語法、風體を具へた、

やたの野の淺茅いろ付くあらち山みねのあわ雪寒くふるらし

の類が隨分多い。されば自然陳套の嫌がないでもない。平安時代の歌人が巧緻の一局面を開いたのは、重にこれらの風調に對する反動である。

○

かみな月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なひの森

釋 ○かみな月　陰暦十月の異名。十月は神事が多いので、神の月と云つたのが轉じたのだとも、この月諸神出雲の大社に集ひ給ふによつて、神無月の意だとも、收穫の新穀にて酒を製する時期ゆゑ釀成月の略だとも、雷の收つてしまふ頃だから雷無月の意だともいふ。最後の說が簡易で一番穩當だらう。○かねて　前以ての意。○神なひの　大和國平群郡龍田村神南村。龍田川に沿うた三室山をまた神南備山といふ。森も其處にある。同郡立田村字立野の龍田神社の南方とする說は采らない。

大意　今は秋で、木の葉を染める筈の、十月の時雨さへもまだ降らぬのに、はや前以て色付いたこの神なひの森よ。

評　はて不思議なの餘意がある。この歌古來の疑問になつてゐる。それは秋での歌だから、初二句は神無月の時雨と解しないと意が聞えない。意釋は假にこれに從つておいた。景樹はこれを難じて「の」の辭の入るべき語勢にもあらず。後をかけたる意と見むも强ひたるが如し。況や時雨を必ず冬季十月の物とするは後撰集に、

神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける

の一詠出でてより後の事にて、この時代までは重に秋季に詠み合はせて、『秋の時雨と身ぞふりにける』『秋は時雨に袖をかし』など、この集中にも見えたり」と云つたのは當つてゐる。故に神無月の時雨と豫定することは、時代觀念を餘所にしたことになる。依つて思ふに、この初句もとはなが月のとあつたのではあるまいか。那の

假字は神の字の草體に似、可の假字と奈の假字とは、草略してないがしろに書く時は又似ないこともないから、見誤つて神奈月のと讀んだが、さては一字餘るので、の文字を略き捨てゝ、「神無月時雨も」とは讀み連ねたものか。秋の時は、長月の時雨と詠み、冬の時は、神無月時雨の雨と詠むは、この時代までの恒例だから、

なが月のしぐれもいまだふらなくにかねてうつろふ神なひの森

とすると、意味貫徹して、措辭も妥貼になる。こはこれ試にいつたまでゝある。なほ大方の是正を俟つ。貫之自筆本といふものには、(俊頼の元永本にも)

わが門のわさ田もいまだ刈りあげぬにまだきもみづる神なひの森

の歌があつて神無月の歌がない。このわが門の歌、また六帖の森の題に出て、三句刈りあげねばとあり、下句は本文のと同じである。眞淵も景樹もこれを採つて、本文を排斥してゐる。貫之自筆本といふ物が果してどこまで信用のなるものか。「彼の本は貫之のにはあるまじとも思はるれど、近き世の物にはあらず」と、眞淵自身も既にいつて居るとはいへ、一本として參考に供すべき價値ある事は、又いふまでもない。

○

千早ぶる神なひ山のもみぢ葉におもひはかけじ移ろふものを

釋 ○千早ぶる　神にかゝる枕詞。委しくは下の「千早ぶる神代もきかず立田川云々」の歌の條に述べる。○神なひ山　神なひの森と同處としても、高市郡の神南備山としても通ずる。上の「神無月時雨もいまだ云々」の條を參看。○移ろふ　こゝは散る意。

大意　神無備山の紅葉に、あまり深く執心しまいぞ、折角思をかけたとて、つい散つてしまふものをサ。

評　「思は懸けじ」といふのは、既に深く思を懸けてゐる人の詞である。「移ろふものを」は例の無常觀で、「色葉匂へど散りぬるを」と同一規であるが、感情を強ひて理性で抑へようと計つてゐる。かう深く思索したことは、これ決して普通單調の歌でないことを思はせる。蓋し譬喩である。紅葉を心仇なる人に比して、そんな移ろひ易い者に思ひ掛けるは愚の頂上だから、最早思ふまいと、口では立派にいひ切りながら、心にはやはり思はれるのを、何ともしかねて懊惱してゐる。歌主は全く戀の奴である。辭藻は優美で情韻が饒い。

貞觀の御時、綾綺殿の前に、梅の木ありける、西のかたにさせりける枝のもみぢそめたりけるを、うへにさぶらふをのこどものよみけるついでに詠める　藤原かちおむ

同じえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

釋 ○貞觀の御時　清和帝の御世。貞觀はその御代の年號。「綾綺殿」は禁中の御殿の名で、宣耀殿の北隣景殿の南にある。清和帝はこゝ及び弘徽殿をおましとなされた事が三代實錄に見える。貫之自筆本といふには、弘徽殿とある。「ついでによめる」は一寸考慮を要する句である。蓋し歌詠むとて集合したのは、「上にさぶらふをのこ共」即ち殿上人である。作者勝臣は地下人で、肩を竝べて列座する資格のない者であるけれども、殿上人達の歌詠まるゝそのついでに詠み出したといふのである。○同じえを　「え」は枝。「を」はなるをの意。○わきて取り分けて。

大意　東西南北共に、同じ一本の木の枝であるものを、西の方へさした枝が、取り分けあのやうに早く色付くのは、どうした事と思つたが、それはその筈、西の方がサ、秋の來る取付であつたわい。

評　居並んだ程の殿上人は、梅の紅葉を詠んだであらうが、勝臣ひとり西の一字に着目して、易に坤の卦を西として秋に配する典故があるので、それを捉へ來つた「西こそ秋のはじめ」の警策は、いたく物めでする大宮人等の喝采を博したであらう。かやうな歌は、その折柄の面白さにもてはやされてこそ出榮えはするが、程が經つと感が淺くて、纔に一ふしありといふに止まる。

石山へまうでける時、おとは山の紅葉を見てよめる　つらゆき

秋風のふきにし日よりおとはやま峰の木ずゑも色づきにけり

釋　○石山へ云々　近江國石山觀音に參詣するには、音羽山の南麓、久々目路（今の逢谷趨）を越えて、山科から逢坂に出る。○おとはやま　洛東東山の一峯で、清水寺のある山。

大意　秋風の吹き初めたその日からして、風の音が立つたその音羽山を、今日來て見れば、峰の梢も思の外色が付いて來たわい。

評　「吹きにし」と過去にいつたので、上下のうち合が面白くなくなる。又實際の事情にも協はない。そこで眞淵が、「音羽山に風の音を含めたり。後撰集に、

松蟲のはつ聲さそふ秋風はおとと羽山より吹きそめにけり

も、山の名の音を物の音にいひなせり」と云つた說を采つて、糊塗しておくより外に仕方がない。すると初二句は有心の序詞の如き結果になる。秋上の棚機の歌の、「秋風の吹きにし日より久方の」といふに比較して、語に分寸のある事を心得られたい。

秋風の日にけに吹けばみづぐきの岡の木の葉も色づきにけり　（萬葉卷十）

を蹈襲して、しかも不調の嫌がある。

是貞のみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉を千ぢに染むらむ

釋　○ひとつを　一つなるをの意。

大意　露の色は皆同じ一つ色であるものを、それにまあどのやうにして、秋の木の葉をあのやうに、いろ〳〵に染める事であらうぞ。

評　白露一たび下るや、黃綠參差し、紅紫間錯して、千葉の秋は萬段の錦を舖く。その靈怪な手腕には、驚かざるを得ない。特に染色の業に、深い趣味と鑑識とをもつた當時の人士では、かうした染色上の着想は、別に珍しくもない。只反對の事相を湊合して驚訝したことが、一寸した機智を感じさせる。「ひとつ」は同じ、「ちぢ」は多數の轉義に、いよ〳〵適切に明確に、兩者の相反したことを說明する。この「ひとつ」と「ちぢ」との對照は、大江千里も、「月見れば云々」の歌に用ひて、しかもこれと同時の詠だから妙だ。但想も修辭も、千里のに一籌を輸してゐる。聲調は悲涼である。後に大中臣頼基が、

白露はわきておかじを秋の山やまのもみぢの薄くこからむ

と詠んだのはこの蹈襲で、又はるかに拙い。

三句、新撰和歌にいかなればとあるは劣つてゐる。又四句新撰萬葉、及び六帖に秋の山べをとある。「ちゞ」といふ觀念にはふさはしいやうだが、染色の技工に着して見ると、實際の加工材料たる「木の葉」を點出した方が面白い。

秋のよの露をば露とおきながら雁のなみだや野べを染むらむ　壬生忠岑

大意　あの白い露サ、野邊の草木を染めるのは、訝しいと思つて居たが、あれは全く露は露としてそのまゝ置いて、別に雁の鳴いてこぼす涙が降りかゝつて、あの野邊を一面に染めるのであらうか。

評　雁の涙は、例の啼くからの聯想で、珍しくもないが、それが野邊の草木を染めると見たのは新案である。無情の露、有情の涙、當然結果に逕庭のある筈、況や節は秋、時は夜、この物悲しいをりを啼く雁の聲は、聞くからして、愁人の腸を斷つものである。野邊の草木のそれによつて染まる位は、勿論と感じたのである。まづ相當の感哀ある作と見られる。但雁の涙を血涙にまで取り成して、野邊を染めたと釋くは、白露に近い對映はあるが、却つて入ほがであらう。

三句、家集に、おもひおきてとあるは、更に義を成さない。

題しらず

秋の露いろ〳〵ことにおけばこそ山の木の葉の千種なるらめ　よみ人しらず

釋　○いろ〳〵ことに　色々殊にか。傳貫之筆のも本文と同じだが、古筆ながらなほ信じ難い。新撰萬葉に、色殊々丹とある。その方が調つてゐる。それに從はう。「こと〴〵に」は別々の意。

大意　この頃の秋の露は、色がそれ〴〵違つて置くからこそ、あのやうに山の木の葉が、いく色にもなるのであらう。

評　さもなくては、かう千種となるべき筈がないとの餘意がある。全山五彩燦爛たる目前の實況に幻化せられて、却つて露の各色あるやうに、没常識の想像を試みた。この稚氣痴態卽ち詩である。

寛平歌合に、二句色のことゞ〴〵、四句山も紅葉もとあり、新撰萬葉には、四句山の紅葉もとある。

もる山のほとりにてよめる　つらゆき

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

釋　○家集には、「竹生島へまうづる時、もる山といふ所にて」とある。○もる山　今守山といふ。近江國志賀郡にある。いたく洩るといひかけた。

大意　白露も時雨も、甚しく洩るこの守山の木立は、流石に外の山とは違つて、梢ばかりか下葉まで、殘らず色付いた事わい。

評　都を出て、多くの山々を見つ越えつして、始めて守山に來て、紅葉の盛りのに出會ひ、その然る所以を訝し

んだ事から、端なく地名に想ひ到つて、露時雨のいたく洩る山である事を、了得したのである。三句の「は」の辭に力があつて、差別の意に聞えるので、他の山の梢は、いまだ下葉までは色付きあへぬ頃である事が知られる。又上に「いたく」と置き、下に「殘らず」と受けた詞の掛け合、この種の修辭は、後世、藤原爲家が祖述したもので、夙く二條家の家風の端を啓いたといはれよう。地名を構想の基礎に置いてゐるが、なほ實感を失はない。定家が「詞優しくことわり明らかなる歌」と評したのは、さもと思はれるが、この集の秀歌十首の一に推したのは、蓋し過褒である。

結句、家集、六帖ともに、もみぢしにけりとある。又六帖には、作者を忠岑とあるけれども、到底忠岑の企及し得る風體でない。貫之と忠岑とを對比すると、おなじ巧を弄しても、おのづから人天の懸隔がある。

秋の歌とてよめる

雨ふれどつゆも洩らじをかさとりの山はいかでかもみぢそめけむ　ありはらの元方

釋 ○つゆも　少しも。○かさとりの山　山城國宇治郡笠取村の山をいふ。醍醐の近くである。さて笠を冠り、傘をさすを古へはとるといつたので、山の名にその意をいひかけてある。

大意 かさとり山は、雨を防ぐ笠をとるといふ名だから、いくら雨が降つても、露ほども洩るまいと思ふものを、どういふ事でこの山は、あのやうに紅葉しそめた事であらうぞ。

評 露や時雨には、草や木葉の變色するものとしての作である。「雨降れど」は現に雨が降つての上でいふ詞だから、二句の「つゆも」に、その雨の餘滴の露も聯想される。「かさとり」の緣語仕立、一寸をかしさうだが、詩味は則ち缺乏してゐる。寧ろ誹諧歌として見る方が適當らしい。

神の社のあたりをまかりける時に、齋垣の内のもみぢを見てよめる　つらゆき

ちはやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへず移ろひにけり

釋 ○いがき　齋垣（イミガキ）の略。忌垣に同じい。社の周圍の玉垣をいふ。すべての穢らひをこの内には許さぬ故の名である。○葛　國栖葛（クズカヅラ）の略で、吉野の國栖の產を最とするより呼んだ稱か。宿根の蔓草で、山野に生ずる。蔓甚だ強く、葛布を製し、又根で葛粉を製する。○葛も　この「も」はさへもの意。○あへず　敢へずの意で、立ち合ひ難いこと。夙くいへば、堪へずの意となる。

大意 滅多な者は寄せつけぬ筈の、神社の忌垣に這ふ葛でさへも、すべての草木の色變る秋の侵すには、こたへ切れず、色が意外に變つたわい。

評 秋色の到らぬ隈もない趣が、神の忌垣を借りて映し出された。今日、神社の境内を公園地のやうに心得てゐる人の頭では、「秋にはあへず移ろひにけり」の詠歎の味ひが、よくは聽き取れまいと思ふ。よく忌垣のうちを、絕對神聖な場處と觀じてゐた古人の立場になつて、吟詠して見たら、作者の歌つた深い詠懷に共鳴が出來よう。萬葉卷十に、

はふり子がいはふ社のもみぢ葉もしめ繩こえて散るとふものを

これと表裏してゐる着想だが、あれは比喩歌で、更に異なつた內容をもつてゐるから、全く別趣の歌である。

體格風調ともにこの作者の特長が出て神韻が永い。しかも細く乾びた趣は、秋の歌として甚だふさはしい。

是貞のみこの家の歌合によめる　たゞみね

雨ふればかさとり山のもみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞ照る

釋 ○雨ふれば　有心の序で、雨降れば笠を執るといふに、笠取山をかけた。

大意 雨が降れば笠を執る、その笠取山の紅葉は、山の名こそ笠とりであるが、そのかひもなく、雨に十分濡れでもしたか、梢ばかりか往來の人の袖までがサ、色が耀いて照るわ。

評 「照る」の一語、「雨ふれば」と表裏して、對照の間、甚だ不思議なる事よの餘意を生ずる。上の元方の、「雨降れどつゆも洩らじを云々」に、更に一層の潤色を加へ、婉曲味を増したものである。「ゆきかふ人の袖さへぞ照る」と、眼前の花やかな光景を叙して、初二句に對する矛盾の意を強めた。三句、新撰萬葉に秋の色はとある。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

ちらねどもかねてぞをしきもみぢ葉は今は限りの色と見つれば

大意 この紅葉は、もう十分に染まつた頂上の色と見たから、追付け散るであらうと案じられて、散らぬ先からサ、惜しく思はれるわ。

評 一ふしはあるが理窟張つてゐる。四句に就いて景樹の「秋來りて移ろひ行く紅葉は、梢の枯れ衰ふる限の色と見つれば」と解したのは牽強である。

やまとの國にまかりける時、佐保山に霧の立てりけるを　きのとものり

見てよめる

たがための錦なればかあき霧のさほの山べをたちかくすらむ

釋 ○佐保山　大和國添上郡にあり、春日山の西北に當る。佐保川、佐保路など、皆この附近に散在してゐる。

○たちかくす　「たち」は霧の立つをいふ。錦の緣語で、斷ちをかけたのではない。

大意 この佐保山の紅葉は、誰れの爲に大切にして置く錦であるかして、他人には見せまいと、秋霧があゝも立つて隱すのであらうぞ。

評 折角紅葉を見ようと思ふものをの餘意がある。佐保山は、奈良の舊都の北部を遮つてゐる岡陵たる奈良山の一部で、もとこれ柞の紅葉を以て聞えた名所。友則がこの行は、啻にこの佐保のみでない、立田などの歌枕をもかけての旅であつた。蓋し大和路の秋色を賞するつもりであつたらしい。それを遠方わざ〳〵來たかひもなく、佐保山の紅葉は、濃霧が遮蔽してゐる。遺憾千萬の極に發した「誰がための錦」の一語、これ當然起りさうな廻り氣である。霧を擬人して、意地惡くも隱すものと見立てた。この際紅葉を寸金と稱する錦に譬喩したことは、最も賢い手段で、貴重品たる聯想から、「たち隱すらむ」の疑念が自然に聞えてくる。自然の現象に對してさへ、こんな嫉妬じみた口吻を洩らすことは、この作者がいかに自然に親みあこがれて、それを自己の生活中の物としてゐるかがわかる。

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

秋霧はけさはな立ちそ佐保山のはゝその紅葉よそにても見む

釋 ○はゝそ　柞と書く。小楢の葉に似て、薄く紅葉する木とぞ。

大意 秋霧はいつはともあれ、今朝はさう立つて呉れるなよ、そのわけはあの佐保山の柞の紅葉を、せめて餘所ながらなりとも見ようわ。

評 初二句は春歌上に「春日野はけふはな燒きそ」とあると同じ語法である。「は」の辭の用法に、特殊の意味ある事は、そこに説明してあるから參照されたい。「餘所にでも」の遠慮勝ないひ方に、如何にも大切な物らしく思はれて、秋霧の立ち隱すのも尤もなやうに聞きなされる。何時はともあれ今朝はと希望したのに、紅葉を愛賞する熱情の等閑でない趣が見える。生憎霧の立ち渡つた朝、佐保山に行き合はせて、失望の餘りに詠んだのである。

六帖に、二句たゝずもあらなむとあるが、思ひ入り淺く、又三句、新撰萬葉にはたつた山とあるも、柞を同所に詠み合はせた例を見ない。すべて本文の方が可い。

秋の歌とてよめる　坂上是則

さほ山のはゝその色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな

大意 この佐保山の柞の紅葉の色は、あまり照らないで薄いけれども、それとは反對に、秋の景氣は思ひかけず深くもなつてしまつた事よ。

評 紅葉の頃は卽ち暮秋なので、柞の本色は薄いながらも、秋の深さは知られると、兩者を反映させたのが、一すした機智である。色でいふ薄いは卽ち淺い事だから、淺深の對照が禪密で面白くない。

家集には、三句淺けれどとある。

さて以上の紅葉の歌は、色付きはじめから盛の頃までを、範圍としてゐる。散る紅葉は、菊の歌の次に別に揭げてある。

人の前栽に、菊に結びつけてうゑける歌　在原業平朝臣

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

釋 ○この詞書、大和物語には、「后の宮より菊召しければ」とある。○前栽　庭前などの草木の植込をいふ。○菊　奈良朝以往にこの名目が見えない。日本後紀、桓武天皇の延曆十六年冬十月の曲宴の條に、「このごろの時雨のあめに菊の花散りぞしぬべきあたらその香を」と、天皇の詠まれた事が見え、又平城天皇の大同二年、神泉苑で、「四位以上挿菊花」と見えて、皇太弟の御歌にも、御製にも、藤袴と詠まれてある。されば菊は奈良・平安兩朝の過度時代に舶來したものだらう。故に字音のまゝに、キクといひ、香草の類なので、藤袴とも呼んで、稱呼が一定しなかつたものと見える。又菊を新撰字鏡に、「辛與毛支、和名抄に加波與毛木、可波良於波木」とあるを、鹿持雅澄は、「これは昔よりある野菊の名稱にて、今茲にいふ菊の事にはあらじ」と云つてゐる。さて當時の菊は叢生させて、數多く花を咲かせた作り方で、今の一輪咲などのやうなものでない事は、次

次の歌の趣でも推し測られる。○うゑしうゑば　しかとよく植ゑるならの意。

大意　かうしかと植ゑて置かうなら、今から後、秋の無い時はそれは咲かなからうか、しかしそんなことは無いから、毎年秋のくる度毎に咲かないといふ事はあるまい。この今年の花こそ散るでもあらうが、根まで枯れようか、いや花は散つても、根までは枯れはせぬわ。

評　されば毎年の秋は必ず咲く事であらうの餘意がある。今菊を移し植ゑようとして、まづその行末を祝したのである。普通菊の花は散らぬ物で―稀には散る種類もあるが―それを「花こそ散らめ」といひ、桓武天皇の御製にも「散りぞしぬべき」と詠まれたのは甚だ疑はしい。これは花の衰へた極を、一般の花の上からの聯想で、散るといつたと見たい。眞淵が、「大方の花に準へて散ると詠めり。撫子などにも、萬葉に散らまくをしもと詠み、後撰に大和撫子散るよなきやはと詠める、皆然り」と云つたのは妥當の說である。さて人の庭前に菊を贈つて植ゑるとて、行末を祝つた歌まで添へての親切さ、いつれ然るべき方の前栽であらう。或は大和物語の傳へる如く、后の宮の前栽かも知れない。幾秋も永久に咲くであらうの意を表現するに、直說を避けて、側面から說明したのは、春上の「世の中に絕えて櫻のなかりせば」の歌も思ひ合はせられる。且歇後の語を弄して、あながちに說き盡さぬのはこの朝臣の慣手段で、その含蓄の餘意が多いのもこれが爲、紀氏に、「心餘ありて詞足らず」と評せられたのも、亦これが爲である。根にまでいひ及んだのは移植の際だからで、これは花の附いたのを植ゑたのである。この時分の菊は、今日賞翫するやうな大輪の物ではなくて、全く野菊に近い種類の物であつたらうと推察される。古い繪畫などで見てもさうである。三段に切り調へて、句々力量あるうへに、意詞、曲折して姿致多く、聲調も花やかである。

寬平の御時、菊の花をよませ給ひける　　敏行朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

この歌は、まだ殿上許されざりける時に召しあけられて仕うまつるとなむ。

釋　○久かたの　雲の枕辭。○雲のうへ　禁中を喩へていふ。禁闕を天上に擬へる事は支那の典故で、擧例に堪へない。○あまつ星　空の星。「つ」は連辭。

大意　人間界とは格別隔つた雲の上といふ禁中で、かやうに見る菊の花は、さすがに所柄天の星とサ、取り違へられたわい。

評　この菊や必ず白菊であつたらう。禁庭の白菊、禁庭は卽ち雲の上であると思ふと、皓潔なる菊花の色は、燦として星斗の闌干たる光が聯想される。そこで星の樣だと比喩にいふべき處を、星と間違へられたといつてのけた。そこに分別を離れて、感じばかりに動いてゐる作者の樣子が見えて面白い。六帖に兼輔、

けふ引きて雲ゐにうつす菊の花あまつ星とやあすよりは見む

構想が同一である。思ふに兼輔は後輩だから敏行のを踏襲したのであらう。尤も敏行のも獨創の想ではあるまい。新撰萬葉にも、

初句、傳貫之本にもかうある。群書類從本の家集に、うゑしうへはとあるは理は立つてゐるが、語法が今めかしくて、貞觀時代のものでない。契沖もこの意に解してゐるが諾け難い。伊勢物語の眞字本には遷植者（ウツシウエハ）とあり普通本の業平家集にもさうある。これは最も平易ではあるが、なほ本文が優つてゐよう。

大空をとりかへすとも聞かなくに星かと見ゆる秋の菊かな

とあつて、菊を星に譬へることは、當時の套語と思はれる。然し禁庭の菊花を仰によつて詠んだものとしては、頗るその體を得てゐる。

左註は、殊更に趣あるやうにと、後人の書き加へたさかしらだらう。既に詞書で事情は明らかではないか。又この左註に拘泥して、「雲のうへ」を殿上の事に解した說もあるが、すべて當らぬ事である。敏行は、夙く仁和年中に、右近少將藏人を歷任して殿上人となり、寬平の頃には權中將藏人頭にまで昇進してゐたではないか。左註の說は全然虛妄である。

結句の「ける」一本にぬるとあるはわるい。

是貞のみこの家の歌合の歌　紀友則

露ながらをりてかざさむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるべく

釋 ○露ながら　露のおきたるまゝの意。○かざさむ　「かざす」は髮挿すの義から出て、この頃は、花草或は造花などを冠の巾子の根に挿すことをいつてゐた。○おいせぬ　年寄らぬ。

大意　何時までも長生して、年の寄らぬ秋の久しくあるやうに、この菊の花を露の置いたまゝ折つて、頭へ挿さうと思ふわ。

評 菊の露は齡を延べる物と定めての趣向である。これは爾雅に菊の異名を擧げた末に、

延年有二柴桂一、氣香而味美者、服レ之可二已レ疾延レ年。

風俗通に、

南陽酈縣有二甘谷一、谷中水甘美、上有二大菊一、落水從レ山流下得二其滋液一、谷中人家飲二此水一、上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲レ夭。

とあるなどを取り合はせて、典故としたものと見える。但藥用として服する場合の外は、風俗通の本文を典據とするから、この時代には、延齡には露を必要として詠み合はせてゐる。後世のやうに、菊の花のみで延齡をいふやうな事はない。又いふ、古人がこれを彭祖の故事としたのは無稽である。彭祖の事は、莊子、列仙傳、楚辭王註等に出て、長壽の仙人だつた事は見えたが、菊花に何等の關係をも持つてゐない。但太平記や、謠曲に見えた枕慈童（菊慈童といふ）は、彭祖と酈縣の故事とを撮合したる小說で、後世佛徒の附會した所爲と思はれるから、この集の歌の本據に引き出すことは出來ない。

時の花をかざしにすることは、物の折の所爲で、これは九月九日の菊花の宴の折などを思つて詠んだらしい。菊の露を着綿に移して、身内を撫でなどして、不老長生を希ふことは常であるを、こゝは露をかざすといふが新案である。句は、四、五、三、一、二と次第すればその意が得られる。流麗和諧、壽命の延びさうな氣持のよさがある。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　大江千里

うゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

釋 ○見し　こゝでは見る意ではない。思ひしの意である。

大意　春植ゑた時、何時花の咲くことかと待ち遠だつた菊、その菊がやれ咲いたと思ふのに、かうも早く盛り過ぎて、色の變る時節に逢はうと思つたことか、さうは思はなかつたものを。

評　待つた時間の長いに似ず、盛りの時間の短いといふ矛盾を基調として、その意外を驚く詠歎の味ひを籠めようとしてゐる。卽ち待つた間が長いから、盛りも長からうといふ論理は、事實ですぐ打ちこはれる不理窟だから面白い。うつろふ時とあるべきを、「うつろふ秋」と轉義して、初句の「時」の語にさし合ふを避け、かねて植ゑし時の春に暗對させた。三句、結句の促調相呼應して、節短く意促る。

新撰萬葉に、下句うつろふ秋はあはれとぞ見るとあるは平凡で、一半の味ひを減ずる。

おなじ御時せられける菊合に、洲濱を造りて、菊の花植ゑたりけるに、くはへたりける歌

ふきあげの濱のかたに菊植ゑたりけるをよめる　すがはらの朝臣

秋風のふきあげに立てるしら菊は花かあらぬか浪のよするか

釋　○おなじ御時云々　「おなじ御時」は、上の詞書を承けたので、寬平の御時をさす、卽ち宇多天皇の御代である。年月は定かでないがその御代に菊合とて、名所の模型を洲濱臺の上に作つて、それに菊を植ゑ歌を添へて、左右に片分けて、勝負を爭つた風流の遊戯を宮中に催されたのである。「かた」は形で、型の意にも、繪の意にも用ひる。こゝは初の方の意である。洲濱は、もと祝日の飾物を据ゑるに、洲の形がふさはしいので、それに一定した臺で、今の島臺といふ物に似てゐる。その形を洲濱形といつてゐる。その時の記に、

左方占手の菊は殿上童だつ君を女につくりて、花におもてを翳させて持たせたり。今九本をば洲濱を作りてぞしたる。その洲濱のさまは思ひやるべし。面白き所の名を附けつゝ菊には結びつけたり。右方これも殿上童、ちご、藤原重時、安房の守ひろしけがむすめがみて、菊どもおほすべき洲濱をいと大きに作りて一つに植ゑたれば、持て出づるに處狹ければ、おし合はせては一つになるべく構へて、割りて和をつけて、ひとたびにおし合はせて出さむと構へたるを、左方の一本づつ出すに驚きて、たび〳〵に出しければ、合せ果てたればいと面白き處一つなれど、合はする程は割れていとかたはなり。

と見えた。さてこの歌は左方八番の歌、次の大澤の池の菊はおなじ方二番の歌、又次なる仙宮の菊は右方七番、人の人待てる菊は、おなじ方十番の歌である。このはじめの條の詞書は、これ及び次の三首へわたつた大綱で、「ふきあげの濱の云々」以下、歌毎の端詞はその細目である。

「すがはらの朝臣」の署名が、他の體と變つてゐる。これは菅原道眞の事で、この菊合の頃は大納言であつた。されば大納言の書例と見ておかう。然しこの集奏上の頃は既に勅勘流罪に遭つてゐたから、署名は出來ない筈である。或はもとよみ人知らずとあつたのを、古本の筆者が心覺に、假に「すがはらの朝臣」と書き付けたのが、そのまゝ世に流布したものと思ふ。

○ふきあげの濱　紀伊國和歌山の西南、和歌の浦の北にある。顯註に、「吹上の濱とは、風のいたく吹きて濱の眞砂を吹き上ぐるが面白き云々」と見え、庵主の熊野紀行、公任集の詞書、藤原爲家、釋正徹等の歌にも、同

じ趣にいひもし、詠みもしてあるから、砂を吹き上げるので附いた名と見える。○ふきあげに立てる　吹上。濱に立てるの略。秋風の吹くとかけた。「あげ」にまではかゝらぬ。

大意　秋風が吹くと、吹上の濱に生えたあの白い菊は、それが全くの花であらうか、いやさうでは無いか、それとも濱の事だから、波の寄せるのであらうかと思ひ惑はれるわ。

評　海濱に叢生した白菊の樣を思つたのである。秋風の吹くにつけて打ち靡くさま、所柄打ち寄する浪とも見えるので、それを云はう爲に、先づ「花か」とおき、次に「あらぬか」と打ち返したので、この二語は、結句の前提となつてゐる。かく「か」の疑辭を疊用して、三段に切り調へたので、節短く、音促つて、いろ〳〵に見惑ふ情態がよく表現されてゐる。この叙法は早く伊勢物語に見える。

君やこしわれや行きけむおもほえず夢かうつゝか寐てかさめてか

はるゝ夜の星か川邊の螢かもわが住むかたのあまのたく火か

又花の浪に紛ふも、又浪の寄するも皆風のせるだから、初句の「秋風」が一首のうへに活動して、今も浪が白く、菊がきれいな吹上の濱邊に、秋風のさわやかに吹く樣子が想見される。通體一の曼聲弱字なく、筆々矯健で、のみならず、下句ァ列音が多くて、聲調花やかに勁い。定家もこの集秀歌十首の一に擧げてゐる。素性集に、

あき風のふき上の濱のしら菊は浪のよするか花のさけるか

は、全くこれと符合する。對比してこの歌の措辭の巧妙さを知るがよい。恐らくはこの歌の轉訛して傳はつたのを、後人の誤つて素性集には加へたのだらう。

廣蔭が顯註に泥んで、初二句、秋風の砂を吹き上げと解し、四句を、花か、さにあらずして砂かと解したのは、

失笑する程の牽强である。

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　　素性法師

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年をわれはへにけむ

釋　○仙宮に云々　仙家に菊をいふは酈縣の故事である。上の「露ながら折りてかざさむ」の條參看。○山路　仙家へ通ふ山道をいつた。○つゆのまに　つゆのまなるにの意で、「つゆ」は僅なるにいふ。それに露をかけた。

大意　自分は仙人の住居に往きは往つたが、その山路の菊の露に、着物の濡れたのを乾かす間ほどの、僅の間だと思ふを、何時まあ千年を自分は過した事であらうか。

評　これは驚いた事よの餘意がある。仙宮に往つた人になつて、その感想を述べた。殊に注意すべきは、詞書に從へば現在仙宮を訪うてゐるのだが、歌に「いつか千年をわれは經にけむ」とあるので見ると、既に仙宮から歸つて來ての感想である。すると晉の王質といふ樵夫が、爛柯山に入つて、童の碁を打つを見てゐた間に、斧の柄が朽ちてしまつたといふ、述異記に見えた故事を思ひ寄せたらしい。菊の花の面白さに、うか〳〵とその中を分けて、不知不識、袖袂の露に濡れた趣を、「ぬれて」といひ、さて歸つて來た趣を、「乾す」と續けて、主語の袖又は袂の語を略いて利かせた簡潔の妙、東坡が餓蛟取渴虎の句に匹敵する。「つゆのま」の秀句も自然で、たえて卑俗の氣がない。「いつか」とおける疑問の語、三句に對へて、驚歎の意がいよ〳〵著しい。俊成もこれを評して、

「ぬれてほす」とおける五文字の洵にめでたく侍るに、又「山路の菊の露のまに」といへるも有り難く侍るによりて、末の句も何となく引かれて皆いみじく聞え侍るなり。

と讃歎し、わざ〳〵これを祖述しては、

山人のをる袖にほふ菊の露うちはらふにも千代はへぬべし

と歌つた。景樹がこの集中の菊花を詠んだうちでの隨一と稱へたのは尤で、想に於てはさもないやうだが、洗煉の極、一の冗字一の煩語がなく、全く下界の塵垢を斷つて、仙鄉に羽化しさうな趣がある。各種の韻を平等に分配し得て、聲調の宛轉流麗なる事は、白玉の盤上を走るに似てゐる。

下句、家集にいかでかわれは千代をへぬらむとあるが、本文の方が遙に優つてゐる。景樹は、選勒の際、撰者達が引き直したのだらうと云つてゐる。六帖に「いつか」をいかでとあるのは最もわるい。

菊の花のもとにて、人の人待てるかたをよめる　とものり

花見つゝ人まつときはしろ妙の袖かとのみぞあやまたれける

釋 ○しろ妙　こゝは袖の枕詞ではなく、白色の意に用ひてある。釋は春上「春日野の若菜つみにや」の條に既出。

大意 庭の白菊の花を見いゝくして、來る人を待つ時は、その白い花を、その待たれる人の白い衣の袖では無いかとばかりサ、取り違へられたわい。

評 これも待つてゐる人になつて、その感想を詠んだ。白菊を白妙の袖と見あやまるのは、白衣酒を送るの故事で、續晉陽春秋に、

晉陶潛九日無レ酒、宅邊有二叢菊一、摘レ之盈レ把、望二白衣人至一乃太守王弘送レ酒、酌而醉歸。

とあるに據つた。但淵明は、白衣の人を待つてゐたのではないが、こゝは又酒の使がくるかと、人待つ趣に取り成した巧である。二句の「は」の辭に力があつて、いつもはさうでもないが、人待つ時は錯たれるといふのである。菊の故事を用ひて菊の字を着けない。却つてあつさりしていゝ。

大澤の池のかたに、菊植ゑたるをよめる

ひともとゝ思ひし花をおほさはの池の底にも誰れか植ゑけむ

釋 ○大澤の池　廣澤の池のことで、山城國葛野郡上嵯峨にある。もと嵯峨帝の離宮の境内に屬してゐたといふ。池中にある一嶼を菊島と云ふが、それは昔菊の花のあつた故といふ。或は却つてこの歌から付けたのかも知れない。○ひともと　一株といふほどの意。必ず一本と限つたのではあるまい。○おほさはの　大澤におほさは（多數）の意をかけたとする說は當らない。○花を　花なるをの意。

大意 只一本と思つた菊の花なのを、それにまあ水中に花の見えるのは、岸ばかりか、この大澤の池の底にも誰れが植ゑた事であらうぞ。

評 澄潭秋影を涵したのを、直に見て以て水中に花ありとするは、一轉瞬の幻影のみ。この幻影を捉へて趣向を立て、それを實在のものとして驚訝した、この一切の理窟を拋却したのが、卽ち詩境である。雜上に、

二つなき物とおもひしをみな底にやまの端ならでいづる月影

と貫之の詠んだのも同巧異曲。

二句、家集及び顯本の註に、思ひし菊をとある。詞書を離せば、菊をの方がたしかであるが、すでに菊の名所なる大澤の地名を詠み入れてはあるから、「花を」とある方が大らかで宜からう。四句、家集には底までとある。又諸本ともに作者の名が特記してないから、これも前のと同樣、友則の歌と見るべきであるが、元來菊合は、一首づつ作者の異なるのが普通だから、若し前後いづれかは坂上是則の作なのを、轉寫の際、是の字を友の字と見誤つて皆友則の作と思ひ、遂に名をば略いたのではあるまいか。家集は素より後人の輯錄したものだから、證にはし難い。

世の中のはかなき事を思ひける折に、菊の花を見てよめる　つらゆき

秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

釋 ○世の中のはかなき事を思ひける折に　人世の無常なる事を感じた折に。○匂ふ　美しく咲いたのをいふ。馨る事ではない。○花よりさきと　「と」はともの意。○知らぬ　知られぬの略。○わが身を　わが身なるをの意。

大意 この面白い秋の菊の、咲き匂ふ間一バイは、髮挿して遊ばうと思ふわ。なぜといふに、自分の死ぬ事がある花の枯れるより先とも測られぬ、はかない我が身だものを。

評 李太白が、

「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢、爲懽幾何、古人秉燭夜遊良有以也。」（春夜宴桃李園序）

「處世若夢、何爲勞其生、故以終日醉、云々。」（春日醉起）

と喝破したのにその意吻合し、悲觀のうちに樂地を覓めて、刹那の享樂に慰藉を求めようといふ、しかもそれが、作者の身世のはかなさを感じた術なさの餘りに出た矯語であるのが、却つて哀れである。「かざしてむ」は、遊ばむの轉義である。盛りの長い菊の花とはかない命と、暗々裏に對映してゐる。下句の叙法は簡潔。

しら菊の花をよめる　凡河内躬恒

心あてにをらばやをらむはつ霜のおきまどはせるしら菊の花

釋 ○心あてに　當推量にの意。○をらばやをらむ　折らば折られようかの意。「や」は疑辭。「をらむ」は折られむの意。古來の說、多く煩はしく曲解してゐる。○はつ霜　秋冬の交最も早く降る霜をいふ。○おきまどはせる　初霜が置いて紛はしくしてゐるの意。

大意 花やら霜やら知れぬやうに、あのやうに初霜が置いて、紛はせてある白い菊の花は、大概當て推量で折つたら折られようか。

評 初霜ならさうは繁かるまいに、白菊を置き惑はして、心あてでなければ折られないとは、餘りな虛誕らしいとの難もあるが、よく思はぬ論かと思ふ。これは前栽などに叢生した數多の白菊を、初霜の零つた朝、簀子あたりから見渡して詠んだのである。手近の草葉などの霜を見て、彼方の菊の白いのも、皆霜かとも思ひ惑はれる

ので、「初霜のおきまどはせる」とは云つたのである。これ常に詩歌の上で見る普通の誇張に過ぎない。さてかう思ひ惑ふのは、則ち霜の樣子を餘り見馴れない初霜の朝に限る景趣だらう。白玲瓏として、些の塵氣だもない。

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

いろかはる秋のきくをば一とせにふたゝび匂ふ花とこそ見れ

大意　初めの程は白く、この頃は紫に色の變るあの秋の菊をば、同じ花であることは忘れ、一年の内に白と紫と二度咲き匂ふ花とサ、これを見るわ。

評　當時は白菊を專ら賞翫した。それが霜の爲に變化して、紅となり紫となる。今日の人はかうなると、衰殘したものとして最早顧みないが、平安時代は紫色にあこがれた時代だから、却つてそれに好處を見出して、推賞したのである。蓋し西施の微顰、太眞の浴後、別趣の更に捨て難いものがたしかにある。變化の遲路を忘れて、全く別箇の花と思つた點が、この歌の山である。「一とせにふたゝび」と數量の語をかけ合はせたのは、春歌下に、

聲たえず鳴けやうぐひす一とせにふたゝびとだに來べき春かは

と、興風の詠んだのに同じい。

仁和寺に菊の花めしける時に、「歌そへて奉れ」と仰せられ

ければよみて奉りける　平のさだぶん

秋をおきて時こそありけれ菊の花移ろふからに色のまされば

釋　○仁和寺に云々　仁和寺は眞言宗の大寺で、光孝帝の仁和四年に御願寺として、京都の西山に造られたので、寺名とした。その後延喜元年に、宇多上皇、御室を立て、其處におはしまされた。この「菊の花召しける」は、宇多上皇の召されたのである。○おきて　さし置いて。

大意　この菊の花は、秋の一盛りはさし置いて、それより後に、又も盛りの時節があつたわい、なぜといふに、花が末になつて來ると、かやうに色が增さるからサ。

評　恐れながら陛下の御上も、この菊の如きかと存じ奉るの餘意がある。「移ろふからに色のまされば」とあるによれば、これも上のと同じく白菊である。初句、盛り過ぎてとあるべきを、「秋をおきて」と轉義したのは、節後の菊を殘菊といつたに同じい。卽ち本朝文粹に、惜二殘菊一各分二一字一應レ制、菅贈大相國、

黃華之過二重陽一、世俗謂二之殘菊一。

と見えてゐる。蓋し菊花は重陽の節のもてあそびであつたから、それを盛りの時として、その以後は秋でもないやうにいひなし、遂に殘菊とも稱したのであらう。若し文字のまゝに、「秋をおきて」を冬になつての意とする時は、この歌は冬部に收めなければならぬ事になる。二句は、盛なる時こその省略と見れば事もないが、なほ思ふに、「時」といふ語は、直に盛りの意味に用ひられたのではあるまいか。時めく、時めかす、時をうる、時の人などいふ語は、その證ではないか。初二句おの〳〵字餘りなのが力量相當して、驚歎の意がいよ〳〵加

はる。構想は前首と同一ながら、宇多上皇が遜位の後も、幼帝を後見られて、なほ世の中をまつりごち給へる御威勢の盛んさを、賀し奉つた譬喩歌である。抑も、「歌そへて」と御下命のあつたのは、作者平仲は、歌詠むと世に知られた男だからである。卽ち取りあへず移ろひ方の白菊に、これを添へて奉つたとすると、宇多上皇は、どんなにか興に入られたことだらう。この諷託寄興がないとすると、殆ど愚作に近からうに。

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよめる　つらゆき

さきそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

釋 ○宿し　「し」は強辭。○うつろひにけれ　花の衰へた意に、移轉の意を響かせてある。

大意 咲きはじめた家がサ變れば、この菊の花は場所ばかりか、花の色までもサ變つたわい。

評 植ゑ換へた菊花の萎れたのを見て詠んだ。移植の爲に萎れたのを、宿柄ゆゑに萎れたやうに取り成した。「うつろふ」の語に縋つた秀句、手があり過ぎる。

題しらず　よみ人しらず

佐保山のはゝその紅葉散りぬべみよるさへ見よとてらす月影

釋 ○散りぬべみ　「べみ」は「べくて」の意。○はゝそ　上出。

大意 あの佐保山の、柞の木の紅葉が散りさうであるので、晝ばかりか、夜までも人に見よといつて、照らすこの月の光であるよ。

評 柞の葉は極めて晩く散る。それが秋は末で、一般の草木でさへ凋落しようとする頃だとすると、夜の間の風もうしろめたく覺えるから、自然夜を晝に續いで見たい念がおこるではないか。さる折しも照り渡る月なので、意で對へて、「夜さへ見よと照す」と、月に親切氣があるやうに取り成した。自然を愛する風流な月ではないか。これ卽ち作者の風流な心、親切な心から出た解釋である。後撰集に、

照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉をよるも見よとか

と同趣ながら、これはさやけきと道破しないで、さやかな趣がめぐつてゐるから妙だ。

三句、六帖に散りぬべきとあるは調はない。

以下、散紅葉の歌を擧げてある。

宮づかへ久しう仕うまつらで、山里にこもり侍りけるに　藤原關雄

よめる

おく山のいはがき紅葉散りぬべしてる日の光見る時なくて

釋 ○宮づかへ　大宮に奉仕すること。仕官。○いはがき　岩ほの疊なはつて欹つのをいふ。景樹はいふ「岩蔭を轉じてイハカキといふ。垣の意にはあらず」と。「がき」は或は崖（ガケ）の意か。

大意 この深山の岩がきの紅葉が、このまゝで散つてしまひさうな、日の目もろくに見る時がなくてサ。

評 口惜しい事よの餘意がある。詞書の趣で見ると、紅葉を自身に、天恩を照る日に喩へて、不遇にして恩光に

俗する事も出來ないで、徒に山林に朽ち果てる事を慨いたのである。文德實錄に、

關雄習屬レ文、性好二閑退一在二東山舊居一、耽二愛林泉一、時人呼爲二東山進士一。

とあるから、詞書の「山里」は、今の京都の東山である事は明らかである。この歌は、進仕祿を干すの意があらはであるのに、史には好二閑退一といひ、後にも折角の淳和上皇の徵をも、一應固辭した事などを併せ考へると、頗る行動に矛盾がある。しかも、間もなく召命に應じて出仕した事を思ふと、渠れ關雄は必しも閑雲野鶴の質なのではあるまい。徒に狷介廉潔なる高士の名を竊まうとしたものか。否々渠れは右大臣內麿の孫、眞夏の五男で、藤氏とはいへ實は支流で、その無勢力なる事は、他の諸氏族と何の擇ぶ處もない。才なく學なき徒輩も、家の子は重用されるのを見て、流石に憤慨に堪へなかつたらう。これ念を仕官に絕ち、心ならずも名を閑退を好むに託して、東山に隱遁した所以だらう。されば心常に朝廷を懷うて不遇を憾み、陸沈を愧ぢてゐる。たまたま日影の疎い岩頭の霜葉が、おのづからわが境遇に似たのを見て、卽ちこの諷託比興の言を爲して、測らず胸中の祕密を洩らし、機微を露はしたものだらう。感慨が字句に溢れてゐる。

二句、六帖の一本に岩かけ紅葉とある。

題しらず

たつた川紅葉みだれて流るめり渡らばにしきなかや絕えなむ　よみ人しらず

この歌はある人「ならの御門の御歌なり」となむ申す。

評 ○左註「ならの御門」を、舊說に文武帝といひ、或は聖武帝なりともいつてゐるが、なほ平城帝の御事と見た方が穩やかだらう。歌の風格も、奈良時代のものでは決してない。眞淵は、はじめから左註を排してゐるから、全然問題にしてゐない。○たつた川　次の歌の條を見よ。

大意 この立田川の一面に見事なのは、紅葉が散り亂れて流れるやうであるわ、これでは今渡つたら、あつたら錦の中が斷たれるであらうか。

評 當惑の事かな、どうしたものだらうかの餘意がある。駒の爪が漬くぐらるの、さうした山川を徒涉しようとすれば、紅葉亂點、波を逐うて轉じ去るを見る。詩に、馬蹄無レ處レ避二殘紅一といひ、赤染衞門が「踏めばをしふまねば行かむ方もなし」などいつた落花のさまにも似て、ほんとに途方にくれてしまう。涉りかねて躊躇してゐる作者の態度が、眼前に彷彿する。川涉りは、往代では常の事で、橋の無い淺川は大抵徒涉であつた。その慣習から「渡らば」と假定的に想像を描いてきたのである。「渡らば錦」の省筆、また大いに注意すべき辭樣である。その紅葉を、川波に晒した蜀錦に譬へたことは、卽ち中の絕える事を惜む情を、强く深く印象せしめる。四句の促調、上來の緩調を拯つて、節奏が諧ふ。景致面白く、聲調又花やかに勁い。

二三の句、大和物語、及び六帖にもみぢ葉おちて流るなりと見え、又顯本には、三句かゝるなりとある。

○

たつ田川もみぢ葉ながる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすか川もみぢ葉ながる　［此歌不注人丸歌］

釋 ○たつ田川　この所在、古來の集説である。或は山城國の山崎川(淀川)といひ、或は大和國高市郡神南備神社のおはします山は御室山で、その麓の川が立田川だといふ説もあるが、信じ難い。又これを、龍田の立野にもとめて、龍田の大川をこの立田川とし、神なひ山も、神なひの森も、ならしの岡も、この附近とした説もあるけれど、秋歌上「神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なひの森」の歌の例に從ひ、立田川も、御室山も、神なひの森も、皆大和國平群郡立田村と定む。但これはこの集以後の歌に限ることである。抑も「神なひの森」は、神の森の約、「みむろ」は、神の御室の義だから、あながちに一所に固定した名稱でない事は、萬葉集に、三輪山をも、神岳をも、共にみもろ(みむろの音通)と詠んであるのでも知られる。

大意 この立田川に、紅葉の葉が流れるわ、定めて川上の神なひの御室の山に、時雨が降るらしいわい。

評 散る紅葉から、川上の山に時雨のかゝつた事を想定した。時雨に紅葉の散る趣は、萬葉集中に數多見えたことで、珍しくもないが、これはそれを逆寫してゐる。藤原家隆が、結句を、嵐吹くらしとしたいと評したのは、時代思想の相違を心付かぬ僻説である。體格は蒼古で、風調は高邁である。蓋し南京の遺篇だらう。六帖、及び大和物語に、

あすか川もみぢ葉流るかづらきや山にはいまぞ時雨ふるらし

これと同調とは見えるが、三四の句のあたり、姿が甚しく碎けてゐるから、一列には論ぜられない。又いふ、この歌の採つた叙法は、頗る形式的なもので、蒼古な神韻的の描寫には適するが、變化がなく、想の運用は固定的であるから、再三すると飽かれ易い。平安時代の人士はもう陳腐な形式として、餘り喜ばなかつた。

又左註の「飛鳥川」は、萬葉集卷十三に、

神なひの三諸の神の帶にせる飛鳥の川の、云々。

と見えて、地理もかなつてゐるからそれも悪くはない。この三諸は、大和國高市郡飛鳥神岳である。廣蔭が、後に見えた興風の歌「み山よりおちくる水の色見てぞ」の詞書に、「立田川もみぢ葉ながるといふ歌を書きて」とあるに據つて、左註の「飛鳥川」を否認して、後人の書入と定めたが、この詞書は、他に異説のない證とはならない。こゝは、素より普通に行はれてゐる方を本行に收め、異傳の方を左註に錄したのである。但左註の下に、「此歌不注人丸歌」とあるは、本據のない俗説で、勿論捨つべきである。

○

戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

釋 ○しのばむ　萬葉集卷一、額田王の歌に「紅葉をばとりてぞしぬぶ、青きをばおきてぞ歎く云々」と見えたしぬぶと同語で、賞で愛しむ意である。この外戀ひ慕ふ意と、堪へ忍ぶる意と、密び隱るゝ意との三義あるが茲には關はらない。○もみぢ葉を　しのばむもみぢ葉と續くのである。「を」はなるものをの意。○山おろしの風　山よりふき下ろす風。

大意 今後、紅葉が戀しいならば、それをなりとも見て愛でようと思ふ、大事な紅葉であるものを、そのやうに吹き散らして呉れるなよ、これ山おろしの風よ。

評 美しい紅葉が、颯然とおろし來る山風に吹き立てられて、名殘さへもなくならうとするを惜んで、山風に懇願した、懷かしい詩情である。聲調また沈んで寂しい。廣蔭、雅嘉等が、二句を、枝にあつた時の事を思ひ出

さうの意としたのは、「しのぶ」の語の意を、見誤つた曲解である。

○

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞ悲しき

釋 ○もみぢ葉の　もみぢ葉の如きの意。○ゆくへ　行き方。○定めぬ　定まらぬの意。

大意 秋風に堪へかねて散つて行く紅葉の、何處とも行方の定まらぬやうに、身の成り行をどうともえ定めぬ、自分の身がサ悲しいわ。

評 飄蓬落魄した人の作だらう。何の物思のない人でさへ秋思の催すに堪へない頃に、ほろ〳〵と風に誘はれゆく紅葉を見て、さうした悲觀を懷くのは、自然の數である。譬喩の辭樣は簡淨である。

○

秋は來ぬ紅葉はやどにふりしきぬ路ふみわけてとふ人はなし

釋 ○しきぬ　「しき」は布きの意。

大意 物悲しい秋の時節は來た、紅葉は庭へ一面に散り敷いた、しかもその道も見えぬ程に、散り布いた紅葉の中道を踏み分けて、誰れも尋ねて來る人は無いわい。

評 さても〳〵この寂しいことかなの餘意がある。三段に切りとゝのへて、いやがうへにその上の寂しさを數へ立てた、漸層の叙法が頗る面白い。卽ち秋の來たことは、既に物悲しく寂しいことだが、それでも面白い紅葉があらうなら、稀にも人に訪はれる望が無いでもないのを、それすら散り果てゝしまつては、全く絶望で、いよ〳〵慰みやうもない暮秋の景氣である。初句は、秋の今來る意ではない。契沖が、秋の暮は來ぬと解したのも誤で、只秋の時節になりぬの意である。それを「來ぬ」と擬人したのは、末の「人」とあるに呼應し、さて秋の來たると、人の來ぬとを反映させた。又紅葉は、ちりしきぬといふべきを、「降りしきぬ」と轉義したのも面白い。三疊の「は」の辭以外に、初句の「きぬ」三句の「しきぬ」のきぬの同音を反復し、しかもぬの音を三疊して、韻脚に踏んだのは、聲韻の響應があつて、諧調となつた。況やイ列音の多數なことは、詩意に旨く協調し、凄酸悲涼の情をそゝるうへに、與つて力がある。第二段は、七五の促調で、初二及び、結句は多數音、少數音の排列順が轉倒してゐるので、亦節短く調が迫つてくる。意、詞、調の三者がよく打ち合つて、眞に沈鬱頓挫の妙を極めてゐる。

結句、古本にとふ人もなしとあるは采らない。

○

踏み分けて更にや訪はむもみぢ葉のふり隱してし路と見ながら

釋 ○更にや　「更に」はあらためての意だが、こゝは强ひてといふ意に近い。「や」は疑辭。宣長が反語に解したのは當らない。

大意 この家へ入る路は、あのやうに紅葉が散り舖いて、誰れも來ぬやうに隱してしまつた路だとは見ながら、いつそそれを踏み分けて、强ひてサ見舞はうかしら。

評 暮秋の頃、山里人を音信れた人の作だらう。柴門晝も掩うて、滿地の落葉掃ふ人もない處に、とかく躊躇して佇立んだ狀が、今見るやうである。紅葉意あつて路を降り隱したといふのに、やがて世を厭ひ、跡を晦まして山住してゐる主人の本意が、語中にたどれる。その見すゝ紅葉卽ち主人の本意に背いても、見舞つて見やうかといふに、親切な氣持がいよ〳〵露はれてゐる。「更にや」の語、姿致が頗る多い。これ等の曲折は、一篇の含蓄の餘味を多くする。

結句、六帖には宿と見ながらとある。景樹は「この方、更にや訪はむと云ふまでに反りて宜しきにや。路とあるは、初句のふみわけてに反りとゞまりて、飽かぬ心地す」といつた。尤もと思ふ。但初句、六帖に露わけてとあるは、甚だわるい。四句一本に隱したるとあるが、本文の方面白い。

○

あきの月山べさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よとか

大意 秋の月が、あのやうに山のあたりをあざやかに照らして居るのは、散る紅葉の數を、とくと見て呉れよといふ事か。

評 起首、「秋の月」と打ち出したのは、その淸明な感じを強く印象させる。さて「落つる紅葉の數を見よ」とは算數的に勘定せよの意味ではあるまい。すべて物毎に、一つ〳〵に心のたぐひて數へられるのは、則ち執着した愛惜心の發露だから、此處にも紅葉の散るのが勿體なくて、飽くまで惜しまれる心から、月の照るのをも、散紅葉の數を見よとの親切心であるやうに解釋した。上の、

さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへ見よと照らす月かげ

と、同調の歌である。

○

吹く風の色の千ぐさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり

釋 ○色の　色が。○千ぐさ　千いろ。

大意 この頃吹く風の色が、いろ〳〵に見えたのは、どうした事かと思へば、いろ〳〵に染まつたこの頃の木の葉の、散るからであつたわい。

評 色もない風を、「千種の色に見えつる」とまで誇張した。いかにも紅葉の夥しく散る光景である。强ひていへば、いさゝか浮誇の嫌がないでもない。「の」の音を疊用して、調が緩やかである。元來この歌は、內容がさうすぐれてゐる譯でないから、平叙すると一半の面白味が減ずる。こゝに倒叙の方法を採つたのは、賢い仕打といはねばならぬ。

二句、貫之本に千ぐさの色にとある。眞淵及び景樹はこれを贊した。洵に「吹く風の色の」と續けては、素より風には色があるものゝやうに聞える。春上に「春霞色の千種に見えつるは」の歌の第二句に似たので、傳へ謬つたのかも知れない。

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおればかつ散る

釋 ○霜のたて露のぬき　「たて」は經絲、「ぬき」は緯絲。

大意　霜から出來た經絲、露から出來た緯絲がサ、弱いらしい、そのせゐかして、あの山の紅葉の錦が、折角織り上げるそばから破れて散るわ。

評　紅葉は露霜に遭つて色付くので、露霜の經緯で織り立てた錦と見立てた。萬葉集卷八に。

たてもなくぬきも定めずをとめ等がおれる紅葉に霜なふりそね

懷風藻に、

天紙風筆畫二雲鶴一、山機霜杼織二葉錦一。

とある大津皇子の作や、白居易の句の、「織レ霜織レ露二秋錦一」などを思ひ合はせると、この種の着想は陳腐に屬するが、これを散り方の紅葉に應用して、一層の趣向を構へたのは、作者の手腕である。結句、おれば且亂るゝとか破るゝとかいへば、譬喩が完全されるのを、本體の紅葉のうへに立ち返つて、「散る」といつたのは、齎整の弊を避ける爲に、わざと辭樣を參差させたのかも知れない。卽ちかの萬葉の「おれる紅葉」、藤原公任の「散るもみぢ葉を着ぬ人ぞなき」など、皆錦の一語を著ける事を憚つたもので、不用意に譬喩の完全を缺いたのではないらしい。

三句、六帖にもろからしとある。又結句、貫之本におれどかつ散るとあるはわるい。

雲林院の木の蔭にたゝずみてよみける　僧正遍昭

わび人のわきてたち寄る木のもとは賴む蔭なく紅葉ちりけり

釋 ○雲林院　春下「櫻ちる花の所」の條に既出。○わび人　「わび」は難義に思ふ意なので、不仕合せな人、失意の人、貧乏な人などをいふ。○わきて　取り分けて。○賴む蔭　身の置處として當てにする物蔭をいふ。○紅葉ちりけり　景樹が「紅葉の散る事を、只一句中に『紅葉散りけり』と、急迫に調ぶべきものならむや。もみぢて散りけりの意に聞きなす時は、自然句調もをさまるもの也」といつたのは、甚しい僻言である。字の表面通りに解してよろしい。

大意　不仕合の者が、擇りにえつて立ち寄るこの木の下は、やはり賴む蔭も無く、紅葉が散つたわい。

評 かさね〳〵心細い事かなの餘意がある。雲林院の後園、流石に故王宮の名殘をとめて、千樹の秋色は翫賞に値してゐる。作者はこの院の住持として後園に臨み、たま〳〵わが立ち寄つた梢を仰ぐ折しも、ほろ〳〵と紅葉の散るのを見て、これも立ち寄る人柄による事ぞと嗟歎したのは、外界の景象が端なく胸中の琴線に觸れたものである。以てそのいかに失意の際であつたかが、想像されよう。或は雲林院の法務上の不平などあつた際でもあらう。なほこの歌に就いて一說を試みたい。雲林院の僧正さんは、當時僧界の第一人者で、痩法師や、乞食坊主の境涯とは違ふ。それを「わび人」と我れから名告つて、「賴む蔭なく」などいつたのは、一時の卽興から出た狂意だといひたいのである。そしてこの僧正の例の手法と認めたいのである。三句の「は」の辭に力がある。依つて殊にさう聞える。「わきて」も、この意を補くる大切の語である。俗諺にいはゆる「賴む木のもと雨が濕る」に似て、今一層痛切を極めてゐる。けれど、この僧正の他作に比べると、數等を下つてゐる。